



グレート ギヤッツビー

トスコット・フィッツジェラルド

いつの日か奇跡を起こそう...

目次

免責事項	1
ご紹介	1
訳者のひとりごと	2
前書き	4
第一章	6
第二章	22
第三章	34
第四章	50
第五章	66
第六章	78
第七章	90
第八章	114
第九章	126
最後に	
今、グレート・ギャツビーを読みながら考える	140
年表	142

免責事項

翻訳の内容については細心の注意を払っておりますが、個人的見解も含まれており、保証されているものではありませんので、あらかじめご了承ください。

コピー、引用はご自由ですが、できましたら訳者の名前（ソラ・ジューン）を添えていただければ幸いです。

ご紹介

作者紹介

F・スコット・フィッツジェラルド

一八九六年九月二十四日、アメリカはミネソタ州にアイルランド系の両親の元に生まれる。幼い頃から利発で早い時期から文学に興味を示す。一九一三年にプリンストン大学に入学。詩作や演劇の脚本で文筆をふるい、将来、自身の編集者となるエドモンド・ウィルソンと親交を結ぶ。一九一五年に当時の社交界の花である、ジネブラ・キングと二年間交際するがキングの家族から「金持ちの娘は貧しい家庭の息子とは結婚できない」と反対され、この経験がグレート・ギャツビーのプロットに生かされる。一九一七年から一九一九年までアメリカ陸軍に従軍し、駐屯地のアラバマで、将来の妻となるゼルダと出会い、二人はジャズ・エイジの黄金カップルとなり一世を風靡する。しかし、一九二九年からの大恐慌に抗えず、ハリウwoodsの脚本家となり虎口を凌ぐも、失意の元、アルコールに溺れ一九四〇年に四十四歳でこの世を去る。一九二五年に執筆されたグレート・ギャツビーの真価が認められたのは彼の死後である。

訳者紹介

ソラ・ジューン

シドニー工科大学修士課程卒業

様々な企業に勤務しつつ、日英の翻訳業を業務の一環としてこなす。翻訳歴は二十年以上。業務翻訳の他に趣味としてパブリックドメインの英語作品の翻訳に取り組む。作品はブログに掲載。<https://soraike123.hatenablog.com/>

<https://100rosylives.com>

ツイッター @SoRaJune3 シドニー在住

訳者のひとりごと

この本を初めて手にした時、語り手のニックの父親のアドバイスが衝撃的だった。「誰かが気に食わない時は思い出してみるんだ。この世の誰もがお前ほど恵まれてるわけじゃないってな」

そして息子のニックはこう考える。

「親父はそれ以上言わなかったけど、言葉にしなくてもいつも通じ合える仲だったんで、そこに言葉以上の深い意味がこめられているのを感じてた」

この親子にははっきりと流れ通う愛情があるんだなとつくづく思った。そしてこのアドバイスがニックのバックボーンとなり、様々なシーンで顔を出す。

ニックの周りには海千山千の人間ばかりだ。中には許しがたい人もいる。でも、ニックは自分の想像力を目一杯働かせて、できるだけ相手を理解しようとしていくのだ。もちろん、最終的にニックは行き詰まったかのようにも見える。でも、ギャッツビーの大きな夢を譲り受けて立ち上がり、何年かかかったにしろ、以前よりもっと賢く優しい人間に成長したのではと思ってる。そしてそう読むことでこの物語を今に活かせるのではないかと思ってる。

僭越ながら自分のことを少し語ろう。「おんな子どもには価値がない」これが自分の父親の口ぐせだった。自分には価値がないという意味かと思いつつ、それでも生きていこうと思っていた。この口ぐせに一番傷ついていたのは自分の母親で、何か気に入らないことがあると腹の底から「お前なんか死んでしまえ」と子どもに向かって叫んでいた。

「価値がない」「死んでしまえ」親から受けたこの二つの呪縛を意識の上では完全に無視することに成功したものの、あまりに長い間言われ続けてきたので無意識下にしっかり刷り込まれ、それが辛いのでいつの間にか感情と理性を切り離して、自分の感情から目を背けてきた。そして気づいてみれば、自分がどんな人間でどう感じているのかさっぱりわからなくなっていた。ずいぶんと長い年月がかかったけど自分の弱点に気づいて良かったと思う。

自分も大人になって責任を負うようになってから、自分の父親にとって、仕事が辛くても逃げられず、女ばかりの家族を養うことがあまり生産的には見えなくて、その苦しみがああセリフに凝縮したのがわかる。もちろん男女平等の世の中でこの考えは不合理ではあるが、ニックの父親が言うように、彼はそういう価値観の元で生きるしか選択肢が無かったのだ。自分の母親も、一家の主婦となってしまう、若かった時代の夢が無残にも枯れ果てて、子どもさえいなければ自由の身だったのという思いがああ言葉になったんだろう。思いがけず自分は日本を離れることになり、見聞も両親よりは広げることができた。たくさんの人に支えられてきた。そして本から学べることはあまりにも多かった。子どもの頃から精神的に麻痺していた分、自分にはたくさん経験が必要だ。本から得られる擬似体験は何ものにも代えがなかった。

この本をできるだけたくさんの人に読んでほしい。だけど、先生方が訳されてるニュアンスが自分が求めている訳と少し違っていた。ニックは自分たちの代弁者であってほしい。登場人物が自分と近い言葉でしゃべってほしい。まるでそこに自分がいるかのよう

に。

主人公ギャッツビーの決め言葉「オールド・スポーツ」の重要性はよくわかる。だけど、自分がほしい訳はいかにも翻訳という香りがする訳じゃなかった。ほしかったのは二十一世紀の今、自分がしゃべっても違和感のないセリフだった。だから「オールド・スポーツ」は全部「君」と訳されている。

忙しくてこんな本は読めないという人もいると思う。

でも、心の豊かさが大事な今だからこそ受け取ってほしいメッセージがある本なので、巻末に自分が思うメッセージを書いておいた。もちろん自分の書くことが全てをカバーするものではないし、全くの見当違いということもあり得るけれど、この本のエッセンスを感じてもらって、何らかの助けになるのであればうれしい。

どうかこの本が理解されてたくさんの人に届きますように。そして悲しいのに泣くことも知らない子どもがいなくなりますように。苦しさを子どもにぶつけることしかできないお父さん、お母さんに、この世の温かさが伝わりますように。彼らの苦しみが癒されますように。そう祈りをこめて一生懸命書きました。ここまで読んでいただいてありがとうございます。そして自分にこの世で生きるチャンスを与えてくれた両親に心から感謝しています。

訳者 ソラ・ジューン

前書き

だからあの娘の気をひくんなら
金色の帽子をかぶりなよ、
もし高く跳べるんなら
あの娘のために跳び上がりなよ、
あの娘がこう叫ぶまで、
「君！ 金色の帽子をかぶって
高く跳ね上がってるロマンチックな君！
わたしのものにしなくっちゃ！」

トーマス・パーク・ダンヴィリエ

もう一度、
ゼルダ、君のために

第一章

オレがまだガキで今より傷つきやすかった頃、親父が言ってくれて、それ以来、時々思い返す言葉がある。

「誰かが気に食わない時は思い出してみるんだ。この世の誰もがお前ほど恵まれてるわけじゃないってな」

親父はそれ以上言わなかったけど、言葉にしなくてもいつも通じ合える仲だったんで、そこに言葉以上の深い意味がこめられているのを感じてた。だから親父の教えに従って、他人を色眼鏡で見るのをやめたら、おかしなヤツらがかなり寄って来たり、退屈を持って余してるヤツらの格好の餌食になったこともずいぶんあった。

変わり者は、まともなヤツがそんな努力をしてるのを素早く嗅ぎとってそばに寄ってくるよね。その結果、大学では策士というひどいあだ名がついてしまった。まだ相手を知りもしないのに、常識外れの男たちが心に秘めてきた悲哀を聞いてやってたものだから。

でもオレから人の気をひきたいと思ったことはほとんど無かった。むしろ、向こうにチラチラと友だちになりたいというような気配を感じようものなら、眠ったフリをしたり、他のことで忙しそうにしたり、失礼な態度をとったりした。若い野郎が親しげに悩みを打ち明けたりとかそんな時使う言葉だなんて、どうせどっかからの借り物だし、見栄とかで押さえつけられてて本音なんか吐くわけないし。それでも、人を色眼鏡で見ないという処世術は無限の希望になった。今でも、この教えに背いたら何か大事なことを忘れてるような気分になっちゃう。傲慢といえそうなんだけど、親父が言ったとおり、そしてオレも言っちゃうけど、人間の品性の土台は、不公平にも生まれで決まってしまうものなんだ。

ところで、我慢強さを誇りにしてるだけじゃなくて、自分の限界に気づいてることも言わないとね。その人の振る舞いが、固い岩を基盤にしていようが、ジメジメした沼地を基盤にしていようが、そんなことどうだって良くなる限界点っていうのがあるんだ。昨年の秋に東部から戻った頃は、その先世界がずっと一つで、いつも善悪の判断が最優先される場所であって欲しいと願ってた。人の心の中を垣間見る特権が与えられて、その中へ大騒ぎしながら入りこむなんてもうこりごりだった。

ただこの本のタイトルになっているギャッツビーだけは例外だった。ギャッツビーこそ、オレが心底軽蔑する全てを兼ね備えた男だったのに。もし、効果的につづけられた

演技そのものが人格といえるなら、彼は見事なまでのオーラをまとっていたし、自分の好機を捉えることにかけては並外れていた。まるで何千マイル先の地震を感じる精密機械のように。

その敏感さは、いわゆる「創造性」と呼ばれるような壊れそうなもろい心のことじゃない。むしろ大なる希望にあふれ、いつでも愛や情熱を感じ取ることに長けていた。そんな男は見たことが無かったし、これからも会えないような気がする。

いや、ギャッツビーは結局あのままで良かったんだ。悪いのはギャッツビーを食べ物にしてたヤツらだ。ギャッツビーの夢の跡に浮かんだ汚い塵みたいなヤツら。あいつらのせいで、人の一時的な悲しみやはかない喜びにも、当分の間目をそむけたくってしまった。

オレの家族は、中西部では三代続くわりと名の知られた裕福な家。キャラウェイ家は貴族の流れを引いており、バクルー公爵の末裔だとも言われている。だけど実際に今の地位を築いたのは祖父の兄で、一八五一年にアメリカに渡り、南北戦争従軍は人に譲り、今親父がやっている金物の卸商を始めたのが最初だ。

オレはこの大叔父に会ったことはないがどうも似てるらしい。親父の事務所にかかっているやや厳しい顔つきの肖像画を指して人はそう言う。

親父に遅れること二十五年にして一九一五年にニューヘイブン(イエール大学)を卒業して、それからすぐに世界大戦として知られる時代遅れのチュートン民族大移動に参加した。敵に仕返すのは楽しかったので、地元に戻ると退屈極まりなかった。中西部は熱い世界の真ん中じゃなくて、今やボロボロになった全世界の端っこにしか見えなかった。だから東部に行って証券取引を覚えたいと思った。オレの知り合いはみんな証券取引をやっていたから、証券業界にはもう一人ぐらい食べていく余裕がありそうだった。叔父や叔母は進学先でも選ぶのかというノリでいろいろ話し合ってたけど、最後は真面目くさった顔でしぶしぶ「まあ、いいだろう」と言ってくれた。親父も一年仕送りをしてくれると約束してくれたし、もろもろの事情で遅れたけど、一九二二年の春、東部に永住するつもりでやって来たんだ。

都心で部屋を探すというのが妥当だろうけど、暑い季節ではあるし、広い芝生と慣れ親しんだ樹々のある田舎を出たばかりだったので、事務所の若い同僚が通勤圏内で一軒家をシェアしようと言ってくれたのは願ったりかなったりだった。

同僚は、月八十ドルの家賃で風雨にさらされた安普請の平家を見つけてきた。だけどいよいよ引っ越しというところで、そいつがワシントンへ転勤になったので、結局一人で郊外に住むことにした。犬を飼ったけどすぐ逃げ出してしまって、いたのはほんの数日。それから中古のダッジ(車)を買って、ベッドを整え朝食を作ってくれるフィンランド人の家政婦を雇った。家政婦は電気コンロの前でフィンランド語の格言を一人でつぶやいていた。

数日間は孤独で沈んでたけど、ある朝オレより後から越してきたらしい男に道で呼び止められた。

「ウエストエッグ村にはどう行けばいいですか」

その人が困ったように尋ねてきたので教えてあげた。そして歩き始めると寂しさはもう消えていたんだ。オレはこの街を案内でき、近道を教えられる立派な住人。あの人がこの街で堂々としていいことを図らずも教えてくれたんだ。

そして見渡すと、太陽は輝き、樹々の葉は早回しの映画のようにパァッと弾ける勢いで大きくなっていて。夏と共に命が躍動するという昔摺んだ感覚を取り戻していた。

それに読みたい本がたくさんあって、若々しく萌える空気は健康な息吹に満ちていた。銀行業務や債券、証券取引の本を十冊ほど買い込んで本棚に並べると、造幣局で刷り上がったばかりのピカピカのお札のように赤や金に光り、ミダス (触る物を黄金に変えた王)、モルガン (アメリカの大富豪)、マエケナス (ローマの詩人で大富豪) だけが知っている輝くばかりの秘密を解き明かそうとしていた。一方で他の種類の本も読みたいという熱い思いもあった。大学では文学に凝っていて、ある年はイエールニュースに真面目だけど読みやすい論説を書いていたほどだ。その頃は、学生時代にやったことを一からやり直すことで、専門家の中でもごく稀な「高邁な人格者」をもう一度目指そうとしていた。これは気の利いた格言なんかじゃないけど、人生は一つの窓からのぞいた方が、結局が一番よく見渡せるってこと。

北米でも有数の変わってる地域に家を借りたのは単なる偶然。ニューヨークの真東から伸びている細長くて騒音の多い島の上に、自然が作り上げた神秘の中でも珍しい二面の土地を形作っていた。都心から二十マイル離れたところにある同じ形の二個の巨大な卵形の半島は、形ばかりの入江で仕切られ、ロングアイランド湾の巨大で湿った納屋の庭に投げ出されたような形で、西半球でも一番賑わっている海上に突き出していた。と言っても、完璧な卵形ではなく、コロンブスの逸話の卵のようにくっついている先がつぶれていた。でも、上空を飛び交うかもめはしょっちゅう卵だと勘違いしているに違いない。一方で翼の無い者は、形と大きさ以外はあらゆる面が違うのに眼をみはる。オレはウエストエッグに住んでいた。まあ、いけない方の卵だけど。でもこの言い方じゃ、ヘンテコで不気味なほどの大きな違いがほんのちょっとしかわかってもらえないな。

オレの家は卵 (形の土地) の先端にあって海岸からほんの五十ヤードほどの場所で、一シーズンに家賃が一万二千ドルから一万五千ドルは見込めそうな二件の豪邸に挟まれていた。向かって右側の家はどこから見ても超豪華で、実際にノルマンディの市庁舎を真似ているんだと思う。脇には薄い髭のような蔦が絡み付いた真新しい塔がそびえ、大理石造りのプールがあり、少なくとも四十エーカーはある敷地と芝生があった。ギャッツビーの邸宅だった。いや、ギャッツビーをまだ知らなかったんで、その名前の紳士がそこに住んでいたというべきか。

オレの家はひどくみすぼらしかったけど、あまりに小さいので気にはならなかった。ロングアイランド湾を見渡し、隣人の芝生の隅を眺めては、億万長者のご近所さんと自分をなぐさめてた。こういうのも全部込みで家賃は月八十ドル。

名ばかりの入江の向こうには、流行の最先端をいくイーストエッグの海岸沿いに輝く白亜の豪邸が立ち並んでいた。

そして、トム・ブキャナン夫妻と夕食をとるために、小さな入江を渡ってイーストエッグまで車を走らせた夕方から、その夏の物語が始まった。デイジーはオレの遠い親戚で、トムとは学生時代からの知り合いだった。戦争が終わったすぐ後に、シカゴで彼らの家に二日間世話になったこともあった。

デイジーの夫、トムはいろんなスポーツが得意で、フットボールにかけてはイエール大学でも歴史に残るような最強選手で、国レベルでもちょっと名を知られたほどだった。だけど二十一歳でそれだけの輝かしい栄光を極めてしまった後は、もう人生がつまらなくなってしまう例には漏れないようだった。

トムの実家は大金持ちで、学生時代から金を湯水のように使っていて非難の声もあった。今度はシカゴから東部まで息を飲むような豪華な引っ越しをやったのけた。シカゴのレイク・フォレストからポロ用の馬を何頭も引き連れてきたのなんかほんの一例だ。オレと同じ年代でそんなことができるだけの金があるヤツがいるなんて信じられないよ。

なんでこの夫婦が東部に来たのかは知らない。特に理由もないままに一年フランスで過ごした後、富豪が集まってポロ試合をするような所をフラフラ歩き歩いていた。電話では、ここに永住するのよとデイジーが言ってたけど、オレは信じなかった。デイジーの気は知らないが、負け試合になる一歩手前のフットボールゲームでどんでん返しを願ってあがいてるみたいに、トムは当てもなく永遠に彷徨(さまよ)い続けるような気がしてた。

そして、熱い風が吹く夕方に、昔なじみではあるが、よく知ってるとはいえないこの知人を訪ねてイーストエッグまで車を走らせた。彼らのマンションは想像してたのよりもずっと豪華で、湾に向かってそびえる明るい赤と白が基調のジョージ王朝植民地時代風(ジョージ三世。在位は一七六十年から一八二十年。イギリス王)の建物だった。海岸から玄関にまで芝生が植えられていて、その距離は四分の一マイルもある。芝生はその途中、日時計や、レンガで固められた散歩道や、緑に萌える庭園を飛び越えた。やっと屋敷にたどり着くと、ゴールした勢いでツヤツヤした蔦に姿を変え建物の側面を這い上っていくようだった。

建物の正面はフランス風の窓が一行に並んで、暑くて風のある午後、窓は大きく開き、夕日を反射して金色に光っていた。トム・ブキャナンは乗馬服に身を包み両足を開いた格好で玄関先に立っていた。

トムは大学時代から比べるとだいぶ変わっていた。今やがっしりした金髪の三十男で、気難しそうな口元をして偉そうな態度をとっていた。傲慢さが表れた目が顔を印象づけ、いつも猪突猛進に進んでいくという印象を与えていた。女っぽく見える乗馬服を着ていても、小山のような体が発するオーラを隠せはしなかった。ピカピカに磨き上げられたブーツは、靴紐で絞められた一番上までパンパンで、肩を動かすと薄い上着の下で大きな筋肉が動くのが見えた。その体は誰をも圧倒した。容赦ないまでに。

しゃがれたやや甲高い声で喋り、気難しそうな男に見えた。自分が気に入っている連中を前にしても、親が子供に対するような上から目線な感じが少しあって、イエール大学では彼を毛嫌にするヤツも結構いたはずだ。

トムはまるでこう言っているようだった。

「オレの言うことがいつでも正しいと思うなよ。オレがお前よりはるかに強くて男らしいというだけでな！」

オレたちは大学四年次に同じクラブに所属し、それほど親しくなったことはないのにオレを認めており、突っかかるような態度をとりながらもオレには好かれたいようなそぶりだった。

オレたちは日の当たる玄関先で少しの間話をした。

目を落ち着きなく光らせながらトムが言った。

「ここはいい場所だ」

トムは片腕でオレの向きを変えて、大きくて平べったい手を庭の方へ振ってみせた。低い所にはイタリア風の庭園があり、半エーカーほどの庭に芳しく香るバラが咲き誇って、潮が引いた岸には、先が平らで獅子鼻のように広がったモーターボートが繋がれていた。

「ここは油田業者のドメインのものだった」

突然、トムはオレの向きをまた丁寧にかえた。

「中に入ろう」

天井の高い廊下を抜け、明るいバラ色の部屋に入った。両側は華奢なフランス風の窓に囲まれていた。窓は少し開いていて、家に入ってきそうな勢いで伸びている芝生を背景に白く輝いていた。風が部屋を通り抜けていた。カーテンを内側や外側へ薄い色の旗のように揺らしたかと思うと、飾りがついたウエディングケーキのような天井へ両端を跳ね上げたり、風が海面につけるような陰影をワイン色の絨毯につけたりしていた。

部屋にある動かないものと言ったら巨大なソファのみで、重りをつけた風船みたいに二人の若い女が浮いていた。二人とも白いドレスを着ていたが、ドレスもたった今、屋敷の周りを飛び回ってきましたという風に、シワがよりぱたぱたとためいていた。オレは立ち止まったまま、カーテンがたてるヒュッという音や、壁の絵画がたてる音に耳をすましていたに違いない。トム・ブキャナンがバタンと後方の窓を閉めると、風が止んでしまい、カーテンと絨毯と女たちがゆっくりと床に降りてきた。

女のうち年下の方は知らない顔だった。ソファベッドに長々と横たわり、じっとしていた。アゴを少し持ち上げて、落ちそうな何かを落とさないようにバランスをとっているように見えた。オレを目の隅で捉えていたとしてもそんなそぶりは見せなかった。オレの方が驚いて、邪魔したことを小さく謝ろうとしていた。

もう一人の女、デイジーは起き上がろうとしていた。少なくとも誠意を見せようと少し前屈みになった。そして笑ってみせた。突拍子もないけど、かわいい小さな笑い声で、オレもつられて笑って部屋の真ん中へ歩み寄った。

「し、幸せでしびれちゃったの」

デイジーは、さも気の利いたことを言ったかのようにまた笑った。オレの手を取って顔をのぞき込みながら、この世で一番会いたい人に会ったと言わんばかりだった。それが彼女のやり方だ。アゴでバランスをとっている女はベイカーだとささやくように言った。(誰かがデイジーのささやくのは聞き手が彼女の方へ屈み込むようにさせるためだと言ってるのを聞いた。全く見当違いの批判だし、それでデイジーの魅力が損なわれるこ

ともない)

ベイカー嬢は唇をわずかに開き、かすかにうなずいてみせるとすぐに頭を元の位置に戻した。アゴでバランスを取っている物が揺れたことにあわてたようだった。オレはまた小さく謝った。完璧なほどの傲慢な態度に感心する以外になかった。

デイジーが低いドキドキするような声で質問してくるんで、オレは彼女の方に目をむけた。話し声はもう二度と演奏されない音符のように鼓膜を揺らした。彼女の顔は悲しそうだけど、目は輝き口元は明るく情熱的で美しかった。でも、男を虜にするのはその声だ。歌うような抑揚。彼女が「聞いて」とささやけば、楽しくワクワクすることをしてきたばかりで、これからもあと小一時間は続くのよと約束しているようだった。

東部に来るときにシカゴに一日立ち寄り、多くの人がよろしくと言っていたことを話した。

「わたしが居なくなって寂しいのかな」

デイジーはうれしそうに叫んだ。

「街中が沈んでるよ。悲しみを表すために車という車の左側の後車輪は黒く塗られ、ノース・ショー辺りでは毎晩号泣が聞こえてたよ」

「まあ、なんてステキなの！ トム、帰りましょうよ！ 明日にでも！」

それから出し抜けに言った。

「子どもに会ってね」

「もちろん」

「今寝てるのよ。二歳なの。会ったことあるんだっけ」

「まだ」

「じゃあ、絶対会って行って。あの子……」

部屋の中を忙しく歩き回っていたトムが立ち止まりオレの肩に手をやった。

「ニック、仕事は何してるんだ」

「証券業」

「会社はどこ？」

オレが答えると聞いたことがないとズバツと言われたのでムカついた。

「そのうち耳に入るよ。東部に居るうちに」

「オレは東部に居るんで心配するなって」

トムは何かあるようにチラリとデイジーを見てからオレの方に振り返った。

「他に住むところを探すなんてマヌケのすることだろ」

ここで突然ベイカー嬢が「そうね」と声を上げたのでビクツとした。オレが部屋に来てから彼女がしゃべったのはこれが初めて。これにはオレだけじゃなくて本人も驚いたようで、あくびをすると素早く器用に身体を起こして歩き出しながら不平を言った。

「体がこっちゃった。あんまり長くソファに寝転んでたから」

「あら、わたしに言わないでよ」

デイジーが言い返した。

「午後からずっとニューヨークに行きましょって誘ってたじゃない」

「ごめんだわ」

ベイカー嬢は運ばれて来た四杯のカクテルに目をやった。

「今、トレーニング中なの」

この家の主人は訝しげに視線を向けた。

「君がかい？」

トムはグラスを取ると、底に残った最後の一滴を飲み干すような勢いでグラスを傾けた。

「君がどうやって成しとげてきたんだか想像できないな」

オレはベイカー嬢を見ながら、彼女の成しとげてきたことって何なんだろうと思った。

ベイカー嬢はなかなかかわいかった。胸の小さいスリムな子で、まっすぐに立つと、士官学校の新入りがするみたいに胸をそらせて体の線を強調してみせた。青白くてかわいいけど不満げな顔に、やんわりとした好奇心で輝く灰色の目を細めてオレの方へ振り返った。そこでオレはその娘と前に会ったか、写真で見たことがあるのに気づいた。

「ウエストエッグに住んでるの？」

ベイカー嬢は小バカにしたように言った。

「知り合いがいるのよ」

「オレはまだ一人も・・・」

「ギャッツビーは知ってるでしょ」

「ギャッツビーって誰のこと？」

デイジーが問いただすように尋ねた。

ギャッツビーはオレの隣人だと答える前に夕飯の時間が告げられた。トムはひき締まった腕でオレの腕を掴み、チェッカーのコマを進めるように有無をいわず部屋から連れ出した。

二人の女は手を腰に添えて、ほっそりした体つきで物憂げに歩きながら、風が止んで四本のキャンドルの灯が揺れる夕暮れ時のバラ色のベランダに案内した。

「なんでキャンドルがいるのよ？」

デイジーがふくれてみせた。そしてキャンドルの火をあおいで消した。

「あと二週間で一年で一番長い日が出るのよ」

デイジーが輝く顔をこちらに向けた。

「一年で一番長い日を待ちながら見過ごしてしまったことってある？ わたし、毎年その日を待ってるんだけど、いつも見過ごしてしまうの」

「何かやりましょうよ」

あくびをしながら、ベイカー嬢はこれからベッドに入るみたいにテーブルについた。

「そうね。何か予定はある？」

デイジーが困ったようにオレを見て聞いた。

「みんな、予定はあるの？」

オレが口を開く前に、デイジーは驚いたように自分の小指に目を止めた。

「見て！ ひどいことになってる！」

みんなの視線が集まった。関節が青黒くなっていた。

「トム、あなたがやったのよ」

デイジーが責めるように声を上げた。

「わざとじゃなかったんでしょうけど、やったのはあなたよ！ 乱暴な男と結婚しちゃったもんだわ。バカでかい男の典型みたいな・・・」

「バカでかいはやめてくれ。冗談でもだ」

トムが口を挟んだ。

「バカでかいじゃないの」

デイジーがやり返した。

時々、デイジーとベイカー嬢が同時に話し出すことがあった。遠慮がちに、冗談みたいなとりとめのない話。でも、ただのお喋りでもなく、彼女たちの着ている白いドレスやなんの感情もない目のように冷たく冴えていた。彼女たちは確かにここにいた。トムやオレとも一緒にいるんだけど、もてなしたりもてなされたりしながら、ただ行儀よく、明るい雰囲気を作ろうと上部だけ取り繕っているようにしか見えなかった。楽しい夕食もいずれは終わり、夜もやがて更けていき、無造作に片づけられることが分かっていたのだ。

タベが、ことごとく期待を裏切っていくか、ただ耐えがたいひとときになって駆け足で去ってしまうだけのウエストとは大違いだった。

「デイジー、君としゃべっていると自分が文明に乗り遅れてる田舎者って気になるよ」

コルクの香りがするけどすばらしいクラレット・ワインの二杯目を飲んだ力を借りて言ってみた。

「作物の出来高とか田舎の話をしてみたら？」 オレのコメントにたいして意味は無かったが、思わぬ答えが返ってきた。

「文明は破滅する」

トムが激した様子で割り込んできた。

「オレはこの点についてはものすごく悲観的なんだ。君はゴダードの『有色人帝国の興隆』は読んだか？」

「えっ、読んでないけど」

トムの勢いに気圧されながら答えた。

「いい本だ。みんな読むべきだ。要するに、白人は将来を見据えていかないと、完全に沈んでしまうってことだ。科学的な説だ。証明されている」

「トムったらのめり込んでるのよ」

デイジーが興味のない悲しそうな調子で言った。

「長い単語が並んだ難しい本を読むの。えっと、なんて言ったかな・・・」

「とにかく、オレが読んでいる本は科学的にも確かなものなんだ」

トムがイライラとデイジーを見据えて言い切った。

「この本の作者が大変な努力で書き上げたんだ。世界を仕切っている白人がしっかりといかないと、他の人種が世界を動かすようになっちゃう」

「わたしたちがやっつけなきゃ」

燃える太陽に向かって激しく瞬きをしながらデイジーが言った。

「それならカリフォルニアに住むべきね」

ベイカー嬢が口を挟んだけど、椅子の中でふんぞり返りながらトムが割り込んできた。

「この説は、オレたちが北歐人種であることを言っている。オレも君も、君も・・・」

ほんの少しためらったが、デイジーも差して小さくうなずいてみせた。デイジーがオレに向かってまたウインクした。

「オレたちが文明となるものをみんな作ってきたんだ・・・ああ、科学にしろ、芸術にしろ、そんなもの全部だ。わかるだろう？」

力の入れ方が何か衰えだっただ。以前よりもっと自己満足の度合いが強くなっていたのに、もうそれにも飽きたらないようだった。その直後に家の中で電話が鳴り、執事がペランダを離れると、デイジーが待ってましたとばかりにオレの方に乗り出してきた。

「家の秘密を教えてあげる」

デイジーが熱心にささやいた。

「あの執事の鼻のことなの。聞きたい？」

「そのために今晚ここに来ただよ」

「あのね、あの人はずっと執事ってわけじゃないの。以前はニューヨークのあるお屋敷で、二百人分もの銀製品を磨いてたの。毎日毎日、朝から晩まで磨いていたら、とうとう鼻がおかしくなったんですって」

「悪い状態から最悪の事態に転げ落ちたのね」

ベイカー嬢が言った。

「そうなの。どんどん悪くなっちゃって、とうとう仕事を辞めざるを得なかったの」

一瞬、夕暮れの最後の光がデイジーの輝く顔をロマンチックに照らし出した。デイジーの声にオレは息をひそめて前屈みになっており、やがて光は薄くなっていった。夕暮れ時、楽しかった道端を離れるのをグズグズする子どもたちのように、光線の一本一本が、名残惜しそうに彼女から消えていった。

執事が戻りトムは耳に何かささやくと、トムは顔をしかめ、椅子を引くと何も言わずに家の中に入っていった。トムが居なくなることで何かを思い出したみたいに、デイジーがまた身を乗り出してきた。声はつややかで歌うようだった。

「夕食の席であなたに会えてうれしいの。何かを思い出すわね。そう、バラよ！絶対にバラの花！そうよね？」

デイジーは、ベイカー嬢の同意を得ようと振り返った。

「絶対にバラの花でしょ？」

これはありっこない。オレはバラには似ても似つかない。デイジーは単に思いつきを言っただけなのに、温かみが溢れていて、まるで息を飲むようなワクワクする言葉に、人を無理矢理合わせようともしているみたいだった。そして突然ナプキンをテーブルの上に置くと、きちんと断って家の中に入っていった。

ベイカー嬢とオレは思わず意味も無くお互いを見合った。オレが話しかけようとする、彼女は用心深く座り直し、警告するように「しいー」と言った。抑え気味の声は部屋中に響いて、外まで漏れ聞こえてきた。ベイカー嬢は恥を忘れて何かを聞き取ろうと身を乗り出した。ささやき声は震えながらも一定の音量を保ち、沈んだかと思うと声高になり、そして止んだ。

「君が話してくれたギャツビーはオレの隣人・・・」

「黙ってよ。何が起ってるか聞きたいんだから」

「なんかあるの？」

オレはマジで聞き返した。

「ちょっと、あなた、知らないともいうの？」

ベイカー嬢はさも驚いたように言った。

「みんな知ってると思ってた」

「知らないよ」

「あら・・・」

ベイカー嬢は口ごもりながら言った。

「トムはニューヨークに女がいるの」

「女がいるって？」

オレは機械的に繰り返した。

ベイカー嬢はうなずいた。

「その人、夕食時に電話しないってマナーをわかってるべきじゃない？ そうでしょ？」

オレがやっと意味が飲み込めたところで、ドレスがはためく音とブーツのギョツという音が聞こえて、トムとデイジーがテーブルに戻ってきた。

「我慢できなかったの！」

不自然なほどに明るい調子で、デイジーが叫んだ。

椅子に座ると探るようにベイカー嬢を見やってからオレの方を見た。

「だって外をちょっと見てたらとってもロマンチックだったんだもの。芝生に一羽鳥がいて、ナイチンゲールがキューナードかホホワイト・スターの船に乗って来たのに違いなんて思ったの。歌ってたわ・・・」

デイジーの声も歌うようだった。

「ロマンチックよね、ねえトム？」

「全くロマンチックだ」

トムはそう言うと、今度はオレに力なく言った。

「夕食が終わっても明るいようだったら馬小屋を見せたいんだ」

突然家から電話が鳴るのが聞こえ、デイジーはトムにはっきりと首を横に振ってみせ、馬小屋の話だけでなくそれまでの話題のすべてが煙になって消えた。途切れ途切れになった記憶の中で、夕食の最後の五分間で覚えていることといえば、意味もなくキャンドルにまた火が灯されたことと、できるだけ普通にしようとしたけど、やっぱり、まともみんなの目は見られなかったということだけだった。トムとデイジーが何を考えているかはうかがえなかった。物事を無視することにかけては天才的であるベイカー嬢でさえ、五人目の客人によるけたたましい電話の呼び出し音は無視できたとは思えなかった。一面から言えばとても興味深い状況ではあった。でも、オレはとっさに警察に電話をかけて助けを求めたいような気持ちだった。

言うまでもなく、馬の話はもう出てこなかった。トムとベイカー嬢は、まるで本物の死体に夜通しの祈りを捧げにでも行くように、少し距離をとりながら、一緒にダラダラと書斎へ歩いていった。オレはわざと楽しみに、少し耳が遠くて何も聞こえないフリを

しながら、玄関先からベランダへ抜けてデイジーの後についていった。そして、黙り込んだまま、藤製の長椅子に並んで腰を下ろした。

デイジーは自分の可愛らしい顔を確認めるように両手で包み、ゆっくりと漆黒の闇に目を注いだ。そこに彼女の感情の震えが見て取れたので、気を落ち着けてもらえるように子供のことを尋ねた。

「わたしたちはお互いのことをよく知らないわね、ニック」

不意にデイジーが言った。

「親戚同士だっていうのに。結婚式には来てくれなかったのね」

「まだ戦争から戻ってなかったよ」

「そうだったわね」

彼女は言いにくそうに付け足した。

「あのね、ニック、ここのところ悪いこと続きで、なんでも悪くとっちゃうの」

それには理由があるはずだった。オレは言葉を待ってみたけど、彼女は何も言わなかった。それで、仕方なくまた子供の話題に戻した。

「もう、なんでも喋れて、食べられて、なんでもできるんだよね？」

「うん」

彼女はオレを見たけど、心ここにあらずと言う感じだった。

「ねえ、ニック。娘が生まれた時、わたしがなんて言ったか・・・知りたい？」

「うん、もちろん」

「これを言うと、わたしがどんな気持ちでいるかがわかると思う。あのね、娘が生まれてまだ一時間も経ってない頃よ。トムがどこへ行ったかわからなかったの。麻酔から覚めると、寂しくてたまらなかった。すぐに看護婦さんに男の子か女の子かって聞いたのよ。そしたら女の子だって言われた。わたしは顔を背けて泣いたわ。そしてこう言ったの。

『いいわ。女の子で嬉しいわ。その子がおバカさんだったらいいと思う。かわいいおバカさんでいることが、女の子にとって世界で一番幸せなことなんだから』

これで、わたしが何でも悪くってしまうってわかったでしょ？」

デイジーは語気を強めて言った。

「誰だってそう思うよね。特に物をよく分かった人は。わたしには分かるの。どこにでも出かけて、何でも見てきて、何でもやってきたんだもの」

デイジーの目は、まるでトムの目のように反抗的に光った。そして皮肉っぽく笑った。

「世間ずれしてるの。ええ、世間ずれしてるのよ！」

その瞬間、彼女の声が止んでオレの注意と関心がそがれた。すると、これまで彼女が言ってきたことが全部ウソくさく思えてきた。オレは居心地が悪くなった。まるで、今夜のことがこの気持ちを味わうために仕組まれたもののような気がしてきた。次の言葉を待っていると、思ったとおり。デイジーはオレを見やると、自分とトムがまるで秘密結社の会員であると言わんばかりに、かわいい顔に皮肉な笑いを浮かべてみせたんだ。

紅い部屋の中は明るかった。トムとベイカー嬢は長いソファの両端に座り、ベイカー嬢はサタデー・イブニングポストをトムに読んで聞かせているところだった。声は小さくて

棒読みだったけど滑らかだった。ランプの灯りはトムブーツを光らせ、黄色に染まった秋の木葉のようなベイカー嬢の髪を鈍く照らし、ページをめくるとしなやかな腕の筋肉がかすかに動いて、紙面に光を投げかけた。

オレたちが部屋に入ると、ベイカー嬢は手を挙げて何も言うなと合図した。

「続きは次号が出るまでお預けね」

ベイカー嬢はそう言う雑誌をテーブルの上に放り投げ、自分の存在を主張するように膝を揺ると立ち上がった。

「もう十時よ」

天井近くの時計にたった今気づいたように言った。

「良い子の寝る時間ね」

「ジョーダンが明日のトーナメントに出るの」

デイジーが説明した。

「ウエストチェスターでね」

「ああ、君がジョーダン・ベイカーなのかい？」

なんで彼女を見たような気がしたのかやっと分かった。彼女のかわいくてツンとすました表情は、アッシュビルや、ホットスプリング、パームビーチでのスポーツ記事の写真で度々見かけていた。中には批判的で気に触るような記事もあったけど、何だったかととくに忘れていた。

「おやすみなさい」

ベイカー嬢は静かに言った。

「八時に起こしてくれるでしょ？」

「あなたが起きられたらね」

「起きるわよ。キャラウェイさん、おやすみなさい。また会えるといいわね」

「絶対に会えるわよ」

デイジーが念を押した。

「だって、わたし、二人にお見合いさせちゃおうかなって思ってるんだもの。ニック、これからしょっちゅう来てね。二人をくっつけちゃおうって思ってるんだから。シートがいっぱいあるところに二人を閉じ込めたり、ボートに乗せて沖に流したり、なんてね・・・」

「おやすみなさい」

ベイカー嬢が階段のところから言った。

「今のは聞こえなかったわ」

「あの娘はいい娘だ」

少し間を置いてトムが言った。

「あの娘がこうやって全国を飛び回っているのを放っているのは気に食わないがね」

「誰のことを言ってるの？」

デイジーが冷たく聞き返した。

「あの娘の家族さ」

「家族っていっても千歳になるようなヨボヨボのおばさんが一人いるだけよ。それに、ニックがジョーダンの面倒をみてくれるわ。ねえニック、そうでしょ？ ジョーダンは、

この夏、週末をしょっちゅうここで過ごすの。家庭的な雰囲気が彼女にはいいと思う」

デイジーとトムは黙ってお互いを見やった。

「彼女はニューヨーク育ち？」

オレは慌てて聞いてみた。

「ルイスビル出身よ。わたしたち、そこで大きくなったの。わたしたちの懐かしい少女時代……」

「お前は、ニックとベランダでしっぽり話をしてたのかい？」

トムが急に口を挟んだ。

「そうだっけ？」

デイジーはオレを見た。

「何を喋ってたか覚えてないなあ。北欧人種のことを話してたかな。そうよ、そうだった。なんだかだんだんそんな話になって、それから……」

「こいつの言う事は信じちゃダメだ」

トムが忠告してきた。

オレは何を喋ってたか覚えてないと軽く言っておいた。それからすぐに家に帰ることにした。彼らは玄関口まで来て、明るい四角形の光の下に並んで立っていた。

オレがエンジンをかけると、「待って！」とデイジーが急に叫んだ。

「大事なことを聞くのを忘れてた。あなたが西部で婚約したって聞いたんだけど」

「そうだったな」

トムも同調した。

「君が婚約したって聞いたよ」

「ただの噂だよ。オレには金が無いし」

「でも、確かに聞いたのよ」

デイジーが花のような笑顔を浮かべてきっぱり言うので驚いた。

「三人がそう言ったのよ。だからほんとよ」

もちろん、彼らがなんでそう言うかは分かった。でも婚約なんて程遠かったんだ。その噂が出回ったのが東部に来た理由の一つでもあった。そんな噂が出ては、幼なじみと顔を合わせるのも気まずいし、噂を真に受けて結婚する気もさらさら無かった。

彼らがオレに関心を抱いていることに驚いたし、意外に普通の人たちであるようにも見えた。それでも、複雑な気分だったし、運転がてらに気が重かった。デイジーは子供を抱いて今すぐ家を出るべきだとも思った。でも明らかにそんな考えは無いようだった。トムの方はといえば、本を読んで落ち込んでいることの方が、ニューヨークに女がいることよりも驚きだった。鍛え上げた身体へのプライドも、自分の傲慢な心を埋めるには十分ではなくなって、乾いた思想の端っこにかじりつこうとしていた。

道路脇のレストランの屋根や、自動車修理店の入り口を見ると真夏であることが見てとれた。修理店の表には真新しい赤いガソリンポンプが光っていた。ウエストエッグに着くと、車を車庫の中に停めて、庭に置きっぱなしになっていた芝刈機の上にしぼらく腰を下ろした。風が止んで、鳥の翼の木々を打つ音が聞こえる賑やかで明るい夜。地球が、吹子を吹くようにカエルに生命力を与え、絶え間ないオルガンの音色のように鳴り

響いていた。歩く猫の影が月光を横切り、それを目で追いかけると、自分一人だけではないことに気づいた。五十ヤード先に、隣のマンションから人影が現れて、ポケットに手を入れたまま銀のこしょう粒のような星を眺めていた。ゆったりとした動作と、芝生の上にしかりと立っていることから、ギャッツビー氏その人だとうかがえた。そこから見える宇宙の中で、どれが自分の物かを確認しているようだった。

声をかけようかと思った。夕食でベーカー嬢が彼の名前を出したことだし、それが話のきっかけになるだろう。でも、やめたんだ。彼が一人でいたいという雰囲気を出してきたから。彼は黒い海に向かって変な風に両腕を伸ばした。目を凝らすと、彼が震えているのが見えた。それで、海の方に目をやると、栈橋の端にあるんだろう、小さくて遠い緑の一点の明かりしか見えなかった。それから、ギャッツビーの方を見るともう彼はいなかった。賑やかな漆黒の中で、オレはまた一人になった。

第二章

ウエストエッグからニューヨークに向かうちょうど真ん中辺で、四分の一マイルほどの区間を高速道路が線路と合流して走っていて、まるで荒地を避けているように見えるところがある。この地域は灰の谷と呼ばれているんだ。そこでは畑で小麦が大きくなるように、灰が山や丘を作り、気味の悪い庭園を作るように、家や煙突や立ち昇る煙まで形作っていた。そして、大変な努力で人間までも形作られて、彼らはぼんやりと動いてはいるが、粉っぽい空気の中で崩れそうになっていた。時々、見えない軌道をたどって灰色の車の列がギーというすごい音を立てて止まると、鉛のシャベルをかついだ灰色の男達が集まってきてかき回すので、厚いホコリの雲が立ち上り、うっすらと見えていた彼らの作業が全く見えなくなった。

でも、しばらくすると、灰色の土地や、その上を絶え間なく漂うホコリの上に T・J エクルバーグ先生の目があるのに気づく。エクルバーグ先生の目は青くてバカでかい。目玉は高さが一ヤードもある。その目は顔からではなく、見えない鼻の上にかけた黄色い縁の巨大なメガネからのぞいているのだ。明らかに、クイーンズ区で自分の商売を流行らせようとしたお調子者の目医者がそこに看板を立てたのだが、今や自分の方が目が見えなくなってしまうか、目のことなんか忘れてどこかに引っ越してしまったようだ。長いこと塗り替えられることもなく、日光や雨にさらされて、彼の目はくすんではいるが、灰捨て場の上で何か考え込んでいるようだった。

灰の谷の一方は小さいドブ川で遮られていた。跳ね橋が大型船を通す時には、電車の乗客はこの陰気な光景を三十分近くも眺めていなければならなかった。それで、ここではどうしても最低一分は停車しないといけない訳で、そのおかげで、トム・ブキャナンの愛人に初めて会えた。

彼が愛人を作っていることは、彼を知っている連中の中で知れ渡っていた。ある者は、トムが愛人を連れて人気のレストランに入り、愛人をテーブルに残したまま店の中を歩き回って、誰彼ともなく話しかけたのが気に触ると言っていた。

オレはどんな女か見てみたい気持ちもあったけど、会いたいとは思わなかった。だけど、会ってしまったんだ。ある日の午後、トムと一緒に電車に乗ってニューヨークに向かっていた。電車が灰の谷で止まると、トムは車両から飛び降り、オレのひじをつかんで有無を言わず車両からひっぱり降ろした。

「降りるんだ！」トムはきっぱりと言った。

「オレの女に会ってもらいたいんでね」

たぶんトムはランチでもたらふく食べてご機嫌だったようで、暴力まがいの方法をとってまでもオレを同伴させようとしていた。それに傲慢にも、日曜の午後はどうせオレも暇なんだろうと決めてかかってたし。

オレはトムについて、低い白塗りの線路脇のフェンスを乗り越えると、エクルバーグ先生の瞬きもしない目が見つめる中、線路沿いに百ヤードほど歩いて戻った。見えるのは、ゴミ埋立地の端に建っている黄色の煉瓦造りの家並だけだった。大通りの繁華街を小さくしたような感じで、その周りには何も無かった。三軒のうち一軒は貸家となっており、一軒は朝までやってるレストランで、灰の道筋がついており、最後の一軒は自動車修理店だった。「ジョージ・B・ウイルソン 自動車修理・中古車売買」と書いてあった。トムに続いて中に入った。

中の様子は殺風景で飾り気が無かった。見える車と言えば、ホコリにまみれたポンコツのフォードで、薄暗い部屋の隅にうずくまっていた。この修理店は、ロマンスを売る豪華な店を裏に隠しているのかもしれないと思っていた時、店の主人がボロ布で手を拭きながら事務所の戸口に現れた。男は金髪で青白い生氣のない顔つきで、どうかするとイケメンに見えなくもなかった。オレ達を見ると薄青い目にかすかな期待をたたえてみせた。

「やあ、ウイルソン」トムが親しげに肩を叩きながら言った。

「景気はどうだい？」

「まあまあですね」

ウイルソンが自信なさげに言った。

「あの車は、いつわたしに売ってくださるんですか」

「来週にでも。今修理工に見せてるんでね」

「でも、彼の仕事は遅くないですか」

「そんなことはないさ」トムは冷たく答えた。

「もしあんたがそう思ってるんなら他へ売っても構わないがね」

「そんなことは言ってませんよ」

ウイルソンが慌てて言った。

「わたしが言いたいのは・・・」

ウイルソンの声のとぎれ、トムは落ち着きなくガレージを見渡した。そこで階段から足音が聞こえ、がっしりした女の影が事務所の灯りを遮った。その女は三十代半ばで、小太りだったけど、一部の女がそうであるように一層色気が増していた。水玉がついた紺色のドレスの上からのぞく顔は、美しくはないが、彼女の全身の神経が燃えているようなすごみを感じさせた。彼女はゆっくり微笑むと、まるでトムが握手しているのは幽霊ですと言った感じで夫に近寄り、燃える目でトムを見上げた。そして、唇を舐めると、夫を見もせず、柔らかいしゃがれ声で言った。

「椅子を持って来なさいよ。お客様が座れないじゃないの」

「ああ、そうだね」

ウイルソンはうなずくと、急いでセメント色の壁の向こう側に飛び込んだ。白い灰のような塵が、彼の黒いスーツも薄い色の金髪も、そして周り全部をも薄くおおっていた。

トムに歩み寄った彼の妻以外は。

「会いたいんだ」

トムが熱を込めて言った。

「次の電車に乗ってくれ」

「わかったわ」

「下の新聞売り場で待ってる」

彼女はうなずくと、ジョージ・ウイルソンが事務所の入り口から二脚の椅子を運んできたのと入れ違いに離れていった。

オレ達は、事務所から見えない階下で待っていた。七月四日(アメリカ独立記念日)の数日前で、薄汚れてやせこけたイタリア人の子供が火薬玉を線路に沿って並べていた。

「ひどい場所だろう」

顔をしかめてエクルバーグ先生を見上げると、トムが言った。

「ほんとだね」

「彼女は抜け出して正解だよ」

「夫は気にしないのかい？」

「ウイルソンが？ あいつは妻がニューヨークの妹に会いに行ってると思ってるさ。あいつは自分が生きていることにも気づいちゃいないほどマヌケなんだ」

それで、トム・ブキャナンと愛人とオレと一緒にニューヨークに向かった。と言いたいところだが、ウイルソン夫人は別の車両だった。イーストエッグの知人が乗っているかもしれないとトムは用心していた。

彼女は茶色のプリントのモスリンドレスに着替えていて、ニューヨーク駅でプラットホームに降りるのにトム手を貸すと、大きなお尻でドレスがピンと張った。新聞売り場で、彼女はタウン誌と映画情報誌を買うと、近くの薬局でコールドクリームと小さな瓶の香水を買った。上の騒々しいタクシー乗り場で、四台のタクシーを行かせ、内装が灰色になってる藤色の新しいのを選んだ。そしてその車で駅の雑踏から抜け出し、明るい日差しの中へと乗り出した。でも、彼女はすぐに窓から振り向くと運転席を隔てているガラスを軽く叩いた。

「あの犬が一匹欲しいの」

彼女は熱心に言った。

「家に一匹欲しいのよ。飼うんなら、犬よね」

オレ達は、ロックフェラーにちょっと似ていて笑える白髪まじりのおじいさんのところまで車をバックさせた。

おじいさんが首から下げているかごには、何の種類かわからない生まれたばかりの子犬が十匹ほどうずくまっていた。

「何の種類の子犬なの？」

おじいさんがタクシー乗り場まで来ると、ウイルソン夫人が勢いこんで尋ねた。

「色々ですな。どんなのがお望みで？」

「警察犬みたいなのが欲しいのよ。でもないでしょう？」

老人はかごをけげんそうにのぞき込むと、手を突っ込み、子犬の首根っこを掴んでぶら下げると、バタバタ暴れた。

「それは警察犬じゃないな」

トムが言った。

「はい、警察犬じゃありませんが……」

声に落胆をにじませて男は言った。

「まあエアデールテリアってところです」

男は茶色いタオルのような背中を撫でた。

「こいつの毛並みを見てください。見事なもんでしょう。風邪をひいたりして手を焼くこともないタイプですよ」

「かわいいわね」

ウイルソン夫人が声を上げた。

「いくらなの？」

「その犬ですか？」

老人は自慢げな様子で子犬を見た。

「十ドルです」

まあいくらかエアデールの血が入ってるんだらうけど、足が真っ白な、エアデールもどきが手渡されて、ウイルソン夫人の膝に収まった。ウイルソン夫人は、天候に強いフサフサした子犬の毛並みを撫でて大喜びだった。

「この子は男の子？ それとも女の子？」

ウイルソン夫人は可愛らしく尋ねた。

「その犬ですか？ その子はオスですね」

「メス（ビッチ）さ」

トムはきっぱり言った。

「ほら、金だ。これで犬をもう十匹買うがいいさ」

オレ達は五番街を走った。牧歌的な柔らかい温かな日差しが注ぐ夏の午後で、街角に真っ白いひつじの群れが現れても驚かなかただらう。

「待ってくれ」

オレは言った。

「ここでお暇させてくれよ」

「ダメだな」

トムがきっぱり言った。

「アパートに来ないとマートルが残念がるぜ。そうだろ、マートル？」

「一緒に来てよ」

マートルも誘ってきた。

「妹のキャサリンに電話するわ。妹を知ってる人はみんな、きれいだって言うのよ」

「ぜひお邪魔したいけど、でも……」

またセントラパークを横切り、西百番街を目指してオレ達の車は走っていった。

一五八番街の白くて長いケーキのようなアパートの一角でタクシーは止まった。実家

に戻ったように近所をジロリと見渡すと、ウイルソン夫人は犬とその他の買い物を抱えて急いで中に入った。

「マッキー夫妻を呼ぶわね」

エレベーターで昇りながら彼女は言った。

「それからもちろん妹も呼ぶわよ」

目指す部屋は最上階だった。こじんまりした居間と小さな台所と狭いベッドルームと風呂がついていた。居間はタペストリー張りの家具でいっぱい、動く、ベルサイユの庭で貴婦人がブランコに乗っているタペストリー柄に、何度もあちこちをぶつけた。壁に一枚かかっている絵と言えば、引き伸ばされてピンボケしている写真で、雌鳥が岩のような物にうずくまっているところだった。しかし遠くから眺めていると、雌鳥がだんだんボンネットのように見えてきて、それが太った老女の写真で、部屋に向かって笑みを振りまいているものだとわかった。

テーブルには、古いタウン情報誌が積み重ねられ、脇には小説「ペテロと呼ばれたシモン」や、ブロードウェイのスクランダル誌などがあった。ウイルソン夫人が一番気にかけたのは犬だった。浮かない顔のエレベーターボーイがワラを敷いた箱と牛乳を買いに行かせられ、それでも気を利かせて固い犬用ビスケットも一緒に買ってきた。ビスケットは無残にも牛乳皿の中に午後の間ずっと放っておかれてふやけてプヨプヨになっていた。一方、トムは鍵がかかった衣装ダンスの扉からウイスキー瓶を取り出した。

オレは人生で酔ったことは二回しかなく、二回目がその午後のことで、全てがぼんやりとしたモヤに覆われていた。それでも八時頃までは明るい日光がさんと部屋の中を照らしていた。トムの膝に座ってウイルソン夫人が電話で何人かを呼び出した。タバコが無かったので、オレは角のドラッグストアまで買いに行った。帰ってみると誰もいなくて、手持ちぶさたに「ペテロと呼ばれたシモン」を一章読んでみた。文章がめっちゃくちゃだったのか、ウイスキーの酔いからか、オレには書いてあることがさっぱり飲み込めなかった。

トムとマートルが戻ってきた時、（一杯飲んだ後ウイルソン夫人を名前と呼ぶようになっていた）訪問客が次々と戸口に現れた。

妹のキャサリンは、スリムで世馴れた感じのする三十歳ほどの女性で、赤い髪をボブにしてワックスで固めていて、おしろいをはたいた顔は白かった。眉毛は抜かれていて流行の形に描かれてはいたけど、元の形に生えようとする自然の力に押されて、顔の印象はぼやけてしまっていた。動く腕にはめたたくさんの陶器のブレスレットがガチャガチャ音を立てて揺れた。彼女は慣れた感じで急いで入ってくると、我が物顔で家具を見つめているので、てっきりここに住んでいるのかと思った。でも聞いてみると、大笑いしてオレが聞いたことを大声で繰り返すと、女友達とホテルに住んでいると言った。

マッキー氏は階下に住んでいる青白いなよなよした感じの男だった。ここに来るためにヒゲを剃ったばかりのようで、ほおに石鹸の泡をつけ、部屋にいる誰もに一番丁寧な挨拶して回った。オレには芸術関係の仕事をしていると自己紹介し、後で、実は写真家で、壁からオーラを放っているウイルソン夫人の母親の写真は、彼が引き伸ばしたもの

だとわかった。彼の奥さんは、甲高い声で喋り、か弱そうで、美しかったけど冷たい感じのする人だった。自分は結婚してから一二七回、夫の写真のモデルになったと誇らしげに言った。

ウイルソン夫人はいつの間にかクリーム色の手の込んだ薄手のアフタヌーンドレスに着替えていて、部屋を歩くとサラサラと音を立てた。着るものが変わると性格もガラリと変わった。修理店（ガレージ）で見た強いバイタリティは、今や驚くべき傲慢さに変わっていた。彼女の笑い声、手振り、意図がその度事に猛烈に周りを巻き込んで、彼女が大きくなるにつれて部屋の空間はますます狭くなり、煙が立ち込める部屋の中でやかましくギンギシと音を立てる中心を、彼女がグルグル回り始めていったような気がした。

「ねえ、あなた」

彼女はきどった甲高い声で妹に呼びかけた。

「そういった連中っていつも騙すのよ。お金のことしか考えてないのね。先週、足を診てもらったために女を呼んだら、まるで盲腸の手術を済ませましたってぐらいの請求が来たじゃないの」

「その人ってなんて名前？」

マッキー夫人が聞いた。

「エバハート夫人よ。足を診に家まで来てくれるの」

「素敵なドレスね」

マッキー夫人が言った。

「可愛く見えるわ」

ウイルソン夫人は、お褒めの言葉にも高慢そうに眉をひそめて言い返した。

「ちょっと古いドレスよ。どう見えたっていい時に着てるだけよ」

「でも、とっても素敵だわ。言ってること、わかるでしょ」

マッキー夫人がなだめた。

「そのポーズでチェスターに写真を撮らせたなら、ちょっとしたものになると思うわよ」

オレ達は黙ってウイルソン夫人の方へ目をやり、彼女は目の上の髪をかきあげて、オレ達の方を見て見事な笑顔を作ってみせた。マッキー氏は彼女を繁々と見て、頭を傾けて手を顔の前で動かした。

「照明を変えないと」

しばらくして彼は言った。

「モデルの陰影を最大限に活かしたいんです。それから後ろ髪も全部入れたいですね」

「照明はそのままでいいわよ」

マッキー夫人が大声で言った。

「ただ・・・」

マッキー氏は「しっー」と言い、オレたちはまた被写体に視線を移した。そこへ、トム・ブキャナンが声を出してあくびをすると立ち上がった。

「マッキーさん、何か飲み物はどうですか。もっと氷とミネラルウォーターを出してください、マートル。みんな眠ってしまうぞ」

「使いの子に氷は頼んだわよ」

マートルは下層階級の気の利かなさに眉をひそめた。

「全くなんてことよ。いつもせつつかきやいけないんだから」

彼女はオレを見て意味も無く笑った。そして怒った風に犬に歩み寄ると大げさにキスして、まるで十人ものシェフが自分の指図を待ち受けているかのように台所へ足早に入っていった。

「ロングアイランドでいい仕事をしましてね」

マッキー氏が口を挟んだ。トムはポカンと彼を見つめた。

「そのうちの二枚は額に入れて階下にかけてます」

「何の二枚だって？」

トムは立ち入って聞いた。

「修作ですよ。一枚はモンターク岬『カモメ』、もう一枚はモンターク岬『海』と名づけました」

マートルの妹キャサリンは、ソファでオレの隣に座った。

「あなたもロングアイランドに住んでるの？」

彼女が聞いてきた。

「オレはウエストエッグ」

「そうなの？ 一月ほど前にパーティーに行ったわよ。ギャッツビーって人の。その人知ってる？」

「隣に住んでるけど」

「えっと、ウィルヘルム皇帝の甥か従兄弟なんだって。そこからあの人のお金が全部来るんだって」

「そうなの？」

彼女は頷いてみせた。

「わたし、こわいわ。あんな人ににらまれたら嫌だもん」

オレの隣人に関する興味をそそる情報は、マッキー夫人が突然キャサリンを指さしたことで途切れた。

「チェスター、この娘も仕事に使えるんじゃない？」

マッキー夫人は声を上げたが、マッキー氏はうんざりしたように頷いただけで、トムに向き直った。

「きっかけさえあれば、ロングアイランドで仕事ができるんですがね。最初の足がかりが欲しいんです」

「マートルに頼むんだな」

ちょうどウイルソン夫人がお盆を持って入って来たので、吹き出しながらトムが言った。

「彼女が紹介状を書いてくれるよ。そうだろ、マートル？」

「何をしろですって？」

ビックリしたように彼女が聞き返した。

「マッキーさんに、あんたの夫宛の紹介状を書いてやるのさ。そうすりゃ、マッキーさんは彼を使って色々勉強できるわけだ」

そして何か考えながら声を出さずに唇を動かした。

『ガソリンポンプを操るジョージ・ウイルソン』、そんな感じだ」

キャサリンはオレの方に乗り出して耳元でささやいた。

「二人とも、結婚相手にあきあきしてるの」

「そうなのかい？」

「我慢出来ないって」

彼女はマートルを見たあと、トムに視線を移した。

「わたしが言いたのは、結婚相手にウンザリしてるのに何でまだ一緒にいるのかってこと。わたしだったらすぐに離婚して再婚するのに」

「マートルもウイルソンが好きじゃないの？」

その答えは全く予期しないものだった。乱暴で下品な答えが、会話を耳にしていたマートルから返ってきたんだ。

「ほらね」

キャサリンが得意そうに言った。そしてまたヒソヒソ声で話し出した。

「トムの奥さんが邪魔してるのよ。カソリック信者で離婚できないんですって」

デージーはカソリック信者ではない。オレはあまりに明らかなウソにちょっとショックだった。

「あの人が結婚したらね」キャサリンが続けて言った。

「騒ぎが収まるまで西部に行くのよ」

「ヨーロッパの方がもっと確かだろうね」

「あら、ヨーロッパが好きなの？」

驚いたように声を上げた。

「わたしね、モンテカルロから帰ったばかりなの」

「そうなんだ」

「去年よ。女友達と行ったの」

「長くいたの？」

「ううん、ただモンテカルロに行って戻ってきただけ。マルセイユ経由で行ったの。行きは千二百ドル持ってたんだけど、カジノで二日で無くなっちゃった。帰りは、どれだけヒヤヒヤしたかわかる？ あんな街、大っ嫌い！」

午後もふけて、少しの間、窓からのぞく空が地中海の青い蜜のように見えた。そこへ、マッキー夫人のキンキン声がオレを部屋へ引き戻した。

「わたしも、もうちょっとで間違うとこだったのよ」

彼女は勢い込んで言った。

「もう少しでさえないユダヤ人と結婚するとこだったの。何年も追いかけてきて。ダメな男だってわかってたの。みんなが言ったのよ。『ルシル、あの男はあんたとあまりにも釣り合わないわ！』もし、チェスターと出会わなかったら、あの男と結婚してたかも」

「そうね、でも聞いてよ」

大きくうなずきながらマートル・ウイルソンが言った。

「とにかくその男とは結婚しなかったでしょ？」

「そうね、しなかったわ」

「あーあ、わたしは彼と結婚しちゃったのよ」

マートルは言葉を濁した。

「それがあなたのケースとわたしのとの大きな違いね」

「どうして結婚しちゃったの、マートル？ 誰も無理強いさせなかったでしょ？」

マートルは考えこんだ。

「あの人と結婚したのは、紳士だと思ったからよ」

やっと彼女がしゃべった。

「礼儀作法について少しは知ってると思った。でもわたしの靴をなめるにも値しない男だったわ」

「でもしばらくはあの人に夢中だったじゃない」

キャサリンが言った。

「あの人に夢中だったって？」

信じられないようにマートルが叫んだ。

「あの人に夢中だったなんて誰が言うのよ？ わたしはそこにいる人に夢中になっちゃいけないぐらい、あの人にも夢中になったことはないね」

突然彼女はオレを指差して、みんなが非難めいた目でオレを見た。オレは彼女の過去には一切関係ありませんという顔をしてみせるしかなかった。

「あの人と結婚したのは、頭がどうかしてたのよ。すぐに間違いだったって分かったわ。あの方は結婚式のために誰かの一丁羅のスーツを借りててわたしには話もしなかった。あの方が外出していた時、貸主がやって来たのよ」

マートルは誰が聞いているか確かめるために周りを見まわした。

『あら、あなたのスーツだったの？』って言ったわよ。『それは初耳だったわ』でもスーツを渡した後で、寝転がったまま半日大声で泣いたわ」

「彼女は本当に別れるべきね」

キャサリンはオレにまた話かけた。

「あの自動車修理店（ガレージ）の上でもう十一年も一緒に住んでるのよ。トムが本当に好きになった最初の人なの」

二本目のウイスキーは、そこにいる全員が欲しがった。ただキャサリンだけは「何も飲まなくても気分良くいられる」そうで例外だった。トムは、管理人に電話して有名店のサンドイッチを買いに行かせた。それは申し分ない夕食になった。外に出て、柔らかい黄昏の光の中を東のセントラル・パークの方へ歩いてみたかったけど、出ようとする度に乱暴でけたたましい口論に巻き込まれて引き戻された。まるでロープで椅子に引き寄せられるみたいに。それでも、都心の高い所に並ぶ黄色く光る窓の列は、暗い通りに偶然通りかかった人に向けて、そこの住人の秘密を暗示してたに違いない。そして、窓を見上げて思案している観察人は、オレ自身であるような気もした。オレはそこにいたまま、またそこから離れて、無尽蔵の種類的人生に心惹かれると同時に嫌悪した。

マートルはオレのそばに椅子を引き寄せて、生温かい息をオレの顔に吹きかけながら

トムとの馴れ初めを語り出した。

「電車の向かい合わせになった座席でのことよ。いつも一番最後まで空いてる席なの。わたしは妹に会いにニューヨークに行く所で、一晩泊まるつもりだった。彼は礼服を着てエナメル革の靴を履いていたわ。彼から目が離せなかったけど、彼がこっちを見る度に、彼の頭の上の広告を見ているすってフリをしていたの。駅に着いた時、彼はわたしの後についてきて、白いシャツの胸をわたしの腕に押し付けてきた。警察を呼ぶわよって言ったけど、彼にはそれがウソだって分かってたのよね。彼と一緒にタクシーに乗った時はそれは興奮していて、地下鉄に乗らなきゃいけないのを忘れるほどだった。ただもう、『人生には限りがある、人生には限りがある』って自分に言い聞かせてたわ」

彼女はマッキー夫人に向き直ると部屋中に響き渡るようなわざとらしい笑い声を立てた。

「ねえ、あなた」彼女は言った。

「着替えたらずぐにこのドレスを差し上げるわ。明日新しいドレスを買うわよ。買わなきゃいけない物全部のリストを作らなくっちゃ。マッサージをしてもらって、髪にウエーブをかけて、犬の首輪と、バネで開く小さな可愛らしい灰皿と、夏中持つようなお母さんのお墓にかける黒いリボンの花輪と。やらなきゃいけないことを忘れないように全部のリストを作らなくっちゃ」

もう九時だった。それからすぐと思ったのに、自分の時計を見ると十時だった。マッキー氏は、写真のモデルがやるように握りこぶしを膝の上に置いたまま椅子で眠っていた。ハンカチを取り出すと、彼の頬についていた乾いた石鹸の泡を拭き取ってやった。午後中ずっと気になっていたんだ。

子犬はテーブルに座って煙で見えない目を凝らし、時々微かに唸ってみせた。人々は消えてはまた現れ、どこかに行くと言っては、離れ離れになり、お互いを探し合っては、すぐそばにいるのを見つけた。真夜中近くになると、トム・ブキャナンとウイルソン夫人が立ったまま顔を突き合わせて、ウイルソン夫人がデイジーの名前を呼ぶ権利があるの無いのと声を張り上げて争っていた。

「デイジー！ デイジー！ デイジー！」

ウイルソン夫人が叫んだ。

「言いたきゃいつだって言ってやるわよ。デイジー！ デイ・・・」

その途端、トム・ブキャナンは平手でウイルソン夫人の鼻を鋭く叩いた。

それからバスルームの床は血塗れのタオルで溢れ、女の叱り声と、痛みでうめく声が切れ切れになって混ざった。マッキー氏は居眠りから覚めて、ドアの方を呆然と見つめていた。彼は帰りかけたが、向き直って現場を眺めた。そこでは、詰め込まれた家具の間を救急箱を持った妻とキャサリンが、なだめたりすかしたりしながらウロウロしており、ソファの上には、哀れな怪我人が血を流しながら横たわり、ベルサイユのタペストリー柄の上にタウン誌を広げて被せようとしていた。マッキー氏はまた前を向くと入り口から出て行った。シャンデリアにかかっていた帽子を取ると、オレも後に続いた。

「いつかランチに来てくださいよ」

エレベーターの唸りを聞きながら階下に降りている時、マッキー氏が誘ってきた。

「どこへですか？」

「どこでもいいですよ」

「レバーから手を離してください」

エレベーターボーイがピシャリと言った。

「なんですと？」

マッキー氏が威厳を保ちながら言った。

「触っていたとは気づきませんでした」

「わかりました。喜んで伺いますよ」

オレは申し出を承知した。

・・・オレは彼のベッドの脇に立ち、彼は立派な仕事用ファイルを抱えて下着姿でシーツの間に座っていた。

「これが美女と野獣・・・そして孤独・・・年老いた八百屋の馬・・・ブルックリン橋・・・」

それから、ペンシルバニア駅の下の吹きさらしのホームで横になり、半分眠りつつもトリビューンの朝刊を見ながら、四時の電車を待っていた。

第三章

夏の夜は、隣家から音楽が絶えなかった。ギャッツビーの青々とした庭では、飛び回る蛾のように男や女が、ささやき声をかき分け、シャンペンを掲げ、星々が照らす中を出たり入ったりしていた。午後の高潮時には、飛び込み台から客が海に飛び込んでいる様子や、熱い砂の上に横たわって日を浴びているのや、二隻のモーターボートが水上スキーヤーを引っ張りながら、おびたしい泡を立てて湾を滑って行くのが見えた。週末には自家用のロールスロイスが、朝の九時から深夜まで都心からパーティ会場間の送迎バスとなり、ステーションワゴンは、黄色い小虫の様にすばしっこく走り回って、全ての電車を出迎えた。月曜日には、臨時の庭師を含めてスタッフ八人が、一日中、モップやブラシを持って掃除したり、金づちや剪定バサミを持って前日の破損箇所を修理したりしていた。

毎週金曜日、五箱のオレンジとレモンがニューヨークの果物屋から届き、月曜日には、同じオレンジとレモンが半分に分かれて皮だけになって裏口に積み上げられた。台所にはジュースマシンがあって、執事がボタンを親指で二百回押せばの話だが、三十分で二百個のオレンジを絞ることができるのだった。

二週間に一度は、ギャッツビーの大庭園にクリスマスツリーでも立てるような、何百フィートものキャンバス生地や色とりどりのライトを持った届け物の一行がやってきた。

バフェットテーブルには、テカテカに光るオードブル、スパイスの効いたこんがり焼けたハムが所狭しと並び、その向こうにはピエロの衣装のようなカラフルなサラダ、濃い金色に光っていかにも美味しそうな豚肉や七面鳥の形のパイがあった。メインホールには、本物の真鍮のレールが敷かれたバーがあり、ジンや強い酒やリキュールなどアルコール規制のため長らく忘れられて、若い女の子たちが名前がわからないものがたくさんあった。

七時前にはオーケストラが到着した。五人楽団などのショボいんじゃなくて、オーボエ、トロンボーン、サキソフォン、各種の弦楽器、ホルネット、ピッコロ、大小のドラムなどの楽隊席をいっぱい塞ぐフルセットだった。最後の泳ぎ手がビーチから戻ると、上の階に着替えに行く。ニューヨークからやって来た車は五列になって駐車場に停められる。そしてホールやサロンやベランダは、スペインのカスティールの夢にも出て来ないような、様々な原色の衣装や最新流行の髪型やショールで埋めつくされる。バーはフル回転で、カクテルの列が庭まで続き、気の利いた皮肉や自己紹介なんかすぐに忘れ去

られて、初対面の女たちがあいさつに夢中になり、その場はいよいよ盛り上がった。

地球が傾きながら太陽から離れるに従って、灯りは輝きを増し、オーケストラは黄色いカクテル音楽を奏で、人声のオペラは一層高くなる。一分ごとに笑い声は出やすくなり、陽気な言葉に誘われて惜しげもなく辺りに撒き散らされた。グループは素早く形を変え、新参者でふくらみ、一瞬で離れ離れになり、また集まった。

フラフラ歩き回る者も出て、そうした自信にあふれる女の子たちは、どっしりしとその場所に落ち着いている者の間に滑り込み、グループの中心になってドッとみんなをわかせると、チカチカする灯りの下で目まぐるしく変わる、顔や声や色彩の波の間を勝ち誇ったように渡り歩いていた。

突然、ジプシー女がオパール色の衣装をなびかせて、カクテルをひったくり、勢いよく飲み干して景気づけすると、フリスコダンスのように腕を振り回しながらキャンバス生地を張ったステージに一人で上がっていった。一瞬の静寂の後、オーケストラリーダーが気を利かして彼女のためにリズムを変えてやると、彼女が「フォーリーズ」に出ているギルダ・グレイの代役だというまことしやかな噂がドッと流れた。これでパーティーの始まり！

ギャッツビーの家に初めて行った時、実際に招かれた客はオレ以外にほとんどいなかったと思う。みんな招かれてたわけじゃないのに、そこにいたんだ。ロングアイランドに来る車に乗り込んで、ギャッツビー宅の玄関に辿り着いただけ。玄関でギャッツビーを知ってるヤツに紹介されると、あとは遊園地の客のノリで行動するだけだった。時にはギャッツビーに全く会わずにやって来て、帰っていった。ただ気軽な気持ちで参加することが、入場資格だったんだ。

オレは正式に招待されていた。コマドリの卵のような青色の制服を着た運転手が、土曜の朝早くオレの庭の芝生を横切って主人からの驚くような正式なカードを持ってやって来た。その晩の「小宴」に出席していただければ大変光栄ですと書かれてあった。彼は、オレを度々見かけて訪問しようと思ったが、あいにく都合が重なり果たせなかったそうだ。ジェイ・ギャッツビーと達筆で署名してあった。

白のフランネルシャツを着て、七時ちょっと過ぎに彼の家の芝生を歩いた。そして、居心地悪く思いながら知らないヤツらの渦の中をさまよい歩いた。でも、そこかしこに通勤列車で見かける顔もあった。若いイギリス人があちこちにいるのにも気づいた。上等の服を着て、少し腹が減ってるようにも見えたけど、低い真面目な声で大柄で裕福そうなアメリカ人に話しかけていた。証券か保険か車でも売ってるのに違いないと思った。少なくとも、ああいうヤツらはカチッと鍵穴にハマる言葉を吐けば、簡単に手に入る金がすぐそこにあると思いきりこんでいた。

到着するとすぐにホストを探そうとした。だけど、そこにいた数人に主人がどこにいるかを尋ねても、驚いたようにどこにいるのか見当もつかないと完全否定されるだけで、仕方なく男一人でブラブラしていてもなんとか格好がつく庭のカクテルテーブルに行く

しかなかった。

決まり悪さを忘れるため、しこたま飲んでやろうと歩き出したところ、ジョーダン・ベイカーが屋敷から出てきて、大理石の階段の一番上にたたずみ、少し後ろにのけぞりながら軽蔑したように庭を見下ろしていた。

彼女が望もうが望むまいが、周りに声をかけるには誰かとつるむ必要があった。

「やあ！」

オレは大声で言いながら彼女に近寄った。オレの声は必要以上にデカくて庭中に響き渡った。

「あなたが来るって思ってたのよ」

オレが階段を上っていくと、彼女がぼんやりと答えた。

「隣に住んでるってことを覚えてたから」

オレとつるんでやるという意味か、彼女はあまり親しげでもない様子でオレの手を取ったが、すぐさま階下に来たおそろいの黄色いドレスを着た女の子たちの方へ耳をすませた。

「あら！」

二人は同時に叫んだ。

「勝てなくて残念だったわね」

それはゴルフトーナメントのことだった。ジョーダンは一週間前に決勝戦で負けていたんだ。

「わたしたちのこと知らないでしょ」

黄色のドレスの一人が言った。

「でも、一ヶ月前に会ったのよ」

「あれから髪を染めたのね」

ジョーダンが答えたので、オレはびっくりした。でも、彼女たちが自然に歩き去ったので、ジョーダンのコメントは、仕出し屋が届けたに違いない夕食のカゴからボンと取り出されたような、時間にはまだ早い月に向けられた格好になった。

ジョーダンの細い金色の腕を肩に乗せたまま、二人で階段を降りて庭園をゆっくり歩いた。黄昏の中をカクテルのお盆が通り過ぎていき、例の二人の女の子と男三人と一緒に座った。三人はマンブル氏と名乗った。

「このパーティーによく来てるの？」

ジョーダンが隣の女の子に尋ねた。

「前に来たのがあなたに会った時よ」

彼女は快活にはっきりと答えた。ジョーダンはもう一人に「ルシル、あなたもそうじゃない？」と聞いたら、そうだということだった。

「来たかったの」

ルシルが答えた。

「何をしても気にしないから、いつも楽しく過ごせるし。最後にここに来た時、ドレスをイスに引っかけて破いちゃったの。そしたら彼が来て、わたしの名前と住所を聞いたの。一週間も経たないうちにクロワイエから小包が届いて、中に新しいイブニングドレスが入ってたわ」

「それ、取ってあるの？」

ジョーダンが聞いた。

「もちろん。今夜着ようと思ったんだけど、胸のところが大きすぎて直さないといけないのよ。薄いブルーで藤色のビーズがついてる。二百六十五ドルよ」

「そんなことするなんて、あの人ちょっと変よね？」

もう一人の女の子が気負って言った。

「まるで誰とでもトラブルになるのを避けてるみたい」

「誰のこと？」

オレが聞いた。

「ギャッツビーよ。誰かが言ったんだけど・・・」

二人の女の子とジョーダンが秘密をささやくみたいに身を乗り出した。

「誰かが言ったんだけど、昔、人を殺したんだって」

オレたちは盛り上がった。マンブル氏たちも身を乗り出して熱心に聞いていた。

「そこまでひどくはないと思う」

ルシルが首をかしげながら言った。

「戦時中ドイツのスパイだったとかそんなところだと思う」

男の一人が同意するようにうなずいた。

「オレはアイツをよく知ってるヤツから聞いたよ。ドイツで子供の頃一緒だったって」

オレたちを説き伏せるように言った。

「それは違うわよ」

最初の女の子が言った。

「それは絶対にないって。だって、彼、戦時中アメリカ軍にいたんだもん」

オレたちが彼女の言うことを信じ始めた時、彼女が前屈みになって熱心に言った。

「彼が誰も見てないって気を抜いてる時に見てみてよ。絶対に誰か殺してるんだから」

彼女は目を細めて体を震わせた。ルシルも震えた。オレたちは周りを見渡してギャッツビーがいないか探した。うわさ話なんか普段しないような連中が、こうしてコソコソと話し合ってるんだから、ギャッツビーという男がいかに人のロマンチックな想像をかき立てているかがわかる。

最初の軽食が準備された。次のは真夜中だそうだ。ジョーダンは、庭園の別の側のテーブルを囲んでいる友だちの所へ連れて行ってくれた。三組の夫婦と、ヒリヒリするような嫌味を言うひねくれた大学生がいた。いつかジョーダンが自分のものになると信じているらしい。ぶらぶら歩くでもなく、この席にいる人間は似通った威厳を保っていて、昔気質の高みを保つのが自分たちの役目と自覚しているらしかった。イーストエッグがウエストエッグに歩調を合わせてやりながらも、目の眩むような騒ぎには気を許そうとしていなかった。

「行きましょうよ」

退屈で落ち着かない三十分が過ぎてジョーダンがささやいた。

「ここは息がつまるわ」

オレたちは、主人に会いに行くことを口実に立ち上がった。オレがまだ会ったことが

ないので気にしているとジョーダンが言った。

例の大学生は皮肉たっぷりに、それでもちょっと悲しそうにうなずいてみせた。

最初に人で混み合ったバーをのぞきにいったが、ギャッツビーはいなかった。階段の上から見渡しても見えず、ベランダにもいなかった。思いきって重厚なドアを開けてみた。中は天井の高いゴシック調の書斎になっていた。イングリッシュオークの彫刻で内装しており、たぶん外国の廃墟からそっくり移築した物だろう。

フクロウの目みたいな大きなメガネをかけたがっしりした中年男が、いささか酔った様子で大テーブルの隅に座って、本棚をぼんやりと眺めていた。オレたちが来ると嬉しそうに振り返ってジョーダンを頭のとっぺんから爪先まで眺め回した。

「これをどう思うかね？」

男は性急に聞いてきた。

「これって何ですか？」

そいつは本棚の方へ手を振った。

「あれだよ。わざわざ確かめるには及ばんよ。ワシが確かめた。本物だよ」

「本ですか」

男はうなずいた。

「全く本物だ。ページも何もかも。ダンボールのよくできた作り物かと思ったよ。ページだって。ほら！ 見せてあげよう」

オレたちがいぶかしげな顔をしたので、これ幸いとばかりに急いで本棚に歩み寄りストッダード世界紀行第一巻を持って来た。

「ほらごらん！」勝ち誇ったように叫んだ。

「この本は正真正銘の印刷物だ。アイツはベラスコ(リアリズムを追求した舞台監督)だ！ 上出来だ！ 何という贅沢な作りだ！ 何というリアリズムだ！ やりすぎにもなっておらん。まだ読まれてはないからな。それにしても何しに来たんだ。何を探しておる？」

男はオレから本をひったくると、レンガが一個取られると書斎が全部崩れるとつぶやきながら、急いで本棚に戻した。

「誰が連れて来たんだね？」

男はしつこく尋ねた。

「それとも自分らで来たのかね？ ワシは連れてこられた。ほとんどの人間は連れてこられたのじゃよ」

ジョーダンはそれには答えず、用心深く微笑んでみせた。

「ワシはルーズベルトという女性に連れてこられた」

男は続けた。

「クラウド・ルーズベルト夫人じゃよ。知っておるかね？ ある所で昨夜知り合ったんじゃ。ここ一週間ばかり酒を飲み続けておったんで、書斎におれば酔いが覚めるかと思ってこうしておるんじゃが」

「酔いは覚めましたか？」

「少しはな。まだわからん。まだ一時間ほどしかおらんからな。本については言ったかの？ 本物なんじゃ。あれは・・・」

「言われました」

オレたちは固い握手をすると、戸外に出た。

キャンパスを張った庭園ではダンスが始まっていて、年配の男たちが若い娘と組んで不格好な円を何度も何度も描いていた。もっとうまいカップルたちは体を、くねらせたり、かっこよく決めたりして、隅の方にいた。一人で来ている若い女の子も多くて、単独で踊ったり、オーケストラメンバーをバンジョーや打楽器からしばし解放してやったりしていた。真夜中になるにつれて、パーティーはさらに盛り上がった。有名なテノール歌手がイタリア語で歌い、悪名高いアルト歌手がジャズを歌った。曲の合間には、素人芸が披露され、楽しそうな意味のない笑いがはじけて夏の空に立ち上った。舞台には双子が、あとであの黄色のドレスの女の子たちだと分かったけど、コスチュームをつけて幼稚な芝居をしてみせた。フィンガーボールより大きなグラスでシャンペンが振る舞われた。月は高くあがり、銀の三角形の波が海峡に浮かんで、庭にこだますバンジョーの固い金属的な音に震えていた。

オレはまだジョーダン・ベイカーとつるんでいた。オレたちは、オレと同世代ぐらいの男と、ちょっとしたことで転げ落ちるほど笑う若い女の子と一緒に座った。もうすっかり楽しい気分になっていた。フィンガーボールほどの大きさのグラスでシャンペンを二杯飲み、目の前の出来事が何かものすごい、根源的な意味のある物に変わっていた。

音楽が途切れると、男はオレを見てニッコリした。

「君の顔、どこかで見たような気がします」

彼は丁寧に言った。

「戦時中、第三師団におられませんでしたか？」

「ええ、そうです！ 第九機関銃大隊にいました」

「僕は一九一八年の六月まで、歩兵団第七連隊にいたんです。どこかで君をお見かけしたように思っていました」

オレたちはしばらくフランスのジメジメした灰色の小さな村の話で盛り上がった。

明らかに彼はこの近所に住んでるようだった。高速ボートを買ったんで明日の朝、試し乗りに行くと言っていたから。

「ねえ君、一緒に行きませんか。海峡沿いの海岸近くなんですが」

「何時ですか？」

「何時でも、君がいい時に」

彼に名前を尋ねかかった時、ジョーダンが辺りを見回して微笑んだ。

「今は楽しんでる？」

「ずっと良くなったよ」

オレは新しい知り合いに向き直った。

「自分にとってこれはすごく変わったパーティーなんです。まだホストに会ってませんし。あそこに住んでるんですけど・・・」

オレは遠くで見えない生垣の方に手を振った。

「そしてそのギャッツビーって人が運転手に招待状を持たせてよこしたんです」

一瞬、男は訳がわからないというようにオレを見た。

「僕がギャツビーですが」

出し抜けにそう言った。

「え、そうなんですか！ それは失礼しました！」

オレは叫んだ。

「君が知ってると思ったんですよ。これじゃあ、いいホストとは言えませんね」

彼はやっと理解したように微笑んだ。理解よりもっと深い微笑みだった。それは一生に四、五回ぐらいしかお目にかかれなような相手を心からホッとさせる貴重な笑みだった。彼の意識は、一瞬、全世界に向けられ、いや向けられたように見えて、あらがえないようなほどの温かい理解を持って相手に集中するのだ。自分が理解して欲しいように理解してくれ、信じて欲しいように信じてくれて、自分が与えたいと思う最高の印象を確かに受け取っていますよと確信させてくれるんだ。微笑みが消えるその瞬間に、田舎出の上品な青年に戻った。歳は三十一か二というところで、丁寧でいて親しみを感じさせる喋り方はギリギリ不自然になるのを免れていた。彼が名乗る前から、言葉を慎重に選んでいるのを感じていた。

ギャツビー氏が名乗るのと同じくらいに、執事が急いでやって来て、シカゴから電話がかかっていると告げた。

彼はみんなに向かって小さく一礼した。

「ねえ君、何か必要だったらいつでも言ってください」

オレにそう言った。

「すまないが失礼します。後でまた来ます」

彼が去るとすぐにジョーダンの方を見た。驚きを伝えずにはいられなかったんだ。ギャツビー氏が赤ら顔のでっぴりした中年男だと思ってたんだから。

「あれはどういうヤツなんだい？」

オレは問い詰めた。

「何か知ってる？」

「あれはギャツビーって名前のただの男よ」

「聞きたいのは、彼の出身地だって。仕事は何？」

「あなたもその話題を持ち出してくるのね」

彼女が気のない笑みを浮かべた。

「そうね、前にオックスフォード出身って言ってたわよ」

彼のイメージがぼんやりと出来上がっていく中で、彼女の次の一言でぶち壊しになった。

「でも、わたしは信じないわ」

「なんで？」

「わからない」

彼女は続けた。

「そこに行ったって感じがしないのよ」

彼女の言い方に、「彼が人を殺したと思う」と言った女の子と似通ったものを感じて、オレの好奇心はかきたてられた。

ギャッツビーがルイジアナの湿地帯とか東ニューヨークの南の方の出身とかいうなら全く問題なく信じられる。

オレの経験も浅いから断言はできないけど、若い男が突然どこかから現れて、ロングアイランド海峡の御殿を買うなんてあり得ない！

「とにかく彼は大きなパーティーを主催するの」

都会的なよそよそしさをたもったまま、ジョーダン話題を変えた。

「それにわたしは大きなパーティーが好き。人との距離感が適当にあって仲良くなれるわ。小さいパーティーじゃ気づまりでしょ」

ブーンというバスドラムの音が響いて、突然、庭のスピーカーからオーケストラの指揮者の声が聞こえてきた。

「皆さま。ただ今、ギャッツビー氏のリクエストにより、去る五月にカーネギーホールで大変好評を博しましたウラジミール・トストフ氏の最新作を演奏いたします。新聞でご存知かもしれませんが、一大センセーションを巻き起こしました」

彼は言い過ぎたと思ったのか笑いながら、「なかなかのセンセーションでした」と付け加え、皆がドッと笑った。

彼は力強く締めくくった。

「曲名はウラジミール・トストフの『ジャズの世界史』です」

オレはトストフ氏の曲にも上の空だった。だって、オレの視線は階段に一人立ち、一つ一つのグループを温かな目で見守るギャッツビーに釘付けだったから。日に焼けた皮膚は顔の上で精悍に引き締まり、髪は毎日刈っているかのように短かった。その表情には全く暗いところが無かった。彼は飲んでないから、客と適度な距離が置けるんだろうかと考えていた。ドンチャン騒ぎが高まるにつれて、ますますギャッツビーが姿勢を正しているように思えた。

「ジャズの世界史」の曲が終わると、女の子たちが子犬がじゃれるみたいに男たちの肩へ頭を持たせかけたり、男の腕の中に背中からもたれかかっていたりしていた。誰かが抱きとめてくれるだろうと集団の中に飛び込む娘もいた。だけどギャッツビーに背中からもたれかかる子は誰もいなかったし、肩にフレンチボブが乗っていることもなかった。そしてギャッツビーを引き入れて四重唱団が結成されることもなかった。

「失礼します」

ギャッツビーの執事が突然オレたちの前に現れた。

「バイカー様ですよ？」

彼が聞いてきた。

「失礼ですが、主人があなた様に個人的に会いたいと申しております」

「わたしにですって？」

彼女は驚きの声を上げた。

「そうです。あなた様にです」

彼女はゆるゆると立ち上がり、驚いたという風にオレに向かって目を見張って見せ、執事について屋敷の方に歩いていった。イブニングドレスを着ていようが、どんなドレス

を着ていようが、まるでスポーツウエアを着こなしているように颯爽としていた。それは朝の清々しい張り詰めた空気の中で、初めてゴルフコースを歩いているかのようだった。

オレはぼっちで、もう二時近かった。怪しげな声や気がかりな声が、時々テラスにせりだしている、たくさんの窓がついた長く伸びた部屋から聞こえてきた。ジョーダンの連れの大学生は、今は二人のコーラスの女の子をなんとか引っ掛けようと必死に喋っていた。オレにも会話の中に入るように誘ったけど、断って屋敷の中に入った。

大広間は人で一杯だった。黄色ドレスの女の子の一人がピアノを弾いていて、脇には、有名なコーラスグループにいる背の高い赤毛の若い女が歌を歌っていた。彼女はかなりシャンペンを飲んでいて、その晩は悲しいことばかりとすっかり感傷的になっていた。そして歌いながらすすり泣いた。歌ってる途中、一息つくごとにワッと泣き崩れ、また震えるソプラノで歌い出した。涙は頬を伝った。でも、それがスムーズにいかなかった。涙は玉になってまつ毛にたまり、黒いインクとなって、そこから漏れた分が黒くて細い流れを作っていた。

顔についている音符の通り歌えよというヤジが入り、彼女は手をあげてイスに倒れ込み、酔ってるいせいで深い眠りに落ちてしまった。

「彼女は夫らしい人とケンカしちゃったの」

オレの脇にいる女の子が教えてくれた。

オレは辺りを見回した。残りの女たちのほとんどは、夫と思われる男たちとケンカの最中だった。ジョーダンの連れでさえも、イーストエッグから来た四人組だが、意見の違いで離れ離れになっていた。一人の男は若い女優に鼻の下を伸ばして近寄り、妻はその事態にプライドを保って無関心を装い笑い飛ばそうとしていたのに、やがてカンカンになって脇から攻撃を加える。合間を置いて、夫の脇に現れ、熱したダイヤモンドのようになって「約束したじゃない！」と耳元で叫ぶ。家に帰るのを嫌がるのはワガママな男たちだけではなかった。今現在、大広間では完全に素面(しらふ)の二人の男と、害虫を噛みつぶしたような妻に占領されていた。妻たちは若干声を張り上げて、お互いを心配そうに見やっていた。

「わたしが楽しんでいるといつも夫が家に帰りたいてって言い出すんです」

「そんな自分勝手なことって聞いたことがありませんわ」

「わたしたち夫婦はいつも最初に帰宅するんです」

「うちもですわ」

「そうかな、今晚はほとんど最後の組みじゃないか」

男の一人がおっとりと言った。

「オーケストラの連中は三十分前には帰ったじゃないか」

妻たちは、そんなことは言いがかりだと反撃したが、争いはすぐに終わり、足をバタバタさせているところを抱え上げられて退場した。

ホールで自分の帽子が来るのを待っていると、書斎の扉が開いてジョーダン・ベイカーとギャッツビーが揃って出てきた。彼はジョーダンに向かって何か熱心に言いかけたが、

何人かが別れの挨拶を告げに近寄ってきたため、彼の熱はたちまち冷めて礼儀正しいものになってしまった。

ジョーダンの連れがポーチからもう待てないと言うように彼女を呼んでいたが、彼女は別れの握手をするためにグズグズしていた。

「たった今、本当にすごいことを聞いたのよ！」

彼女はささやいた。

「あそこにどのくらいいたかしら？」

「えっと、一時間ぐらい」

「ほんと・・・すごかったわ」

彼女は繰り返したが何かは言わなかった。

「でも誰にも言わないって約束したから、あなたを焦らしてるんだけど」

彼女はオレの目の前で優雅にあくびをした。

「ねえ、わたしに会いに来てくれない？ 電話帳を見て・・・シガニー・ハワード・・・わたしのおばさん」

言うや否や彼女は身を翻した。日に焼けた手で陽気に敬礼すると戸口で待っている友だちの中に消えていった。

パーティーに初めて来ながら、こんなに遅くまでいたことに決まり悪さを覚えて、ギャッツビーの周りに集まっている最後の客人の中に加わった。オレはパーティーの最初からギャッツビーを探していたことを言って、庭園で会った時に気づかなかった無礼を詫びたかった。

「気にかけてください」

彼はしきりにそう言った。

「そんなに思いつめなくていいですから、ねえ君」

聞き覚えのある言い回しは、肩を撫でている手ほどには親しみが感じられなかった。

「それから、明日の朝九時に高速ボートに乗るのを忘れないで」

その時、執事が肩越しに耳打ちした。

「フィラデルフィアからお電話です」

「わかった、すぐ行く。向こうにもすぐ行くと言ってくれ・・・ではおやすみなさい」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

彼が微笑んだ。その瞬間、最後までいたことがすごく良かったような気がした。まるで彼がずっと望んでいたことのような気がしたんだ。

「おやすみ・・・また明日」

でも、階段を降りかけた時、まだ夜は終わったとは言い難いことに気づいた。玄関口から五十フィートのところに、たくさんのヘッドライトが奇妙で騒々しい光景を照らし出していた。ギャッツビー宅の車道から二分も行かないところで、道路の脇の溝にはまった真新しいクーペが車体は無事だったものの、無惨にも車輪が一個外れていた。壁のと

んがったでっぴりが、車輪が外れる原因になったようで、五、六人の運転手から好奇の目で見つめられていた。運転手たちが車から離れているもので、後続の車の邪魔になり、クラクションなど騒々しい音をたてて、すでに無惨な現場がいつそう凄みを増していた。

長いダスターコートを着た男が、事故車から降り、今や道路の真ん中に立って、車からタイヤへ、タイヤからの見物人へと、愉快そうでありながら困惑した様子でしげしげと見ていた。

「ほれ」

彼は言った。

「タイヤが溝にはまっておる」

その事実は彼にとって驚くべきことらしかった。そのこと自体がオレにとっては驚きで、言っているご本人を見ると、ギャッツビーの書齋で会ったあの男だった。

「どうしてこんなことになったんですか？」

「機械のことは何もわからん」

男は肩をすくめて、断定口調で言った。

「でも、どうしてこうなったんですか。壁にでもぶつけたんですか？」

「聞かんでくれ」

フクロウ眼鏡は責任は一切取りかねるという態度だった。

「わしは運転のことは何もわからん。全くだ。ただ事故が起こってしまった。わかるのはそれだけじゃ」

「運転に自信がないんでしたら、夜に運転するべきではないんじゃないでしょうか」

「わしは運転しとらん」

怒ったように言った。

「やろうとも思わん」

驚きで野次馬が一瞬だけ鎮まった。

「自殺でもしたかったのか？」

「車輪が一個もげるだけでラッキーだったな！ ド下手運転で、運転しようとしなかったんだからな！」

「状況がわかっとらんな！」

加害者が言明しだした。

「運転しておったのはわしではない。中にもう一人おるんじゃ」

この発言に驚きが広がり、「おお・・・」と声が上がった。

と同時にクーペのドアがゆっくり開かれ、群衆（今や大変な人ばかりになっていた）は自然と一歩下がった。ドアがいっぱいに開かれると不気味な静寂があった。そして青白いふらふらした男が、大きなダンスシューズで足元を探りながらとゆっくりと車から現れた。

ギラギラするヘッドライトに目がくらみ、やかましいクラクションに注意が削がれて、亡霊のような男はぼんやりと立っていたが、ダスターコートの男に気づいた。

「どうしたんだ？」

男は静かに言った。

「ガス欠でもしたのか？」

「ほら！」

五、六人の指が取れた車輪を指差した。男はしばらく見てから、空を見上げた。まるで空から落ちてきたんじゃないかと疑ってるようだった。

「取れたんだよ」

誰かが説明してやった。

男はうなずいた。

「初めは停まってたってことも分からなくてヨォ」

そこでポーズ。それから、大きく息を吸い込んで肩をいからせ、はっきりした口調で続けた。

「誰か、ガソリンスタンドがどこにあるか知らないかぁ？」

その男より少しは正気な男たちが、車と車輪は完全に分離してるんだよと教えてやった。

「バックか」

少し間を置いて男が言った。

「バックさせてみよう」

「だけど車輪が取れてるのに！」

男はためらった。

「試して損はねえだろ」

男は言った。

最高潮のクラクションは月まで届く勢いで、オレは向きを変えて芝生を横切り家へと急いだ。だけど一回だけ振り返った。ウエハースのような月はギャッツビー邸の上にかかり、笑い声と話し声がまだ灯りがついている庭にこだましているように思えて、その夜はいつもと同じように素敵に思えた。だけど不意に、窓や立派なドアから空虚さが流れ出てきて、玄関に立っているホストが、手を挙げて礼儀正しく別れの挨拶をしているのを一層孤独に見せていた。

これまで書いてきたことを見返してみると、何週間かずつ離れているこの三日間、自分に強烈な印象を与えたように見える。だけど実際は逆で、忙しかった夏に起こった単なる普通の出来事にしかすぎなかったし、それからかなり後になると話は別だけど、自分の人生の出来事に比べればずっと関心は薄かった。

全くよく働いた。朝早くプロビティ証券に行くためにニューヨーク下町の白い谷間を急いで横切ると、朝日がオレの影を西に投げた。同僚と、若い証券セールスマンの名前は全部覚えて、彼らと一緒に混んだレストランで小さなポークソーセージとマッシュポテトとコーヒーで昼食をとった。ジャージー市に住んでいて、会計係をしている女の子としばらく付き合ったりもした。だけど、彼女の兄さんが怖い視線をよこすもんで、七月に彼女が休暇に出かけたのを潮にそっと手を切ってしまった。

夕食は、通常、イエールクラブでとった。なぜか、それが一日で一番気が重かった。それから、上階の図書館に行って投資と証券の勉強を小一時間ほどした。うるさい連中も

いたけど、図書館まで来ることはなかったので、勉強にはうってつけだった。それから過ごしやすい夜であれば、古いマレー・ヒル・ホテルの前を歩いてマディソンアベニューを歩き、三十三番街を抜けてペンシルバニア駅まで歩いた。

オレはニューヨークが好きになってきた。忙しくて、夜は刺激的で、常に行き交う男や女や車が、落ち着きをなくした目に満足感を与えてくれた。五番街を歩くのが気に入って、人混みからイケてる娘を見つけては、しばらく彼女たちの人生に想いをはせた。そんなことは誰も気づかないし、とがめるヤツもいない。時には、想像の中で彼女たちの後をつけて、人目につかない裏露地の角にある彼女たちのアパートまで行って、その娘がドアを抜けて温かみのある暗闇に吸い込まれる前に、オレに振り向いてニッコリする様子を思い描いたりした。大都会の魅惑的な夕暮れ時には、たまに耐えがたい孤独に取りつかれもしたし、それを他のヤツの中に見たりもした。レストランの夜の開業時まで窓の外でウロウロして、一人で寂しく夕食をとる若いサラリーマン。夜の、そしてまた人生の一番大事な時を無駄にしている若いサラリーマン。

それから八時になり、薄暗い四十何番街の車道が、五列に並ぶ劇場街行きのタクシーで埋め尽くされる頃には、やりきれない憂鬱を覚えた。停まったタクシーの中には、寄りかかる人影が見え、歌声や、聞こえない冗談で笑っている声が聞こえてきて、タバコの明かりが訳の分からない手振りを映し出していた。オレだってきらめく世界に急いでいるんだ、ヤツラの仲間が盛り上がっているのに加わるんだと想像しながら、祝福を送ってやった。

しばらくはジョーダン・ベイカーを見かけなかったけど、夏も真っ盛りの頃、また出会った。最初は、ゴルフチャンピオンでみんなが知ってる彼女と出歩くことに得意になっていた。それから、また違う気分になった。恋に落ちたってわけじゃないけど、なんかいい意味で気になってきたんだ。世間に向けた、いかにも退屈したという彼女の横柄な表情は何かを隠していた。きどった態度は最初は何でもないにしろ、やがては何かを裏に隠してるものだ。そして、それが何かわかったんだ。ウォーウィックでのハウスパーティに一緒に出かけた時、彼女は借りていたオープンカーを返したんだけど、雨の中、幌を開けばなしにしておいたくせにウソをついた。それで、デージーの家での晩に思い出せなかったことを急に思い出すはめになった。彼女の最初の大きなゴルフトーナメントで、もう少しで新聞にすっぱ抜かれそうになった話があったんだ。準決勝の試合で、彼女は都合が悪い位置に落ちたボールを動かしたのに、ウソをついたというものだった。ウワサはちょっとしたスキャンダルになったけど、やがて消えていった。キャディーが証言を撤回したし、もう一人の証人も見間違いだったと認めた。その事件とゴルファーの名前はオレの中に刻まれていたんだ。

ジョーダン・ベイカーは賢くて抜け目のない男を本能的に避けていた。今思えば、一定基準から外れることのない所にいる方が安全だったんだろう。彼女はどうしてもないほど不正直だった。不利になることがたえられなかったし、たとえそんな状況になったとしても、冷静で生意気な笑顔を外に向けながら、筋肉質でキビキビした肉体を最大限に活かすために、ごく若い頃からいろいろごまかしてきたんだと思う。

そんなことは大した問題じゃなかった。女の子が不正直なのは深追いするもんじゃないし。ちょっと気の毒に思えたけど、そのうちに忘れてしまった。それで、さっきのハウスパーティーでのことだったんだけど、車の運転について面白い話になった。彼女が車を道路の作業員にあまりにも近かつけたんで、車の泥除けが作業員のコートボタンをひっかけたことがきっかけだった。

「ヘタクソな運転だな」

オレは文句をいった。

「もっと注意しろよ。そうじゃなければ運転をやめるんだな」

「注意してるわよ」

「全然ダメだね」

「あら、他の人が注意してくれるじゃない」

彼女は軽く付け足した。

「それが何なんだよ」

「他の人が避けてくれるわよ。事故は二人いないと起こらないんだから」

「じゃあ、相手が君みたいに不注意だったらどうするんだい」

「そんなことは起こって欲しくないわね」

彼女は答えた。

「不注意な人は大嫌い。だからあなたが好きなの」

彼女の灰色の太陽に照らされた目はまっすぐ前を見つめていたのに、関係を発展させようという意思を感じて、一瞬、彼女を愛しているような気分になった。でも、オレは即決する方じゃないし、欲望にはブレーキをかけることにしていたし、まずやるべきことは故郷でのもつれた関係の精算ってのも分かっていた。週に一度は手紙を書いて、「愛を込めてニック」とサインをしていたんだ。思い浮かぶのは、その娘がテニスをしているときに、上唇にかすかに汗の粒が浮かぶことぐらいだったのに。それでもオレたちにはうっすらとした理解があったんで、うまく断ち切らないといけなかった。

誰だって一つは譲れない美德ってものがあるだろ。オレのはこれだった。オレほどウソがつけられない人間なんて滅多にいない。

第四章

日曜日の朝、教会の鐘が海岸沿いの村々に鳴り響く中、俗世間の男女がギャッツビーの家に戻り、彼の芝生の上を陽気に歩き回っていた。

「彼は酒の密売人よ」と言う若い娘たちは、ギャッツビーのカクテルと花の間をふらふらしていた。

「昔、フォン・ヒンデンブルグ元帥の甥で悪魔の親戚だっていわれたんで、その人を殺したの。バラを取ってきてよ、ハニー、で、最後の一滴をそのクリスタルグラスに注いでよ」

以前、汽車の時刻表の空欄に、ギャッツビーの家に来た人間の名前を書き留めておいたことがある。それは今では古い時刻表で、折り目が崩れていて「この時刻表は一九二二年七月五日より有効」と書かれてある。でも、変色して灰色になっても名前は読むことができるので、ギャッツビーのもてなしを受け入れたのに彼のことは何も知らないという微妙な敬意の念を払った人たちについて、オレが述べるよりは、よく語ってくれることと思う。

イーストエッグからの来訪者は以下の通り。チェスター・ベッカー夫妻とリーチ夫妻。イエール大学でオレの知り合いになったバンセンという男。そして去年の夏、メイン州で溺死したウェブスター・シベット博士。ホーンビーム夫妻、ウィリー・ヴォルテール夫妻、いつも隅っこに集まってはヤギのように鼻を鳴らして近寄ってくる者には誰にでも声をかけていたブラックバックという名の一族。イスメイズ夫妻とクライスティ夫妻（というかヒューバート・アウアーバツハとクライスティ氏の妻）。ある冬の午後、理由もなく髪の毛が綿のように白くなったと言われたエドガー・ビーバー。

クラレンス・エンダイブはイースト・エッグ出身だったと記憶している。彼は一度だけ白いニッカーボッカーズを履いてやって来て、庭でエティという名の酔っ払いと喧嘩していた。島の奥地からは、チードル夫妻、O・R・P・シュレイダー夫妻、ジョージア州のストーンウォール・ジャクソン・エイブラムス夫妻、フィッシュガード夫妻、リブリー・スネル夫妻が来ていた。スネルは刑務所に行く三日前にはそこにいたが、砂利道で酔っ払って寝てしまい、ユリシーズ・スウェット夫人の車が彼の右手をひいてしまった。ダンシー夫妻の他にも、六十歳を過ぎたS・B・ホワイトベイト、モーリス・A・フリンク、ハンマーヘッド夫妻、タバコ輸入業者のペルーガとその娘たちも来ていた。

ウェストエッグからはポール夫妻、ムレディー夫妻、セシル・ローバック、セシル・

ショーエン、州議会議員のグリック、映画審査会を牛耳っていたニュートン・オーキッド、エックハウスト、クライド・コーエン、ドン・S・シュワルツ(息子)、アーサー・マッカーティなど、映画関係者がやってきた。それにキャットリップ夫妻、ベンバーグ夫妻。G・アール・マルドゥーンはマルドゥーンの弟で、後に妻を絞め殺した。プロモーターのダ・フォンターノ、エド・レグロ夫妻、ジェームス・B・フェレット、デ・ジョンズ夫妻、アーネスト・リリーらはギャンブルに来ていて、フェレットが庭にふらふらとやって来たら、それは大負けした時で、翌日からアソシエイテッド・トラクションは利益を上げなければならなくなった。

クリスプリンガーという名の男は、「下宿人」と呼ばれるほど頻繁に、そして長い間そこにいた。そいつは家が無かったんじゃないかと思う。演劇関係者では、ガス・ワイズ、ホレス・オドナヴァン、レスター・マイヤー、ジョージ・ダックウィード、フランシス・ブルなどがいた。また、ニューヨークからはクローム夫妻、バックヒソン夫妻、デニッカー夫妻、ラッセル・ベティ夫妻、コーリガン夫妻、ケラー夫妻、デュワーズ夫妻、スカリー夫妻、S・W・ベルチャー夫妻、スマイクス夫妻、今は離婚した若いクインズ夫妻、そしてタイムズスクエアで地下鉄の前に飛び込んで自殺したヘンリー・L・パルメットがいた。

ベニー・マクレナハンは女の子を四人連れてやってくるのがお決まりだった。彼女たちは身体つきは全く違っていたのに、あまりにも似ているので、前にもそこに来たかのように見えた。彼女たちの名前は忘れてしまったが、確かジャクリーヌだったか、コンスエラだったか、グロリアだったか、ジュディだったか、ジューンだったか、花と月のような美しい響きの名前だったか、あるいはアメリカの大資本家にありそうな厳しい名前だったか。もう忘れてしまった。もし問い詰めれば資産家の縁続きだと白状したかもしれない。

このほかにも、ファウスティーナ・オブライエンが一度は来ていたし、ベーデッカーの娘たち、戦争で鼻を撃ち抜かれた若きブリュワー、アルブルックスバーガー氏、彼の婚約者であるミス・ハーグ、アルディタ・フィッツ・ペーターズ、かつてアメリカ軍団長だったP・ジュエット氏、ミス・クラウディア・ヒップと彼女の運転手と噂される男、そしてオレたちが公爵と呼んでいたどこかの王子で、名前を聞いたかどうか忘れてしまった男がいた。

夏になると、ギャッツビーの家にはこのような連中が集まっていた。七月下旬のある朝九時、ギャッツビーの豪華な車がデコボコの車道を駆け上がってオレの家の玄関先にたどり着き、三音階のクラクションを鳴り響かせた。オレは彼のパーティーに二回ほど参加しているし、高速ボートに乗せてもらい、急な招待を受けて頻繁に彼のビーチを利用させてもらってもいたが、彼から訪ねてきたのはこれが初めてだった。

「おはようございます」

「おはよう。今日は一緒に昼食をどうかと思ひまして、これから出かけたんです」

彼は車のダッシュボードの上でバランスを取りながら、アメリカ人特有のせわしない

身振り手振りを交えていた。この性質は、オレが思うに、若い頃、物を持ち上げたり、じっとして座っていたことが無かったため、もっと言えば、いつ始まるか分からずに神経をすり減らすアメリカ特有の競技に、優雅な所作は必要ないからだ。この性質は彼を落ち着きなく見せて、几帳面な側面をぶちこわしにしていた。決してじっとしていることはなく、いつもどこかで足音をたてたり、手をイライラと開いたり閉じたりしていたんだ。

彼はオレが自分の車に感心しているのを見ていた。

「ね、きれいでしょ」

オレがよく見えるように車から飛び降りた。

「見たことはないの？」

見たことはある。誰だって見たことがある。豊かなクリーム色の車体に燦然と輝くニッケルが鮮やかで、大きくて長く伸び、車体のあちこちのふくらみには帽子箱や食器箱、工具箱などを得意げに隠していた。迷路のように入り組んで段々になった風除けガラスは鏡のようにいくつもの太陽を反射していた。温室のような何層にも重なったガラスの後ろで緑の皮張りのシートに座って、オレたちは街へと向かった。

この一ヶ月の間に五、六度話をしたが、残念なことに彼は大した話題は持っていないことがわかった。だから何か意味不明な人物という第一印象は次第に薄れて、オレの中では手の込んだ隣の酒場の主人に過ぎなかった。

そして、気まずい車の旅が始まった。ウエストエッグに着く前頃には、ギャッツビーの優雅なセリフは途切れ途切れになり、何か考えあぐねたようにキャラメル色のスーツの膝を軽く叩き始めた。

「ねえ、君」と彼は突然切り出した。

「それはともかく、僕のことはどう思っているの？」

少し圧倒されたオレは、答えになるような当たり障りのないことを言ってみた。

「僕の人生について話をしようと思う」と彼は遮った。

「聞いた話で僕のことを誤解しないで欲しいんだ」

自分のホールでみんなが面白おかしく言い合っているねじ曲げられた非難に気づいていたらしい。

「神に誓って真実を語ろう」

突然、右手で神への宣誓を表した。

「僕は中西部の裕福な一族の息子なんです・・・今は皆死んでしまいましたが。アメリカで育ちましたが、先祖が皆、長年オックスフォードで教育を受けてきたので、僕もそこで教育を受けました。それは家族の伝統なんです」

彼はオレを横目でじっと見ていた・・・そして、ジョーダン・ベイカーが彼は嘘をついていると言ったわけがわかった。「オックスフォードで教育を受けた」という言葉が、何か気になることでもあるかのように早口になっていた。あるいは、飲み込んだか、喉を詰まらせたかで言いにくそうにしていた。そして、一度疑い出すと彼の信憑性はガラガラとくずれていき、他に何を隠しているんだろうかと考えていた。

「中西部のどこですか？」

さりげなく聞いてみた。

「サンフランシスコです」(サンフランシスコは極西で中西部ではない)

「なるほど」

「家族は皆死んでしまい、僕は大金を相続したんです」

その声は、突然家族を全部亡くした悲しみが戻ってきたかのように悲しげだった。でもふと、オレは騙されてんじゃないかと思って彼を見てみたが、そうでもなさそうだった。

「その後、インドの若い王のように、パリ、ヴェネツィア、ローマなどヨーロッパの首都を転々としながら、ルビーを中心とした宝石を集めたり、狩で大型の獲物を仕留めたり、自分のために少し絵を描いたりして、昔自分の身に起こった悲しい出来事を忘れようとしたんです」

笑いがこみ上げてくるのをオレは必死で抑えたよ。彼の言うことから、ターバンを巻いたおがくず人形が、中のおがくずをポロポロこぼしながら、パリのブローニュの森で虎を追いかけている珍妙な姿しか思い浮かばなかった。

「それから戦争が始まってね、君。僕はホッとして一生懸命死に場所を探そうとしていたんですが、運が強いようでした。戦争が始まってから、中尉に任命されました。アルゴヌの森では、二つの機関銃部隊を率いてあまりに前方に進みすぎたため、両脇に半マイルの隙間ができてしまった。味方の歩兵隊がついてこれないんです。僕らは二日二晩そこに滞在しました。百三十人の兵士に十六挺のルイス軽機関銃です。歩兵がようやく合流したときには、その記章から判断すれば三個師団分とも思える累々と重なるドイツ兵の死体の山がありました。僕は少佐に昇進し、連合国各政府からも勲章を授与されたんです。アドリア海に浮かぶ小さなモンテネグロからもです！」

小さなモンテネグロ！ 彼はその言葉を釣り上げ、微笑みを浮かべながらうなずいた。その笑顔はモンテネグロの苦難の歴史を理解し、モンテネグロの人々の勇敢な闘争に共感していた。小国とはいえ、彼に賛辞を与えることになったモンテネグロの温かい心とその国内事情をも十分に理解しているようだった。オレの猜疑心は今では彼に対する深い興味の中に沈んでしまって、十冊ほどの雑誌を素早く拾い読みしたような気分になった。

彼がポケットに手を伸ばすと、リボンがかけられた金属片がオレの手のひらに落ちてきた。

「モンテネグロのものです」

驚いたことに、それは本物のように見えた。

円形に、ダニエロ勲章、モンテネグロ国王 ニコラと文字が並んでいた。

「裏返してみて」

「ジェイ・ギャッツビー少佐殿その特別な勇氣のために」と刻まれていた。

「これはいつも持ち歩いている物で、オックスフォード時代の記念品なんです。トリニティー・カレッジの中庭で撮ったもので、左の男は今のドーカスター伯爵」

ブレザーを着た六人組の若者が尖塔の多いアーチの中でくつろいでいる写真だった。そこにはクリケットのバットを手にした、今とさほど変わらないけど、心持ち若いギャツ

ツビーがいた。

では全部本当だったのか。オレは、ベニスの大運河に面する大邸宅に敷かれた燃え立つような虎の皮や、彼がルビーの箱を開けて、深い真紅の光に照らされながら、傷ついた心の痛みを和らげようとしているのを思い浮かべた。

「今日は君に大事なお願いがあるんです」と記念品を満足げにポケットに入れながら彼が言った。

「だから、僕のことを知っておいてほしいと思ったんです。ただのつまらない者とは思ってほしくないんで。僕はいつも見知らぬ人の間にいることが多いんです。悲しい記憶を忘れようと、あちこち漂っていたからです」

彼は言葉をにごした。

「詳しい話は今日の午後に聞くことになるでしょうけど」

「ランチで？」

「いや、今日の午後。君がベイカーさんとお茶に行くことをたまたま耳にしまして」

「ひょっとして、ベイカーさんが好きなんですか？」

「いや、それは違うよ、君。ベイカーさんが自分から話したいと言ってくれたんだよ」

何の話かは知らないけど、興味よりも先に腹が立った。ジェイ・ギャッツビーの話をするためにジョーダンをお茶に誘ったのではないのだ。彼からの依頼は聞くべきことなんだらうけど、一瞬、人で溢れかえった彼の芝生に足を踏み入れてしまったことを後悔したよ。

彼はそれ以上何も言わなかった。ニューヨークが近づくにつれて、だんだんつつきにくく見えてきた。ポート・ルーズベルトを通り過ぎると、そこには赤い線を一本引いた外航船が垣間見え、石畳のスラム街に沿って、メッキもはがれた時代遅れの、それでもまだ完全には寂れていない陰気な酒屋が並んでいた。灰の谷が両側に広がり、通り過ぎるに、ウイルソン夫人が喘ぎながら力を込めてガソリンポンプを押しているのが垣間見えた。

アストリアという街の中程まで、フェンダーを翼のように広げて反射光を撒き散らしながらぐんぐん進んでいった。ちょうど街の真ん中ぐらいの所までだった。だって、高架線の柱の間をくぐっていると、オートバイのドドドドッというお馴染みの音が聞こえてきて、大慌ての警察官が脇を走ってきたんだから。

「わかったよ、君」

ギャッツビーはそう言ってスピードを落とした。そして財布から白いカードを取り出し、男の目の前でそれを振った。

「あなたでしたか」と警官は同意し、帽子を傾けた。

「今度はお邪魔しません、ギャッツビーさん、失礼しました！」

「今のは何ですか？」

オレは尋ねた。

「オックスフォードの写真？」

「警察部長の頼みで一回仕事をしたことがあってね、毎年クリスマスカードを送っても

らってるんです」

大きな橋の向こうから太陽の光が大梁越しに注がれ、走り交う車がきらめいていた。

川の向こうには、札束の汚れを見ないフリをして願いをこめてこしらえた、白くそびえる角砂糖のような街がそびえ立っていた。

クイーンズボロ橋から見渡すニューヨークは、いつも初めて目にするような感動がある。太古から交わされてきたあらゆる神秘、あらゆる美しさを秘めているのだ。

死者を乗せて、花で埋め尽くされた霊柩車が、オレたちの前を通り過ぎ、それに続いてブラインドのついた二台の馬車、そして仲間を乗せたもう少し陽気な馬車が続いた。その連中は、東南ヨーロッパ人特有の悲しげな目と薄い上唇でオレたちを眺めていたけど、気の重い休日にギャッツビーの立派な車を見れば少しは気が晴れるかと思えばうれしかった。ブラックウェル島を渡るとき、白人の運転手の運転するリムジンが、男二人、女一人、計三人のシャれた服を着た黒人を乗せてオレたちの前を通り過ぎた。ビッグライバルの出現に彼らの黄色い目玉が飛び出しそうだったので、オレは声をたてて笑ってしまった。

「この橋を渡ってしまえば、もう何が起きてもおかしくない・・・なんだってありうる」

そんな気がしてた。だからギャッツビーだっているわけだし。なんの不思議もない。

賑やかな正午。四十二番街にある扇風機がよく効いた地下室でギャッツビーと昼食のために待ち合わせた。外の明るい所から急に暗い所に入ったのでまばたきしていると、薄暗い控室で他の男と話しているギャッツビーを見つけた。

「キャラウェイさん・・・こちらは友人のウルフシェイムさん」

小柄で獅子鼻のユダヤ人が、大きな頭を上げてオレを見た。両側の鼻の穴から黒々とした鼻毛の束が出ていた。それからやっと薄明かりに慣れて、彼の小さな目が見えた。

「で、ワシは見たんですよ・・・」と言いながら、ウルフシェイム氏は強くオレの手を握った。

「そこでワシがどうしたと思われるかな？」

「何でしょうか？」

オレは丁寧に尋ねた。

でも、明らかにオレに話しかけているのではなく、オレの手をそそくさと離してギャッツビーに表情豊かな鼻を向けた。

「ギャッツポーに金を渡してこう言ってやったんじゃ。わかったな、ギャッツポー。アイツが黙るまで一銭も払うなよと。アイツは黙ったね」

ギャッツビーがオレたちの腕を掴んで、レストランに連れて行ったので、ウルフシェイム氏は言いかけた言葉を飲み込んで、夢遊病者のようにポカンとした。

「ハイボールでよろしいですか」とヘッド・ウェイターが尋ねてきた。

「ここはいいレストランじゃのう」とウルフシェイム氏は天井の長老派らしいニンフ像を見ながら言った。

「でも、ワシは通りの向こう側の方が好きなんじゃが！」

「ええ、ハイボールを」

ギャッツビーはウェイターに同意して、ウルフシェイム氏に言った。

「あそこは暑すぎますから」

「暑くて狭いが、思い出がたっぷりあるわい」

「そこはどこですか？」オレは聞いてみた。

「オールド・メトロポールじゃよ」

「オールド・メトロポール」

ウルフシェイム氏は憂鬱そうにうなだれた。

「死んだ人間の顔でいっぱいじゃった。死んだ友だちで溢れておった。ロージー・ローゼンタールが撃たれた夜のことは一生忘れられんな。六人がけのテーブルでロージーは一晩中たらふく食べて飲んでいましてね。朝も近いという頃、ウェイターがひきつった顔でロージーのところにやって来て、誰かが外で話したいと言いおった。ロージーがわかったと言って立ち上がりかけたんで、ワシが椅子に引きずり下ろしてやったよ。ヤツらがここに入ってきてもいいが、ロージー、お前が出るのだけはやめてくれ。ワシの顔を立って、部屋から出るなよと言ったんじゃ。もう朝の四時で、ブラインドを上げれば朝日が見えたじゃろう」

「彼は出たんですか？」

オレは無邪気を装って聞いてみた。

「ほんтоに行ってしまったね」

興奮したウルフシェイム氏の鼻がオレに向けられた。

「ドアの前で振り返り、『あのウェイターにコーヒーを取られないように！』と言って、歩道に出て行った。ヤツらは歩道に出た彼の満腹の腹にを三発ぶっ放して車で逃げたんじゃ」

「四人は電気椅子送りでしたよね」とオレは思い出しながら言った。

「ベッカーとで五人」

彼の鼻の穴が興味深そうにオレの方を向いた。

「あんた、仕事のゴネクション（コネ）を探しとるんじゃろ」

思いがけない問いに、オレはひいてしまった。ギャッツビーが代わりに答えてくれた。

「いや、違う」彼が割り込んだ。

「この人じゃないんだ」

「違うのかい？」

ウルフシェイム氏は失望したようだった。

「ただの友人だ。その話は別の機会にと言ったでしょう」

「失礼した」とウルフシェイム氏は言った。

「人違いじゃった」

汁気たっぷりの煮込み料理が運ばれてきて、ウルフシェイム氏はオールド・メトロポールの感傷を忘れてすごい勢いで美味そうに食べ始めた。その間、彼の目は部屋中をゆくりと隅々まで見渡していた。振り返って真後ろまで確認して、ぐるり一周を見終わった。オレがいなけりゃ、テーブルの下ものぞいたに違いない。

「ねえ、君」

ギャッツビーがオレの方に乗り出してきた。

「僕は車の中で君を少し怒らせたような気がするんですが」

あの微笑みだった。でも今回はオレも負けてはいられなかった。

「隠し事が嫌いなんです」

オレは言ってやった。

「なんで、もっと簡単にオレにどうして欲しいか言ってくれないんですか。なんで、そこでベイカーさんが出てくるんですか」

「隠し事は何もありませんよ」

オレをなだめるように言った。

「ベイカーさんは一流のスポーツウーマンですから、間違っことはしませんよ」

突然、時計を見て飛び上がると、ウルフシェイム氏とオレをテーブルに残して行ってしまった。

「電話をかけないといけないじゃ」

ウルフシェイム氏が目で追いながら言った。

「なかなかいい男だろう。見かけもいいし、立派な紳士だ」

「ええ」

「あれはオックスフォードを出とるんじゃよ」

「ああ！」

「イギリスのオックスフォード・カレッジに行ったんじゃ。オックスフォード・カレッジは知っとるかの」

「聞いたことはあります」

「世界でも最も有名な大学じゃ」

「ギャッツビーを長らくご存知なんですか？」

オレは聞き返した。

「ここ数年じゃ」

彼はうれしそうに答えた。

「戦争が終わってすぐに知り合ったんじゃよ。小一時間も話してから、生まれも卑しくない紳士とわかった。ワシは、こういう紳士ならおふくろや女兄弟に紹介したいもんだと思ったね」

そこで話を止めた。

「さっきからワシのカフスポタンを見ておるようじゃが」

オレはそれまで全く注意を払っていなかったが、言われて初めて見てみた。それはどこかで見たような象牙でできていた。

「最高級の標本でな、人間の臼歯じゃよ」と教えてくれた。

「へえ！」オレはじっくり見た後言った。

「奇抜なアイデアですね」

「そうじゃろ」

シャツの袖をコートの中に入れ込んだ。

「なあ、ギャッツビーは女はしっかり選ぶんじゃ。友人の奥さんに手を出したりはせん」

完璧に信頼されてる当のご本人が戻ってきてテーブルに着くと、ウルフシェイム氏がコーヒーをガブリと飲んで立ち上がった。

「楽しい昼食じゃった。若いお二人の邪魔をせんよう、行くことにするわい」

「マイヤー、まだいいだろう」

あまり気乗りのしない感じでギャッツビーが止めると、ウルフシェイム氏は祝福を与えるように手をあげた。

「ご親切はありがたいが、ワシは違う世代になるんでの」

彼は大真面目に言った。

「二人でここで座って話しておればいい。スポーツやら若い娘やら・・・」

ここで手を振って出てこない言葉をごまかした。

「ワシは五十でな、年寄りの冷や水は無用じゃろ」

別れの握手をしてから後ろを向く時、彼の痛ましい鼻が震えていた。オレが何か言って怒らせたんだろうかと思った。

「あの人は時々神経質になる時があるんです」

ギャッツビーが説明してくれた。

「今日は調子が悪い日みたいです。ニューヨークでは割と知られた存在なんです。ブロードウェイに住んでるんです」

「いったい何をやってる人なんですか。俳優なんですか」

「いえ」

「歯医者？」

「マイヤー・ウルフシェイムが？ いえ、ギャンブラーですよ」

ギャッツビーは言いよどんだが、静かに続けた。

「あの人は一九一九年のワールド・シリーズで八百長試合を仕組んだ人です」

「八百長試合？」

オレは繰り返した。

全く驚いた。一九一九年のワールド・シリーズで不正行為があったことはもちろん覚えていたが、オレが考えられることとしたら、起こるべくして起こった事件だろうぐら이었다。まさか一人の男が、金庫破りの泥棒のように金が欲しい一心で、五千万人の人々の信頼を裏切ろうなんて思いもよらなかった。

「どうやってあんなことをしたんです？」

オレは一息ついて尋ねた。

「あの人はただチャンスを見ていただけです」

「なぜ彼は刑務所にいないんですか？」

「捕まえることができないからですよ、君。賢い男ですから」

オレは自分の小切手で払うよう言い張った。ウェイターがオレにお釣りを持ってきた時、混雑した部屋の向こうにトム・ブキャナンの姿が見えた。

「ちょっと来てくれませんか。挨拶したい人がいるんで」

オレたちを見かけた時、トムが飛び上がって数歩駆け寄ってきた。
「これまでどこに行ってたんだ」
押し付けがましく言ってきた。
「デイジーがカンカンだぞ。君が来ないもんだから」
「こちらがギャッツビーさんでこちらはブキャナンさん」
二人は軽い握手をした。ギャッツビーは固まって、これまでに見たことがないピミョウな顔をしていた。
「とにかく、今までどうしてたんだ」
トムが問い詰め始めた。
「なんでまた、こんな遠い所に食べに来てるんだい」
「ギャッツビーさんとランチをとったとこだよ」
オレはギャッツビーの方に振り返ったけどそこにはもういなかった。

「一九一七年の十月のある日・・・」

その日の午後、プラザホテルのティーガーデンで、背もたれの真っ直ぐな椅子に真っ直ぐに座ったジョーダン・ベイカーが話し始めた。
「私はある所から別の場所に向かって歩いてたの。半分は歩道、半分は芝生の上よ。芝生の上を歩く方が楽だった。だってイギリスから来た靴を履いてて、ゴム製の滑り止めが柔らかい土にめり込むんだもの。新しい格子縞のスカートを履いてて、風が吹くとスカートが少し持ち上がって、家々の前に立ってる赤、白、青の星条旗もグッと伸びて、パタパタとたしなめるような音を立ててた。
一番大きい旗を掲げて、一番大きい芝生があるのは、デイジー・フェイの家だったの。彼女は私より二歳年上のちょうど十八歳で、ルイビルの若い女の子の中では断然人気者だった。白い服を着て、小型の白いロードスター(車)を持ってた。一日中彼女の家には電話が鳴りっぱなしで、キャンプ・テイラーに滞在中の若い将校たちがこぞって『とにかく一時間だけでも』と、彼女と二人っきりになれるように頼み込んでたわ」

「その朝、彼女の家に通りかかったら、彼女の白いロードスターが縁石の横にあって、見たこともない中尉と一緒に座ってたの。二人はお互いに夢中になってて、わたしが五フィート離れたところに来るまで気づかなかった。

『こんにちは、ジョーダン』

彼女が不意に呼んだの。

『こっちに来て』

彼女がわたしと話したがってることが嬉しかった。だって、年上の女の子の中で一番尊敬してたんだもの。包帯を作り赤十字に行くのって聞かれて、そうだと答えたわ。じゃあ、今日はわたしが行けないって伝えてくれるって頼まれたの。彼女がしゃべっている間、女の子なら誰だってこう見られたいって思う目つきで、将校が彼女を見つめてた。それがロマンチックで、それからずっと忘れられなかった。彼の名前はジェイ・ギャッツビー。それから四年以上も彼を見ることがなかったわ。ロングアイランドで会った時も同じ男だとは気づかなかったし。

それが一九一七年のことだったのよ。次の年には、わたしもボーイフレンドが数人できて、トーナメントにも出るようになったんで、デイジーにはあまり会わなくなったわ。誰かと出かけるときは、彼女は少し年上の人たちとつるんでたわね。それから、悪い噂が流れた。ある冬の晩、海外に出征する兵士を見送りにニューヨークに行こうと荷造りしているのが、お母さんに見つかったんだって。それが事実上止められて、彼女は数週間も家族とは口をきかなかったそうよ。それから、彼女は兵士たちと遊ぶことはやめて、軍隊には絶対入れない、街にいる扁平足で近眼の男の子たちとだけ付き合ってたわね」

「次の年の秋には、彼女はいつもの陽気さを取り戻してた。前より明るくなったかも。休戦後に社交界デビューして、二月にはニューオリンズの男性と婚約してたと思う。六月にはシカゴのトム・ブキャナンと結婚して、ルイスビルは今までにないほどの大騒ぎになってたわ。トムは、列車四両貸し切りにしてシカゴから百人連れてきて、シールバツハホテルの一階を貸し切りにしちゃって、挙式の前日には、三十五万ドルもする真珠のネックレスを彼女にプレゼントしたのよ。

わたしはブライズメイドになったわ。披露宴の三十分前に部屋に入ると、彼女は花柄のドレスを着て六月の夜のように美しかったのに、べろんべろんに酔っ払ってベッドの上に寝てたの。片手にソーテルヌのワインボトルを持って、もう片方には手紙を持っていた。

『お祝いしてよ』ってぶつぶつ言うの。

『飲んだことなかったのに楽しくなってきたわ』

『どうしたのデイジー？』

怖かったわ。あんな子を見たの初めてだったから。

『これあげる』

彼女はベッドの上に引き入れたゴミ箱を漁って、真珠のネックレスを引き出した。『下に持って行って、持ち主さんに返してあげて。デイジーは心変わりした！ デイジーは心変わりしたってちゃんと伝えてきてちょうだい！』

彼女は激しく泣き出したの。泣いて泣いて泣きわめくんで、わたしは急いで外に出て、彼女の母親付きのメイドを見つけてきたわ。ドアに鍵をかけて彼女を冷たいお風呂に入れてあげた。彼女は手紙を放そうとしなかったの。それをバスタブまで持ち込んで、濡れたのを固くしぼってボールにして、それが雪のようにバラバラになってからようやく放したんで、わたしが石鹸皿に入れてあげたの。

でも、彼女はそれ以上何も言わなかった。アンモニア水を気付け薬にして、頭を氷で冷やし、服を着せて、三十分後に部屋から出る時には、真珠が首にちゃんと巻かれてて一件落着。翌日の五時には、けろっとしてトム・ブキャナンと式を挙げて、三ヶ月間の南洋の旅に出かけたわけ。

彼らが新婚旅行から戻ってから、サンタバーバラで見かけたわ。あんなに夫にゾッコンになる女の子なんてなかったわよ。

彼が部屋からちょっと出ようものなら、不安そうに辺りを見回して『トムはどこ』って、彼が帰ってくるまですごく頼りない顔をしてるんだもの。砂の上に座って、膝枕を小一時間もしてやりながら、彼のまぶたを指でなでて、うれしくてたまらないって感

じで見つめてたこともあったわね。二人が一緒にいるのを見るのはちょっと感動的だったわよ。素直に感動して、思わず微笑んでしまうって感じ。それが八月のことだった。わたしがサンタバーバラを発って一週間後のある晩、トムはベントウラの道で馬車にぶつかって、車の前輪が取れちゃったの。彼と一緒にいた女の子も腕を骨折して新聞に載ってしまったわ。サンタバーバラのホテルの客室係をしてる娘だった。

翌年の春、デージーは女の子を産んで、一年間フランスに行ったわ。春にカンヌに行った時と、後でドーヴィルに行ったときに、彼らに会ったんだけど、その後、彼らはシカゴに戻って落ち着いたの。聞いているようにデージーはシカゴでは人気者だったのよ。若くてお金持ちで派手な人ばかりだったけど、その中で彼女の評判はとても良かった。お酒を飲まないからでしょうね。酔っぱらいの中に入れて、飲まないと徳ね。自分の言葉に気がつけることができるし、それに、しくじっても、時間をかせいで誰も気にしないか、気づかせないようにすることもできるし。たぶんデージーは浮気なんかしなかったと思うけど、なんてったってあの声だから・・・

六週間ほど前、彼女は久しぶりにギャッツビーの名前を聞いたの。ウエストエッグに住んでるなら、ギャッツビーを知ってるかってあなたに聞いた時のことよ。あなたが帰った後、彼女がわたしの部屋に入ってきて、わたしを起こしたの。『ギャッツビーって誰？』って聞いてきて。わたしが半分寝ぼけたまま彼のことを教えてあげると、彼女の声が裏声になって、あの人だわって言ったの。それであのギャッツビーが彼女の白い車に乗ってた将校だってわかったの」

ジョーダン・ベイカーの話がすっかり終わった頃には、プラザを出て三十分ほど経っていて、ビクトリア(馬車)に乗ってセントラルパークを走っていた。西五十番街に住む映画俳優が所有する高層マンションの後ろに日が沈み、草の上に集まったコオロギのような、少女たちの澄んだ声がむし熱い黄昏の中から聞こえてきた。

わたしはアラブの王様で
あなたの愛はわたしのもの
あなたが眠っている夜に
あなたのテントに忍び込む

「まったく奇妙な偶然だよな」とオレが言った。

「それが全然偶然じゃないのよ」

「なんで？」

「ギャッツビーが、湾を挟んでデージーの家の向かい側になるように、わざわざあの家を買ったの」

それじゃあ、あの六月の夜に彼がつかもうとしてたのは星だけじゃなかったんだ。無意味な栄華の輝きを抜け出して、ギャッツビーが生き生きとした人間らしく見えてきた。

「彼が頼んでるの・・・」

ジョーダンが続けた。

「いつか午後にデイジーをあなたの家に招待してもらって、それから彼も呼んでもらえないかって」

そのつつましい願いにオレは感動した。五年も待って大邸宅まで買ったのに、ただ舞い踊る蛾に星明かりを与えてやっただけで、望みでることは、いつかの午後に部外者の家の庭に「呼んでもらう」ことだけなのか。

「そんなささやかな願いを聞く前に、オレが全部知っちゃって良かったの？」

「臆病になってるの。長い間待ってたから。それにあなたが気を悪くすると思ったのよ。お堅い人だから」

急に不安になってきた。

「なんで君に御膳立てを頼まなかったの？」

「彼女に自分の家を見て欲しいと思ってるの。あなたの家はすぐ隣だから」

「ああ！」

「きっと、夜に彼女がパーティーに迷い込んでくることを半ば期待してたんだと思う。でも来なかったのよね」とジョーダンと言った。

「それから、ギャッツビーは周りの人に彼女の知人をさりげなく聞いてて、最初にわたしを見つけたの。あの晩、パーティーの途中で呼ばれたでしょ。どこまで手が混んでるのかしら。もちろんすぐにニューヨークで昼食会でも開こうかって聞いてみたわ。彼が大喜びすると思ったんだもん。でもね、そんなことはしたくない、自分の家の隣で会いたいんだって言い張るの。」

あなたがトムの特別な友人だって言うと、彼は隣で会うのをやめにしようとしたの。トムのことはよく知らないらしいけど、デイジーの名前を見つけるために、何年もシカゴの新聞を読んでたって言ってたわ」

暗くなってきて、馬車が小さな橋の下に差しかかった時、ジョーダンの金色の肩に腕を回し引き寄せて、夕食に誘ってみた。もうデイジーやギャッツビーのことなんてどうでも良くなって、清らかで引き締まった体、限りがある頭脳、やたら疑い深く、オレの腕の中で気取って体を預けているこの娘のことしか考えられなくなった。

「追われる者と追う者、忙しい者と退屈な者のみが存在する」オレの耳にはこのフレーズが、ある種の頭痛のような興奮を伴って響き始めた。

「デイジーだって、人生に何かあってもいいじゃない」とジョーダンがつぶやいた。

「ギャッツビーに会いたいのかな？」

「彼女は知らない方がいいわ。ギャッツビーが知らせたくないのよ。ただお茶に誘ってあげればいいの」

暗い木の生垣が切れて、五十九番街の建物の繊細な淡い光が公園を照らしていた。ギャッツビーやトム・ブキャナンと違って、暗い天井飾りやケバケバしい光が交差する映画館の中に浮かぶ少女の面影に悩まされることはない。代わりに、隣にいる娘を引き寄せて抱きしめた。彼女の淡い、小馬鹿にした様な口元が微笑んだので、もう一度抱き寄せて、今度はオレの顔に近づけた。

第五章

その夜、ウェストエッグに戻った時、一瞬、自分の家が火事になったのではと心配になった。二時だというのに、半島の一角が光に包まれ、低木の上に信じられないほどの光が降り注ぎ、道端の電線までもが光っていた。角を曲がると、それはギャッツビーの家で、塔の先から地下室まで、思いっきりライトアップされてるのが見えた。

最初は何か別のパーティーかと思った。乱痴気騒ぎが「かくれんぼ」や「おしくらまんじゅう」に変わって、家中がゲームのために開放されているのかと思った。でも、音はしなかった。木々の風だけが電線を揺らし、暗闇の中でウィンクしてるかのように家の明かりが点いたり消えたりしていた。タクシーがうなりを上げて去っていくと、ギャッツビーが芝生の向こうから歩いてくるのが見えた。

「家で万国博覧会でもやってるみたいだね」とオレが言った。

「そうですか？」ギャッツビーは無表情に家の方を見た。

「あちこち部屋をのぞいてみてたんです。コニーアイランドに行きませんか、君。僕の車で」

「もう遅いよ」

「プールでひと泳ぎするのはどうですか？ 夏の間使わなかったから」

「もう寝るよ」

「そうですか」

彼は自分の感情を精一杯隠しながらオレを見ていた。

「ベイカーさんと話したよ。明日、デイジーに電話してお茶に招待しようと思ってる」

「そんな、いいですよ」と無造作に彼は言った。

「迷惑をかけたくないですから」

「都合のいい日は？」

「君こそ、どの日がいいんですか？」とオレの言葉をすぐに言い換えた。

「君に迷惑はかけたくないから」

「明後日は？」

彼は一瞬考えて、ためらいがちに

「芝生を刈りたいから」と言った。

二人で芝生に目をやった。オレのボロボロの芝生が終わり、彼の黒々として手入れの行き届いた芝生が始まるころには、はっきりした境い目があった。彼がいつてるのはオレの芝生ではないかと思った。

「もう一つ、ちょっと言いたいことがあるんだけど」と彼はあいまいに言ってためらった。

「数日後に回そうか？」オレは聞いてみた。

「ああ、そんなことではないんです。少なくとも・・・」

彼は焦って、同じ言葉を連発した。

「実はね・・・ほら、君ね。君はあまり稼いでないんでしょう？」

「そんなには」

これが安心させたようで、さらに自信を持って続けた。

「そうじゃないかと思ってたんですが、失礼で申し訳ありません・・・僕は副業でちょっとした仕事をしてるんです。ほら、もしもうからないんだったら・・・証券を売ってるんでしょう？」

「そうだけど」

「興味があるでしょう？時間もかからないし、大金が手に入るかもしれませんし。ちょっと内密にしていることがあるんです」

今思えば、この会話が別の状況ではオレを窮地に陥れたかもしれない。でも、その時は明らかに仕事への不器用な誘いだったんで、その場ですっぱり断るのに迷いは無かった。

「手一杯なんで」とオレは言った。

「ありがたいけど、これ以上の仕事はムリ」

「ウルフシェイムと仕事をする必要はないですよ」

彼は明らか昼食の時に「ゴネクション(コネ)」を遠慮していると思ったようだが、オレはそんなことは無いと断言した。

それからオレが話し出すのを期待してもう少し待ってたけど、オレが上の空でノリが悪かったんで、しぶしぶながら家に帰っていった。

その夜はウキウキしてて楽しかった。玄関に入った瞬間に深い眠りについたような気がする。だから、ギャツビーがコニーアイランドに行ったか、彼の家が派手にライトアップされてる間、何時間「部屋をのぞいてみて」いたかもわからなかった。

翌朝、会社からデイジーに電話して、お茶に来ないかと誘ってみた。

「トムを連れて来ないで」と忠告しておいた。

「なんで？」

「トムは連れて来ないでってさ」

「トムってだあれ？」

無邪気を装って聞いてきた。

約束の日はひどい雨が降っていた。十一時になると、レインコートを着た男が芝刈り機を引きずってきて玄関を叩き、ギャツビー氏が草刈りに来させたと告げた。その時、朝仕事を終えたフィンランド人の家政婦に、後で戻ってくるよう頼むのを忘れてたのを思い出したんで、車でウェストエッグ村に行って、雨に濡れた白い漆喰の家が立ち並ぶ中から家政婦を探し出して、ティーカップとレモンと花を買った。

花はいらなかった。二時になると、ギャッツビーの温室がそのまま届いたかと思うほどの大量の花とそれを入れるためのたくさんの容器が届いたから。一時間後、玄関のドアがおずおずと開き、銀色のシャツ、金色のネクタイ、白いフランネルのスーツに身を包んだギャッツビーが急いで入ってきた。彼は顔色が悪く、目の下には眠れなかったと見えてクマができていた。

「何か問題でもありますか？」と彼はすぐに尋ねた。

「芝生は大丈夫そうだよ。それを気にしてるんなら」

「どこの芝生？」と彼はぼんやりと尋ねた。

「ああ、お宅の庭のですね」

彼は窓の外を見たが、その表情からして何も見てないようだった。

「いいですね」とぼんやりと言った。

「新聞によると雨は四時頃には止むそうです。『ジャーナル紙』だったと思います。お茶に必要なものは・・・そろっていますか？」

彼を台所に連れて行くと、そこにいた家政婦を少し不機嫌そうに見やった。お惣菜屋さんで買ってきた十二個のレモンケーキの味見をしてみた。

「これで満足できそう？」と聞くと

「もちろん、もちろん！」と言って、力なく「・・・君」と付け加えた。三時半頃には、雨足が弱くなって霧雨となり、時々細かい雨粒が落ちてきた。ギャッツビーはうつろな目でクレイの「経済学」の本をぼんやりと眺めながら、台所の床を揺らす家政婦の足音にギクリとし、見えない心配事が外で起こっているかのように、時折曇った窓をのぞき込んだ。ついには立ち上がって、不安な声で家に帰ると言い出した。

「どうして？」

「誰もお茶に来ませんし、もう遅いですから！」

時計を見ながら、他の場所に行くのに急いででもいるようだった。

「一日中待ってはられない」

「冗談じゃないよ、あと二分で四時だし」

無理じいされたみたいに力なく椅子に腰かけた時、車が車道に乗り入れる音がして、オレたち二人は飛び上がった。胸をドキドキさせながら庭に出てみた。

雨滴が滴り落ちる花のないライラックの木の下をくぐって、大きなオープンカーが車道を上ってくるところだった。そして停まった。三角のラベンダー色の帽子を斜めにかぶったデイジーの顔が、明るく輝いていて、うれしくてたまらないという笑みを浮かべてオレを見ていた。

「ここがほんとにあなたの家なの？」

彼女の澄んだ声の広がり、雨の中にも元気づけてくれる。オレの耳は、最初その音色の高低だけを追って、後で意味を理解した。青い絵具でさっと書いたように、濡った髪の毛がほおに張り付き、車から出る彼女の手を取ると、キラキラとした雫で濡れていた。

「わたしに恋してるの？」

オレの耳元で低くささやいた。

「どうして一人で来なきゃいけないのかな？」

「ラックレント城の秘密さ。運転手にどっか遠くに行って一時間つぶせて言ってくれよ」

「一時間後に戻ってきてね、ファーディ」

真顔で付け足した。

「彼の名前はファーディっていうの」

「ガソリンで鼻がおかしくなるってヤツ？」

「まさか」と彼女は無邪気に答えた。

「なんでなの？」

中に入ると、驚いたことにリビングの人影は消えていた。

「どうしたんだろ！」オレが叫んだ。

「何が変なの？」

彼女が振り返った時、玄関のドアを小さいけどはっきりとノックする音がした。オレは部屋を出てドアを開けてみた。そこには、死人のように青ざめたギャツビーがコートのポケットに重りのように手を突っ込んでだま、水たまりの中に立って、悲壮な目でオレを見つめていた。

両手をコートのポケットに入れたまま、オレの脇を通過して玄関に入り、バネ人形のように直角に曲がって、リビングルームに姿を消した。それでも芝居がかったようには見えなかった。自分の心臓の鼓動が大きくなっていることに気づきながら、雨が強くなってきたので玄関のドアをきつく閉めた。

三十秒間は何も聞こえなかった。リビングから、窒息しかかったような声と笑い声のようなものが聞こえて、デイジーの澄んだよそ行きの声ははっきりと続いた。

「またお会いできて本当に嬉しいわ」

そして耐えがたい沈黙。玄関にいてもすることがなかったんで、リビングに入った。

ポケットに手を突っ込んだままのギャツビーは、ムリして落ち着いてるように、あるいは退屈そうに見せながら、マントルピースに寄りかかっていた。マントルピースにある止まったままの時計に当たるほど頭を反らせ、傍目からも分かる落ち着きの無い目で、堅い椅子の隅っこでおずおずしながらもしとやかに座っているデイジーをじっと見下ろしていた。

「僕たちは前に会ったことがあるんです」とギャツビーはつぶやいた。彼の目は一瞬オレを捉え、笑おうと口を開いて見せたもののダメだったらしい。運がいいことに、頭に当たっていた時計が落ちそうなほど傾いたので、慌てて後ろを向いて震える指で正しい位置に戻した。そして緊張でガチガチになりながら肘掛け椅子に腰を下ろし、ひじをアームに預けて、片手でアゴを支えた。

「時計、すみませんでした」

オレまで真っ赤になってしまった。気の利いたセリフなんて何千もあるだろうに、一つだって思い浮かばない。アホウのように「古い時計だから」と言えただけだった。時計が床の上で粉々になると二人だって信じたかも。

「長い間、お会いしてませんでしたね」

デイジーの物言いは正確な事実だけを伝えていた。

「この十一月で五年になります」

ギャッツビーの機械的な答えがさらに水をさした。なんとか場を取り持とうと、台所でお茶を用意するのを手伝ってくれと二人に立つように促したのに、気の利かない家政婦がお盆に茶道具を乗せて持ってきた。お茶やケーキでなんとか場をほぐそうとしてるうちに、よそめにはなんとか格好がついてきた。ギャッツビーは陰に引っ込み、オレとデイジーが話すのを、緊張した悲しげな顔でじっと見守っている。でも、静かにしていることが目的じゃないんで、オレはなんとか頃合いを見計らって言い訳を作り、立ち上がった。

「どこに行くんですか？」

すぐにギャッツビーが慌てて反応した。

「すぐ戻るから」

「君が立つ前に、ちょっと話がある」

オレの後について急いで台所に入りドアを閉めると「ああ、どうすればいいんだ」と惨めな様子で低くうめいた。

「どうしたんだい」

「これは大失敗だ」と首を振った。

「大きな大きな失敗だ」

「照れてるだけだよ」

そしてラッキーなことにこう付け加えた。

「デイジーだって照れてるさ」

「彼女が照れてるって？」信じられないように聞いてきた。

「君が照れてるのと同じくらいにね」

「そんな大声で言わないでくれ」

「君は子供のように振る舞ってる」我慢できなくて言ってやった。

「それだけじゃなくて失礼じゃないか。デイジーを一人きりにして」

彼はもういいというように手を挙げてオレを黙らせ、印象深いがめるような目でオレを見てから、慎重に戸を開けると次の部屋に入っていった。

オレは裏口から外に出た。緊張に耐えられず、三十分ほど前に家を出て、家の周囲を一周していたギャッツビーのように。豊かな葉っぱが雨避けになってくれる黒い節のある木まで走ってみた。雨が激しくなり、ギャッツビーの庭師に刈ってもらったデコボコの芝生には、小さな水たまりや歴史のありそうな湿地がたくさんあった。木の下からはギャッツビーの超豪華な邸宅以外に見るべきものは何も無かった。だから、カントが教会の尖塔を見つめたように、ギャッツビーの邸宅を三十分ほど眺めていたんだ。

十年前の「時代物」ブームの初期にビール醸造家が建てた家で、近所の人たちに彼らの屋根を藁葺きにすれば、家にかかる税金を五年分払ってやると約束したという話がある。でもご近所さんに拒絶され、「家名を上げる」という野望をくじかれたんだろう。彼はすぐに落ちぶれた。子供たちは、ドアにまだ喪章をつけたままで、その家を売り払ったという。アメリカ人は、時には農奴にだってなりたがるくせに、小作人になるのはイ

ヤなのだ。

三十分後には太陽がまた顔を出し、八百屋の車が召使いの夕食材料を積んでギャツビーの車道を回りだした。主人はスプーン一杯分も食べられないだろう。メイドが彼の家の窓を開け始め、それぞれの窓からチラッと見えたかと思うと、中央の大きな出窓にもたれかかって、庭に向かって静かに唾を吐いた。戻る時間になったようだ。雨はまだ降っていた。二人のささやき声のように、感情をはらんで、時々上ずったり、激しくなったりしていた。でも、やがて静かになり、家の中にも静けさが戻ってるような気がした。

オレは中に入った。入る前に、コンロをひっくり返さないように、台所で可能な限りの音を立ててみた。でも、二人には聞こえなかったんだろう。ソファの両端に座って、質問しているのか考え中なのか、お互いを見つめ合っていた。照れはすっかり消えていた。デイジーの顔は涙にまみれていて、オレが入っていくと飛び上がって、鏡の前に立ってハンカチで拭き始めた。でも、ギャツビーにはただただ驚くような変化が見られたんだ。言葉にも身ぶりにも出さなかったけど、文字通り光り輝いていて、今までなかった幸福感が小さなりビングを満たしていた。

「ああ、こんにちは、君」と何年もオレを見てなかったように言った。一瞬、握手しようとしてるのかとさえ思った。

「雨がやんだんだよ」

「そうですか？」

オレが言った意味に気づいて、部屋に陽の光が踊っているのを見ると、お天気レポーターか太陽の強力な支持者にでもなったかのようにニッコリと微笑んだ。そしてデイジーに繰り返した。

「どう？ 雨がやんだって」

「よかったわ、ジェイ」

彼女の声は痛みと甘美な悲しみにあふれてたけど、思いがけない喜びだけが伝わってきた。

「デイジーと一緒に家に来てほしいんです」と彼は言った。

「彼女を案内したいから」

「本当にオレも行っているの？」

「もちろんだよ、君」

デイジーは顔を洗うために二階に上がった。あ、タオルがマズイ！ と恥ずかしくなったけど手遅れ・・・

その間、ギャツビーとオレは芝生の上で待っていた。

「僕の家はきれいに見えるでしょう？」と彼は同意を促した。

「日光を真正面から受けていると」

オレはそれに同意した。壮観な眺めだった。

「そうですねえ」

そう言いながら、彼の目はアーチ型のドアや四角い塔の隅々まで見渡していた。

「買う資金を作るのに三年かかったんです」

「資金は相続したんだと思ってた」

「相続はしましたよ、君」と彼は言った。

「でも、ゴタゴタでほとんどなくなってしまったんです。戦争の混乱で」

彼は自分が何を言っているのかほとんどわかってなかったと思う。何の仕事をしているのか尋ねると「それは僕の問題なんで」と答えたんだから。

「ああ、いろんな仕事をしてきましたよ」と言い直した。

「薬の仕事もしたし、石油の仕事もしたし。でも今はどっちもやってないんです」

まじまじとオレを見た。

「先日の夜に提案したことを考えてもらえたんですか？」

オレが答える前にデイジーが家から出てきて、真鍮のボタンの二列に並んだドレスが太陽の光を浴びて輝いていた。

「そこにある大きな家なの？」と彼女は指差しながら叫んだ。

「気に入ってくれた？」

「ええ、とっても。でもよく一人で住んでいられるのね」

「昼も夜も面白い人で、いっぱいになるようにしているんです。面白いことをする人たち。有名人とか」

海峡に沿って近道をする代わりに、いったん道路まで出て大きな裏門から入った。デイジーはだれもが虜になるような声でつぶやきながら、空を背景にしてあちらこちらに浮かぶ中世風の建物のシルエットをうっとり眺め、黄水仙のキラキラした香りや、サンザシや梅の花の泡立つ香りや、キス・ミー・アット・ザ・ゲート(オオベニタデ)の淡い金色の香りがただよふ庭園に感激していた。大理石の階段まで行っても、玄関の内にも外にも、鮮やかなドレスを着た連中と出くわすことがなく、木々の中では鳥の声以外に音がしないのは不思議な感覚だった。

マリー・アントワネットがいそうなサロンや王政復古調の大広間を散策していると、ソファやテーブルの後ろに、実は客が隠れてて、オレたちが通り過ぎるまで息を殺しているように命じられてるんじゃないかって気がした。ギャッツビーが(オックスフォード大学の)「マートン学寮図書館」にあるような立派な扉を閉めたとき、フクロウ眼鏡の男が幽霊のような笑い声をたてるのを聞いた気がした。

二階に上がると、バラ色やラベンダー色のシルクに包まれ、新鮮な花々が彩りを添えるアンティーク調のベッドルームの数々を通り抜け、いくつものドレッシングルームやビリヤード場、床に埋め込まれたバスタブのあるバスルームなどを見て回った。そうこうしてるうちに、パジャマを着たままだらしく床に寝そべて肝臓を休ませている男の部屋に踏み込んでしまった。それは「下宿人」クリプスプリンガー氏だった。その日の朝、お腹を空かせた様子で浜辺をうろついているのを見たんだ。

最後に、ギャッツビー自身の部屋にたどり着いた。ベッドルームと、バスルームと、十八世紀スコットランド調の書斎があり、そこに座って、彼が壁の戸棚から出してきたシャルトリューズを飲んだ。

彼は一時もデイジーから目を離さなかったし、家の中のすべてのものを、彼女の愛ら

しい目が示す反応具合で再評価していたと思う。時々、彼女がそばにいる現実を前に、他は何も現実ではないかのようにぼんやりと自分の持ち物を眺めていた。一度は階段からも落ちそうになった。

彼の寝室は、家中で一番シンプルな部屋だった。鈍く光る純金の化粧道具でドレッサーが飾られていたことを除いては。デイジーは喜んでブラシを手に取り、自分の髪をとくと、ギャッツビーは座って、目の上に手をかざして笑いだした。

「最高にうれしい気分だ、君」

彼は陽気に言った。

「やろうとしても・・・僕には・・・」

明らかに第二段階を突破して、今は第三段階に入ろうとしていた。照れを乗り越えて喜びがはじけた後、今は彼女がそばにいることに驚きでいっぱいになってたんだろう。長い間思いを抱き、ハッピーエンドを夢見て、歯を食いしばり、想像を絶するほどの激しきで耐え抜いてきたんだから。そして今、その反動が出ていた。ネジを巻きすぎた時計が緩むしかないように。

すぐに我に返ると、オレたちのために二つの巨大なキャビネットを開けてくれた。そこには、大量のスーツや、ドレッシングガウン、ネクタイで一杯で、畳んだシャツがレンガのようにいくつかの山に積み上げられていた。

「イギリスに僕のために服を買ってくれる人がいるんです。春と秋の季節ごとに、選りすぐりのものを送ってくれる」

彼はシャツの山を取り出すと、オレたちの前に一枚ずつ投げ始めた。薄手のリネンや厚手のシルク、上質のフランネルなどのシャツが、投げられると広がって、テーブルの上を様々な色が入り乱れて重なり合っていた。オレたちが感心している間に、さらに多くのシャツを持ってきて、柔らかくて豊かな山はますます高くなっていった。サンゴやアップルグリーン、ラベンダーや淡いオレンジのストライプやペイズリーや格子縞、そしてインディアンブルーのイニシャルが入ったシャツの数々。突然、苦しそうな声を立てて、デイジーはシャツの中に頭をうずめて、嵐のように泣きだした。

「こんなきれいなシャツなんて」とすすり泣き、彼女の声はシャツの山の中でくぐもっていた。

「こんなに、こんなにきれいなシャツなんて見たことがなくて、悲しくなるの」

家を見た後は、運動場、プール、高速ボートや真夏の花々を見ることになってたのに、窓の外ではまた雨が降り出したので、みんなで窓際に立って湾に波立つ水面を見ていた。

「霧がなければ、湾の向こうに君の家が見えたのに」とギャッツビーが言った。

「ドックの向こう側にはいつも緑色のライトがあって一晩中点いてるんです」

デイジーがさりげなく腕をからませてきたのに、彼は自分が言った言葉に気を取られすぎて上の空のように見えた。おそらく、その光が持っていた深い意味は、今や永久に失われてしまったんだろう。デイジーとの間にあった大きな距離に比べれば、ライトと彼女の距離はとても近くて、ほとんど触れそうなくらいだった。月が星とが近いように。今は、ドックの上に光っている緑の光に過ぎなかった。彼が心の拠り所にしてきたもの

が一つ消えたんだ。

薄暗闇の中、色々な物をじっくり見ようと部屋の中を歩いてみた。机の上の壁に掛けられた、ヨットの船員服に身を包んだ老人の大きな写真に目を奪われる。

「これは誰？」

「それですか？ ダン・コーディさんですよ」

名前はかすかに聞き覚えがあった

「もう亡くなったんです。昔、親友でした」

化粧筆筒の上には、ギャッツビーの小さな写真もあった。同じくヨットに乗って船員服を着たギャッツビーが反抗的に頭を後ろに反らせていた。十八歳くらいの時のものだろう。

「いいじゃない！」とデイジーが叫んだ。

「オールバック！ あなたがオールバックにするなんて言わなかったでしょ。ヨットのことも」

「これを見て」

ギャッツビーはすぐに言った。

「ここに記事の切り抜きが、君の記事がたくさんあるんです」

二人は横に並んでそれに見入っていた。

オレがルビーが見たいと言いかけた時、電話が鳴って、ギャッツビーが受話器を取った。

「ああ・・・今は話せない・・・今は話せないんだ、君・・・小さな町と言ったはずだろう・・・あいつは小さな町が何か知っているはずだ・・・まあ、デトロイトがあいつの考える小さな町なら、あいつは役に立たないね・・・」

彼は電話を切った。

「早く来て！」と窓辺でデイジーが叫んでいた。

雨はまだ降っていたけど、暗闇が西に広がり、海の上にはピンクと金色の泡のような雲が広がっていた。

「あれを見て」と彼女はささやき、しばらくしてから「ピンクの雲に乗って、あなたをその中に入れて連れ回してあげたい」とつぶやいた。

オレは帰ろうとしたけど、二人は聞かなかった。オレがいた方が安心できて、より親密になれるんだろう。

「そうだ、こうしよう！ クリプスプリンガーにピアノを弾いてもらおう」と言いながらギャッツビーは部屋を出て行った。

彼は部屋を出て「ユーイング！」と叫び、数分後に、ベッ甲眼鏡をかけた金髪の薄い、恥ずかしがりやで少しくたびれた青年を連れて戻ってきた。彼は、今度は身なりを整えており、首元の開いた「スポーツシャツ」にスニーカー、そしてぼんやりした色の厚手の綿ズボンを履いていた。

「お休みのところお邪魔でした？」とデイジーが丁寧に尋ねた。

「寝てたんです」と、クリプスプリンガー氏は恥ずかしげに身をよじらせて答えた。

「寝てたんで。それから起きたんです・・・」

「クリスプリンガーはピアノを弾く」とギャッツビーが言った。

「ユーイング、どうだい？」

「うまく弾けないんです。ほとんどダメで。練習不足なもので・・・」

「下に行こう」

ギャッツビーが口を挟んだ。彼は電気のスイッチを入れた。灰色の窓が消え、家が光に包まれた。

サロンでギャッツビーはピアノの横にある小さなランプをつけた。震えるマッチでデイジーのタバコに火をつけ、部屋の反対側にある長椅子にデイジーと一緒に腰かけた。きらめく床に反射する光を除けば、なんの光も届かなかった。

クリスプリンガーは「ラブネスト」を演奏すると、ベンチの上から振り返り、暗闇の中でギャッツビーの姿を不安そうに探した。

「練習不足なんです。うまく弾けないって言ったでしょ。練習不足・・・」

「言い訳はいいよ、君」

ギャッツビーはピシャリと言った。

「弾いていればいい！」

朝になっても

夜になっても

楽しいよね？・・・

外は風が強く、海峡に沿ってかすかな雷の気配があった。ウエストエッグー帯に照明が点いた。ニューヨークから帰宅の客を乗せた電車が雨の中を進んでくる。人生に大きな変化が起こる時間であり、あたりには興奮がはじけていた。

確かなのはこれだけで、これ以外にはないのさ

金持ちはもっと金持ちに、貧乏人は・・・子だくさんに

その間に・・・時の合間に・・・

別れを告げに行ったとき、ギャッツビーはまた、困った顔をしていた。今の幸せが信じられないのだろうか。

ほぼ五年の歳月を費やしたのだ！ その日の午後だって、デイジーにがっかりした瞬間はあったに違いない。でもデイジーのせいじゃないんだ。ギャッツビーの幻想が持つ強烈なエネルギーのせいなんだ。それは彼女を飛び越えて、全てを超越していった。彼はその幻想に情熱のすべてを注ぎ込み、行く手に漂う美しい羽の数々で飾り立ててきた。燃えたぎる情熱も純情な可憐さも、悩める男が靈魂に秘めてきたものには勝てそうもなかった。

彼を見ると、少し立ち直ったようだった。彼女の手を握り、彼女が耳元でささやくと、感情をこめた目で見つめていた。小刻みに揺らめく温かい声が、彼を惹きつけたんだと思う。あれに勝る声を夢見ることはできない。決して消えることのない歌だった。

二人はもうオレの存在を忘れていたみたいだったけど、デイジーはチラッと見て手を

差し出してくれた。ギャツビーはといえば心ここにあらず。

もう一度二人を振り返ると、二人もオレを見たが、猛り狂う生命の力に心奪われてぼんやりしていた。オレは部屋を出て、雨の中、大理石の階段を降りていった。二人をそこに残したままで。

第六章

この頃、ある朝ニューヨークから野心家の若い記者がギャッツビーの家にやってきて、何かコメントはないかと尋ねてきた。

「何についてですか？」ギャッツビーは丁寧に聞き返した。

「ですから何かおっしゃりたいことはありませんかと伺っているんです」

五分ほどの混乱のうち、男はオフィス周辺でギャッツビーの名前を聞いたことが判明したが、それが何なのか秘密にしておきたかったのか、あるいは完全にはわかっていなかったのかもしれない。

とにかく、この日は彼の休日で、見事なまでの仕事熱心さで「会ってみよう」とばかりに急いでやってきたのだった。

行き当たりばったりのインタビューだったけど、記者の直感は正しかった。夏の間、ギャッツビーの知名度は、彼のもてなしを受けた何百人もの人々によって広まり、彼の過去について皆が物知り顔になって、ニュース記事になる一歩手前のところまで来ていたんだ。カナダに通じる地下ルートというような現代の都市伝説に結びつけられて、彼は家に住んでいるのではなく、家のように見える船に住んでおり、密かにロングアイランドを行き来しているといううわさがまことしやかに語られた。ノースダコタ州出身のジェームズ・ギャッツが、なぜこれらのデマを喜んでいたのであるかの説明はそう簡単にはいかない。

ジェームズ・ギャッツが彼の本名、少なくとも法的には彼の名前だった。十七歳の時に改名したのが、輝かしいキャリアに踏み出した時点で、ダン・コーディが悪名高いスペリオール湖の浅瀬にいかりを下ろしたのを見た瞬間だった。

その日の午後、破れた緑のジャージとキャンパス生地のパンツを履いてビーチでのんびりしていたジェームズ・ギャッツだったが、手漕ぎボートを借りてトゥオロミー号に近づき、コーディに、風で船が動いて三十分の内に難破する危険があると知らせた時には、すでにジェイ・ギャッツビーになっていた。

その時点までに、改名する事をじっくり考えていたんだろう。彼の両親は、仕事にあぶれた貧しい農民だった・・・彼の想像力は、自分の両親とは全く認めてなかったけど。ロングアイランド州ウエストエッグのジェイ・ギャッツビーの正体は自身の空想の産物だった。彼は「神の子」であり、その言葉が何かを意味するのであれば文字通りに、父である神の事業、つまり娑婆世界の絢爛豪華な美に尽くすべきだった。そこで彼は十七

歳の少年が思い描くようなジェイ・ギャッツビーを創り出したのだった。こうしてみれば、彼は最期まで自分の信念に忠実だったと言える。

一年以上もの間、彼はスペリオル湖の南岸でアサリ掘りやサケ漁など、食べ物と寝床を得るためにありとあらゆる仕事をこなしていた。日に焼けて鍛えられた体は、時に激しく、時にのんびりした試練の日々を自然にこなしていった。早くから女を知っていたが、女に甘やかされてきたせいで、彼らを軽蔑するようになっていた。というのも、若い処女は無知だったし、他の女は、圧倒的な自己陶酔にひたっている彼が当然と思うことにもヒステリックになったから。

でも、彼の心はいつも揺れていた。最もグロテスクで幻想的な陶酔が、夜のベッドで彼を悩ませた。洗面台の上で時計が時を刻み、床の上に脱ぎ散らかした服を、月がしっとりした光で湿らせている間、彼の頭の中には、例えようもないきらびやかな宇宙が渦巻いていた。毎晩、鮮やかな光景を眠りが柔らかく包みこむまで、空想の羽を限りなく広げていった。しばらくの間、こうした幻想が彼の空想のはけ口をなしていたんだ。それは現実の中に非現実が存在する十分な証であり、重い現実世界が実は妖精の羽の上をしっかり腰を据えているという印だった。

その数カ月前に、将来の栄光へと誘う本能に導かれて、ミネソタ州南部にあるルーテル派の小さなセント・オラフ大学に入学した。彼はそこに二週間しかいなかった。運命の太鼓の音にも、運命そのものにも、許しがたい程無関心な大学に落胆したし、学費免除の代わりに就いた用務員の仕事も軽蔑していた。その後、彼はスペリオル湖に戻り、ダン・コーディのヨットが岸の浅瀬に停泊するその時まで、やれる仕事を探していたのだった。

コーディは当時五十歳で、ネバダの銀山やユーコン川の金脈を始め、一八七五年よりあらゆる金属を掘り当てて財を築いた人物だった。モンタナの銅の取引で何度も巨万の富を築いた彼は、肉体的にはたくましかったものの、心は軟弱になりかけていた。それを嗅ぎつけて何人もの女が、彼から金を搾り取ろうとした。新聞記者のエラ・ケイが、マントノン夫人(レイ十四世の二番目の妻)の役割を演じて彼の弱みに巧みにつけ込み、彼をヨットで海に送り出したという芳しくない顛末(てんまつ)は、一九〇二年当時の新聞で報道されて、周知の事実であった。そして、リトル・ガール岸でジェームズ・ギャッツの運命の人になるまでの五年間、人で賑わう海岸沿いに航海を続けていたのだった。

オールを漕ぐ手を休め、レールで囲まれたデッキを見上げると、若きギャッツにとって、ヨットでの生活は世界中の美と華やかさを象徴したものだった。彼はコーディに微笑んだんだろう・・・おそらく自分が微笑むと人に好かれることに気づいていたに違いない。とにかくコーディが彼にいくつか質問をしてみると(そのうちの一つが新しい名前のお披露目となった)、彼は機転が早く野心家であることがわかった。数日後、コーディは彼をダルスに連れて行き、青い上着、白い綿ズボン六本とヨット帽を買ってやった。トゥオロミー号が西インド諸島とバーバリー海岸に向けて出発すると、ギャッツビーも

一緒に出発したんだ。

彼の仕事ははっきりと決まっていたわけではなかった。コーディと一緒にいる間、給仕、航海士、船長、秘書、さらには看守まで務めた。素面(しらふ)のダン・コーディは酔うと自分がとんでもないことをするのがわかっていたので、ますますギャッツビーを頼りにするようになった。その状態は、ボートが世界を三周するまでの五年間続いた。ボストンでエラ・ケイがボートに泊り、一週間後にダン・コーディが残念にも亡くなるのが無ければ、永遠に続いてたかもしれない。

ギャッツビーの寝室に飾られていた彼の写真を覚えている。白髪まじりの赤ら顔の男で、表情の無い空虚な顔をしていた。開拓時代の放蕩者で、アメリカ史上のある時期に、辺境の売春宿や酒場の野蛮な暴力を東海岸に持ち帰った。ギャッツビーがこれほどまでに酒を飲まなかったのは、間接的にはコーディのおかげだった。パーティが盛り上がり、女たちがシャンパンを彼の髪にこすりつけることもあったのに、酒は少ししか飲まない習慣を身につけていた。

ギャッツビーは二万五千ドルの遺産をコーディから相続していた。でも実際はもらえなかったんだ。法的にどんな手が使われたのかは知らないが、巨万の富の残額は、そっくりエラ・ケイに渡ってしまった。でも彼にはしっかり学んだことがあった。漠然としていたジェイ・ギャッツビーの輪郭がはっきりして、一人前の男になっていたんだ。

彼がこのことを話してくれたのは、ずっと後になってからだ。彼の先祖についての最初の野暮な噂を打ち破るためにここに書いてみた。噂は真実とは程遠かったんでね。しかも、オレが混乱していた時に話してくれたんだ。彼の話をして信じたかと思うと、何も信じられないような状態になっていた時。だからオレはこの短い時間を利用して、ギャッツビーが一息いれてる間に、一連の誤解を解き明かしてみた。

それは、彼の問題に関わることを止めていた時期でもあった。数週間、彼に会うことも、電話で彼の声を聞くこともなかった。オレはほとんどニューヨークにいたんだ。ジョーダンと一緒に歩き回り、彼女の年老いた叔母さんのご機嫌をとろうとしていた。

でもある日曜日の午後、彼の家に行ってみた。二分もしないうちに、誰かがトム・ブキャナンを連れて飲みに来た。オレは当然驚いたが、本当に驚いたことは、それが今まで起こらなかったという事実かもしれない。

彼らは馬に乗った三人組で、トムとスローンという男と、以前にも来ていた茶色い乗馬服を着た美人だった。

「君たちに会えて嬉しい」と、ギャッツビーは玄関先に立って言った。

「立ち寄ってくれて嬉しい」

まるで彼らが自分を気にかけてくれたかのように！

「どうぞおかけになって。タバコか葉巻をどうぞ」

彼は鐘を鳴らしながら素早く部屋の周りを歩き回った。

「すぐに飲み物を用意しますから」

彼はトムが来たことによりかなり動揺していた。でも、訪問客に何かを出すまでは、いずれにしても落ち着かなかったろう。彼らが来たのは飲むためだけと漠然と気づいてはいた。スローンは何も欲しがってなかった。

レモネードはいかがでしょう？ いや、結構。シャンパンを少しだけでも？ いえ、たくさんです。残念ながら・・・

「乗馬は楽しめましたか？」

「この辺りはとても良い道だね」

「自動車なら・・・」

「そうですね」

抑えきれない衝動に駆られたギャッツビーは、初対面として紹介を受けたトムに目を向けた。

「以前どこかでお会いしたことがあると思いますが、ブキャナンさん」

「ああ、そうですね。よく覚えていますよ」

トムは無愛想に答えたものの、明らかに覚えていないようだった。

「二週間ほど前でした」

「その通りだ。このニックと一緒に来てましたね」

「僕はあなたの奥さんを知っているんです」

ギャッツビーはほとんど強引に続けた。

「そうですか？」

トムはオレの方を向いた。

「この近くに住んでるのか、ニック？」

「隣に住んでる」

「そうか？」

スローン氏は会話には入らず、椅子にどっかりと腰を下ろしていた。女性も何も言わなかったが、思いがけずハイボールを二杯飲んだ後、うちとけてきた。

「次のパーティーにはみんなで来るわね、ギャッツビーさん」と彼女は提案した。

「よくって？」

「もちろん。喜んでお招きしますよ」

「ご親切に」とスローン氏は大して感謝もせずに行った。

「そろそろ家に帰らないと」

「そんなに急がないでください」

ギャッツビーは二人を促した。自分を抑えられるようになっていて、トムとも、もっと話したかった。

「夕食まで残ってはいいただけませんか？ ニューヨークから誰か来るかもしれませんし」

「わたしの所に夕食を食べにいらして」とその女性は熱心に言った。

「二人とも」

これにはオレも含まれていた。スローン氏は立ち上がった。

「もう行こう」と言ったが、言った相手は彼女だけだった。

「本気なのよ」彼女は言い張った。

「あなたがたも一緒に来てくれたらうれしいわ。余裕はたくさんあるもの」

ギャッツビーはどうすると言うようにオレを見ていた。彼は行きたがっていたけど、スローン氏が来てほしくないと思ってることには気づいてなかった。

「残念ながら行けません」とオレは言った。

「じゃあ、あなたが来て」彼女はギャッツビー一人を促しにかかった。

スローン氏は彼女の耳元で何かをささやいた。

「今出れば遅れることはないでしょ」と彼女は声に出して主張した。

「僕は馬を持っていないんです」とギャッツビーが言った。

「軍隊では乗っていましたが、馬を買ったことがないんです。車でみなさんの後をついていきますね。ちょっと失礼します」

残りのオレたちは玄関に出て、スローン氏とその女性は脇で口論を始めた。

「なんてことだ、あの男が来るんだって」とトムが言った。

「社交辞令ってことがわからんかな？」

「彼女が来て欲しいと言ったんだよ」

「盛大な晩餐会があるが、あいつは誰も知らんだろう」

彼は顔をしかめた。

「デイジーとどこで会ったんだろうか。オレの考えは古いかもしれんが最近の出歩き回る女性は性に合わないな。おかしい馬の骨と出会うもんだ」

不意にスローン氏とご婦人が階段を下りて行って馬に乗った。スローン氏はトムに言った。

「遅れるぞ。もう行かないと」

そしてオレに言った。

「待てなかったと伝えてくれませんか」

トムとオレは握手を交わし、残りとは冷ややかな会釈を交わすと、三人はすぐに車道を駆け下り、帽子と薄手のオーバーコートを手にしたギャッツビーが玄関から出てきたときには、八月の葉蔭の後ろに消えていた。

トムは明らかにデイジーが一人で動き回ることに動揺したようで、次の土曜日の夜にデイジーと一緒にギャッツビーのパーティーにやって来た。彼の存在がその夜に独特の圧迫感を与えたのだろうか。オレの記憶の中ではその夏のギャッツビーのパーティーの中でもひととき記憶に残るものとなった。同じ人たち、少なくとも同じ種類の人たちが、同じように大量のシャンパンを飲み、同じように色とりどりで、同じようなドンチャン騒ぎをやっていたのに。以前には感じなかった居心地の悪さや、底意地の悪さを空気の中に感じたんだ。ひょっとしたら、オレは単にそれに慣れてしまっただけなのかもしれない。ウェストエッグを一つの完結した世界として受け入れて、独自の基準を持ち、特別な有名人がいて、比類のない、どこかと張り合おうなんて気は全く持ち合わせていない場所として。今は改めてデイジーの目を通して見ていた。せっかく苦勞して慣れてきたものを、また新しい目で見ないといけない時はいつも切ない。

彼らは黄昏時に到着した。何百人ものきらびやかな人々の間を歩く間、デイジーは喉

の奥でささやくように言った。

「興奮しちゃう。ねえニック、今夜わたしにキスしたくなったら、いつでも知らせてね。喜んで応じるから。わたしの名前を言って。それか緑のカードを見せてね。そのためのカードを配ってるの・・・」

「周りを見て回りませんか」とギャッツビーが提案した。

「見て回ってるわ。素晴らしい・・・」

「名前をお聞きになったことのある人たちがたくさんいると思いますよ」

トムの傲慢な目は群衆を見渡していた。

「あまり出歩かないもんでね」と彼は言った。

「ここには知り合いがいないと思っていたんだ」

「あの女性を知っているかもしれませんよ」

ギャッツビーは白いプラムの木の下に悠然と座っている、豪華で人間離れした、まるで蘭の花のような女性を指し示した。トムとデイジーは、幽霊のように実体が無かった映画スターを目前にして、信じられない思いでじっと見つめていた。

「きれいねえ」とデイジーが言った。

「彼女の上にかがんでいる男が映画監督です」

グループからグループへと礼儀正しく紹介していった。

「ブキャナン夫人とブキャナン氏」そして一瞬のためらいの後「ポロの選手でしたか」と付け加えた

「そんなんじゃない」トムはすぐに反論した。

「オレは違う」

でも、その声音がギャッツビーを喜ばせたようで、トムはその夜はずっと「ポロの選手」のままだった。

「こんなにたくさんの有名人に会ったことがないわ！」デイジーは叫んだ。

「あの人が気に入ったわ。なんて名前の人だったけ？ ちょっととりすました (blue nose) 感じの」

ギャッツビーは彼に気づき、それほど有名じゃないプロデューサーと付け加えた。

「とにかく面白かったな」

「ポロの選手と呼ばれたくはないがね」とトムは楽しそうに言った。

「むしろこの有名人たちを眺めていたいね・・・人目につかない所からだな」

デイジーとギャッツビーは踊った。優雅で所作が板についている彼のフォックストロットに驚いたことを覚えている。彼が踊るのを見たことがなかったんだ。それから二人はオレの家に向かって歩いて、三十分ほど階段に座っていた。その間、彼女の頼みでオレは庭で見張っていた。

「火事や洪水があった時とか」と彼女は説明した。「神様の試練があった時とかのためにね」

夕食の席に座っていると、人目につかない所にいたトムが現れた。

「こっちの人たちと一緒に食べてもいいか？」と聞いてきた。

「ちょっと面白いことをしてる人がいて」

「どうぞ」と答えたデイジーはニッコリと付け加えた。

「住所を書きとめたければ、わたしの小さな金の鉛筆を持って行ってね・・・」

彼女はしばらくしてから辺りを見回して、その女の子が「上品じゃないけど可愛い」と言った。彼女がギャツビーと二人きりになれた三十分を除くと、楽しんでいないことが見て取れた。

オレたちは、ほろ酔い気分のヤツらだけを特に寄せ集めたようなテーブルにいた。オレがいけなかったんだ・・・ギャツビーは電話をかけに行ったり、ほんの二週間前までは一緒にいて楽しかった連中のはずだった。でも、楽しかったはずのものが、今ではよんどんだ空気が変わってしまっていた。

「ベイデカーさん、大丈夫ですか？」

その娘はオレの肩にもたれようとしたけどどうもいかない。オレの声に、座り直して目を見開いた。

「なあに？」

明日、クラブでゴルフをしましょうとしきりにデイジーを誘っていた大柄で陰気な女が、ベイデカー嬢をかばって話した。

「ああ、彼女はもう大丈夫ですよ。カクテルを五、六杯飲むといつもキャーキャー騒ぐんです。もうやめときなさいって決まって言うんですけどね」

「もうやめてるわ」と被告人は言いきった。

「あなたが騒いでいるのを聞いたんで、ここにいるシベット先生に言ったんですよ。『先生、助けが必要な人がいるんです』って」

「彼女はありがたく思ってますとも」と別の友人が大して感謝もしてない様子で言った。

「でもプールに頭を突っ込んだからドレスがびしょ濡れになったじゃありませんか」

「プールに頭を突っ込まれるなんて最低」ベイデカー嬢がつぶやいた。

「ニュージャージーでも誰かにやられて濡れそうになったことがあるんだもの」

「それなら飲むのをやめておくんですな」とシベット先生は反論した。

「あんたはどうなのよ！」とベイデカー嬢が激しく叫んだ。

「あんたの手、震えてるじゃない。そんな手で手術なんかして欲しくないわ！」

そんな感じだった。ほぼ最後に覚えているのは、デイジーと一緒に立って、監督とスター女優を眺めていたことだった。二人はまだ白いプラムの木の下で顔が触れそうなくらい近づけて、その隙間から月明かりの薄淡い光がさしていた。ここまで近づけるために、夜の間中、彼はかがめた腰を段々低くしていったんじゃないかと思った。オレが見守っている間に、最高に低くかがめて、ついに彼女の頬にキスするのが見えた。

「あの人が好きよ」とデイジーは言った。

「素敵だと思う」

でもそれ以外のことは、彼女は腹を立てていた。何かが悪かったわけではなく、とにかく雰囲気嫌いだったんで議論の余地はない。ブロードウェイがロングアイランドの漁村に生み出したこの前代未聞の「場所」であるウェストエッグにショックを受けたのだった。旧来の上品な言い回しに逆らう生々しい力に、無から無へと住人を最短距離

に沿って我先にと走らせる、あまりにも容赦ない運命に。自分が理解できなかった単純さの中に、何かおぞましいものを見たのだった。

彼らが車を待っている間、一緒に正面の階段に座っていた。玄関前は暗かった。明るいドアから十フィート四方の光が柔らかい黒い朝の中に漏れていた。時折、二階の化粧室のブラインドの上で人影が動き、別の影に入れ替わって次から次へと果てしなく、戸外からは見えない鏡に向かって口紅を塗ったり、パウダーをはたいたりしていた。

「ギャッツビーは何者なんだ？」とトムが突然尋ねてきた。

「酒の密売人の親玉か？」

「どこで聞いたんだい？」

「聞いてはないさ。聞いたのではなく想像だ。最近の成金は酒の密売人が多いんだ」

「ギャッツビーは違う」とオレは短く言った

彼はしばらく沈黙していた。車道の小石が彼の足元でガリリと音を立てていた。

「こんなパーティーアニマルを集めるのに苦労したろうな」

風がデイジーの毛皮の襟巻きをなでてフワフワの灰色が揺れた。

「少なくともわたしたちが知っている人たちよりも面白いわ」彼女が強がりを言った。

「お前がそれほど興味があったようには見えなかったが」

「あら、面白いと思ったわよ」

トムが笑ってオレの方を向いた。

「あの娘が冷たいシャワーを浴びさせてくれと言った時のデイジーの顔を見たか？」

デイジーが音楽に合わせてハスキーでリズムカルなささやき声で歌い始めた。言葉の一つひとつからそれまでに聞いたことがなく、先にも二度とないような意味を引き出していった。メロディーが上がると低い声にありがちなように声が可愛く震えて、音程が変わるたびに彼女が持つ温かい人間的な魅力を空気中に少しずつ放っていた。

その夜は遅くまでいた。ギャッツビーから手が空くまで待っていて欲しいと頼まれて、水を浴びないと気が済まない連中が、冷たい水につかって黒い浜辺からさっそうとあがってきて、頭上の客室の明かりが消えるまで庭にいた。

その後で、ギャッツビーがやっと階段を降りてきたけど、日焼けした顔は緊張して、疲れた目はガラガラしていた。

「彼女はパーティーが気に入らなかったんだ」と前置きなしに言った。

「そんなことないよ」

「嫌がってたに決まってる」彼は言い続けた。「ちっとも楽しめなかったんだ」

それっきり黙ってしまったので、言葉にならないほど落ち込んでいるのを感じた。

「彼女との距離が遠く感じる。わかってもらえそうにない」

「ダンスのこと？」

「ダンス？」彼は指を一回パチン鳴らすだけで踊ったことすべてを帳消しにしてしまった。「君、ダンスなんて問題外だよ」

要するに、デイジーがトムのところに行って「あなたを愛したことは一度もない」と

言ってくれることだけが、彼の最大の望みだったんだ。その言葉で三年分の年月を帳消しにしてくれたら、二人で具体的な解決策を練るつもりだった。そのうちの一つは、彼女が自由になった後、ルイビルの実家に連れ戻して結婚するというもの。まるで五年前に戻ったかのように。

「全然わかってくれないんだ」と彼は言った。

「前はわかってくれてたのに。僕たちは何時間も座っていられた・・・」

言葉が途切れて、果物の皮や捨てられた景品や踏み潰された花が散らかった道をウロウロし始めた。

「オレならあまり多くは求めないと思う」とあえて言ってみた。

「過去は繰り返せないんだよ」

「過去は繰り返せないだって？」彼は信じられないと言うように叫んだ。

「もちろん繰り返せるさ！」

そう言って乱暴に辺りを見渡した。自分の家の影に過去が隠れていて、すぐにでも手が届くというように。

「すべてを元に戻すつもりだ」と言って決意したようにうなずいた。

「彼女も今にわかってくれる」

彼は過去について色々と語りだした。何かを取り返したいと願ってた。自分に対する理解だったかもしれない。デイジーを愛することによって見失ってしまったらしい。それ以来、道を見失って、人生が大きく乱れたけど、もし出発点に戻ってゆっくり全体を見直せれば、それが何なのかを見つけられるらしい・・・

五年前のある秋の夜、二人は落ち葉の舞い散る道を歩いていて、やがて街路樹が途切れて、歩道が月明かりで白く光る所までやって来た。ここで立ち止まり、向かい合った。それは季節の変わり目にやってくる不思議な興奮をたたえた涼しい夜だった。家々の中の静かな灯りが暗闇に向かって何かをささやき、星も激しくまたたいていた。ギャッツビーは目の隅で、歩道のブロックが本当にはしごを形作って、並木の上の秘密の場所へと伸びているのをはっきりと見た。そこを一人で登っていけば、人生の糧をむさぼって、例えようもない魅惑的な乳を喉に流し込むことができるのだ。

デイジーの白い顔が自分の顔に近づいてくるにつれ、彼の心臓の鼓動はどんどん速くなっていった。この少女にキスしたら、そして、自分の表現不可能なほどの大きな幻想が、いつかは途絶えてしまう彼女の吐息に結びついてしまったら、自分の心は、もう神のように無邪気にはなれないことが分かっていた。だから、星の上で打たれた音叉の音をしばらく聞きながらためらっていた。そして彼女にキスをした。彼の唇が触れると彼女は花のように開花して、彼の夢想は目の前に人間の形を伴って現れた。

彼の話を聞いている間中、それがひどい感傷の中に落ち込んだ時でさえ、オレは何かを思い出そうとしていた・・・ずっと昔、どこかで聞いた、とらえどころのないリズム、失われた言葉のかけらを。今にも口の中で言葉が形作られようとして、口のきけない男のように唇が開いた。そこには、ただの空気の振動ではなく、激しいせめぎあいがあった。

でも、唇は音を立てることはなく、オレは思い出したことを永遠に口にはできなかった。

第七章

ギャッツビーへの好奇心が大きくふくらんでいた頃、土曜日の晩なのに、彼の家の明かりが灯らないのに気がついた。始まりがはっきりしないのと同じく、彼のトリマルキオ (ペテロニウスによって書かれたと言われる小説の登場人物で、派手好きの成金) としてのキャリアの終わりもはっきりしなかった。

彼の車道に期待して入ってきた車が、ほんの少しの間停車して、不機嫌そうに走り去っていくのをチラチラ見かけるようになった。ギャッツビーが病気なのかと思って調べに行ってみると、見慣れない悪党顔をした執事がドアの外から不審そうに目を細めた。

「ギャッツビーさんをご病気ですか？」

「いえ」一瞬の間を置いた後、ぶしつけな言い方で「あなた様」と付け加えた。

「見かけなかったので心配していたんです。キャラウェイが来たと伝えてくれませんか」

「どなた？」無礼に聞き返してきた。

「キャラウェイです」

「キャラウェイさん。わかりました。伝えます」不意に彼がドアを閉めた。

家政婦から聞いた話では、ギャッツビーは、一週間前に使用人を全員解雇して六人ばかりを雇い、彼らが業者に賄賂をもらって巻き込まれてはまずいとウエストエッグ村まで出かけさせたことはなく、いつも電話で少量を注文するそうだ。八百屋の少年は台所が豚小屋のように散らかっていたと報告し、村でのまとまった意見では、新しい使用人は全くプロではないということだった。

次の日、ギャッツビーから電話があった。

「どこかに引っ越すのか？」オレは尋ねた。

「いえ、君、どこにも」

「使用人を全員クビにしたそうだな」

「噂話をしない人が欲しかったんです。デイジーが午後によく来るんで」

道理でデイジーの反対にあって、砂漠の行商人宿はカードタワーのように崩れたんだ。

「ウルフシェイムから、彼らをどうかしてほしいと頼まれたんです。みんな兄弟姉妹です。前は小さなホテルを経営していたんです」

「なるほど」

デイジーに頼まれて電話したそうだ。明日、彼女の家に昼食を食べに来ないかと言う。

ベイカー嬢も来るからと。三十分後にデイジーからも電話があり、オレが来ることを知って安心したようだった。何かあったんだな。でも、お披露目にこの日を選ぶなんて信じられなかった。特にギャッツビーが庭で語った悲惨なシーンのために。

次の日は、その夏最後の一番暑い日だった。列車がトンネルを抜けて陽光の中に出てくると、ナショナル・ビスケット社(ナビスコ)の正午を知らせる熱い汽笛だけが、煮えたる静けさを引き裂いた。列車の麦わらの座席カバーは今にも燃え上がりそうだった。隣に座っていた女性は、しばらく白いシャツの下にじっとり汗をかいていたが、手にした新聞も湿ってくると、絶望的な声をあげて深い熱の中で姿勢を崩した。彼女のバッグが床に叩きつけられた。

「ああ、なんてこと！」彼女は息をはずませた。

オレはやっとの思いでそれを拾い上げ、手渡してやった。他意がないことを示すために、できるだけバッグの端っこをつかんで腕を伸ばして渡したっていうのに、その女性も含めて、近くにいた誰もがオレを疑っていた。

「暑い！」と、車掌が顔なじみに向かって言った。

「何て暑いんだ！暑い！暑い！暑い！これで十分暑いかね？暑いって？どうかね・・・？」

オレの定期券に黒いシミがついてこのオッサンの手から戻ってきた。こんなに暑けりゃ、このオッサンが誰と熱いキスをかわそうが、オッサンの心臓のすぐ上にあるパジャマポケットに誰が汗で湿った頭をのっけてようが関係ないやね。

・・・ブキャナン家のホールからかすかな風が吹き、電話のベルの音がドアの前で待っているギャッツビーとオレに聞こえてきた。

「ご主人様のご遺体だって！」と執事が受話器に向かって怒鳴った。

「申し訳ありませんが、奥様、ご用意できません。こんな昼間に触るには暑すぎます！」

・・・なんてね。彼が本当に言ったことは「はい・・・はい・・・承知しました」だけなんだけど。

執事は受話器を置くと、少し汗をかきながらオレたちの方に来てカンカン帽を預かりにきた。

「奥様がサロンでお待ちです！」と叫んで、いらぬお世話で方向まで指し示した。こんな暑さの中では、余計な身振りなんて普通の人間にとって侮辱だね。

日よけが深い影を落としている部屋は暗くて涼しかった。デイジーとジョーダンが巨大なソファに横たわった銀の偶像のようで、扇風機の音に対抗して自分たちの白いドレスが飛ばないように押さえていた。

「動けないのよ」と二人は同時に言った。

ジョーダンの指は、日焼けの上にパウダーを塗って白くなってて、一瞬だけオレの手をとった。

「名選手のトーマス・ブキャナン氏は？」オレが尋ねた。

と同時に、無愛想なしゃがれ声を抑えながら電話で話しているのが聞こえた。

ギャッツビーは真紅のカーベットの真ん中に立ち、うっとりとしりぞきを見つめていた。デイジーが彼を見て、甘く刺激的な笑い声をたてると、胸元からかすかにパウダーが舞い上がった。

「噂によると」ジョーダンがささやいた。

「トムの電話に出てるのは愛人らしいわ」

オレたちは黙ったままだった。廊下の声はイライラして高くなった。

「よろしい、それでは車は売らないよ・・・あなたには何の義理もないんでね・・・昼食の時間に邪魔してくるなんて頭にくるよ！」

「受信機を押さえたまま言ってるのよ」とデイジーが皮肉っぽく言った。

「いや、そうじゃない」とオレは彼女をなだめた。

「ほんとに仕事の話なんだ。たまたま知ってたんだけど」

トムはドアを開け、ゴツイ体で一瞬その空間を塞いで部屋に入ってきた。

「ギャッツビーさん！」嫌悪感を隠して平らな手を差し出した。

「お目にかかれて光栄です・・・ニックも・・・」

「冷たい飲み物を作ってちょうだい」とデイジーが声を高くした。

彼がまた部屋を出ていくと、彼女は立ち上がってギャッツビーの前に行き、彼の顔を引きよせて唇にキスすると「わたしが愛してること、知ってるでしょ」とささやいた。

「レディが同席してるのを忘れてるわね」とジョーダンが言った。

デイジーは、そうかしらとでもいうようにしりぞきを見回した。

「あなたもニックにキスをすればいいじゃない」

「まあ、下品な子！」

「気にしないわ！」デイジーは叫び、レンガの暖炉の前で足を踏み鳴らして踊りだしたが、さすがに暑苦しいと思い直してソファに沈み込んだ。その時、洗濯したての服を着た子守が女の子を連れて部屋に入ってきた。

「祝福されたかわいい子」とデイジーが腕を差し出して歌うように言った。

「あなたを愛してるママのところいらっしやい」

子守の手を離れたその子は、部屋を横切って母親のドレスの中に恥ずかしそうに座った。

「わたしのかわいい子、ママのパウダーが黄色い髪についちゃったかしら？　立って『初めまして』って言ってね」

ギャッツビーとオレは身を乗り出して、ためらいがちな小さな手を取った。その後も彼は驚いた顔で子供を見ていた。それまでその子の存在を本気で信じていたとは思えない。

「お昼ごはんの前にお洋服を着替えたの」と子供がデイジーに振り返って熱心に言った。

「ママが皆さんにあなたを見ていただきたかったの」そう言ってデイジーは、白い小さな

首筋に顔をよせた。

「かわいいわたしの夢。わたしの小さな夢」

「そうね」子供は落ち着いて答えた。

「ジョーダンおばさんも白いドレスを着てるわね」

「ママのお友達はどう？」デイジーはその子をギャッツビーの方に向けて「すてきと思う？」と聞いた。

「パパはどこ？」

「この子は父親には似てないの」デイジーが説明した。

「わたしに似てるの。髪と顔の形が同じ」

デイジーがソファに腰を下ろした。子守が一步前に出て手を差し出した。

「いらっしゃい、パミー」

「またね、わたしのかわいい子」

よくしつけられた子供で、残念そうに後ろを振り返ったものの、子守の手を握りしめてドアから連れ出されていった。入れ替わりにトムが戻ってきた。後には氷たっぶりのジンリッキーが四杯、カチカチと音を立てて続いた。

ギャッツビーは自分の飲み物を取った。

「涼しげですね」と目に見える緊張をたたえて言った。

オレたちは一気に飲み干した。

「太陽は年々暑くなっているってどこかで読んだんだが」とトムが機嫌よく言った。「地球がもうすぐ太陽にぶつかるらしいぞ・・・いや、ちょっと待てよ・・・それは逆だな、太陽がだんだん冷たくなるんだった」

そして「外に出ましょう」とギャッツビーを促した。

「ここを見せたいんでね」

オレは彼らと一緒にベランダに出た。暑さで淀んだ緑の海峡に、小さな帆船が一隻、ゆっくりと海を渡っていた。ギャッツビーの目は一瞬それを追いかけると、手を挙げて湾の向こうを指差した。

「僕の家は真向かいなんです」

「そうですね」

オレたちの目は、バラの花壇や熱い芝生、そして海岸沿いに打ち上げられた海藻に向けられた。船の白い帆がゆっくりと青く冷たい空を背景に移動していた。前方には貝のように広がる海と、美しい島々が点在していた。

「楽しそうだな」とトムがうなずいてみせた。

「あの船に乗って一時間ほど沖へ漕ぎ出したいもんだよ」と言った。

オレたちはダイニングルームで昼食をとった。暑さを避けてほの暗くした中で、妙に緊張した興奮を冷たいエールで飲み下した。

「今日の午後は何をするの？」とデイジーが声をあげた。

「その次の日も、また次の日も、三十年後も？」

「神経質にならないでよ」とジョーダンが言った。

「秋になればまた人生をやり直せるわよ」

「でも暑いわ」とデイジーは泣きそうになりながら言った。

「何もかも混乱してるんだもん。みんなで街に行きましょうよ！」

彼女の声は暑さの中でもがいてたけど、暑さを打ち負かして、ちゃんとした言葉になってみんなに伝わった。

「馬小屋からガレージを作るのは聞いたことがあるが、ガレージから馬小屋を作ったのはオレが初めてでしょうな」とトムがギャッツビーに言っていた。

「誰が街に行きたいの？」とデイジーがしつこくみんなに聞いた。ギャッツビーの視線は彼女に向けられた。

「ああ」彼女は声をあげた。

「あなたはとても涼しそうなのね」

二人の目が合って、まるで二人きりの空間にいるように見つめ合い、彼女はそれを振り切るようにテーブルを見下ろした。そして、「あなたはいつもとても涼しそうに見える」と繰り返した。

言葉に出さなくとも、彼を愛していると言ったも同然で、トム・ブキャナンは見逃さなかった。彼は驚いた。彼の口が少し開いて、ギャッツビーを見てから、デイジーを見つめた。彼女にずっと昔に会ったことに今初めて気づいたかのように。

「あなたは広告のモデルに似てるわね」と彼女は無邪気に続けた。

「あの広告のモデルを知ってる……」

「わかったよ」とトムが割り込んだ。

「さあ、みんなで街へ行こう」と言って立ち上がった。

彼の目はギャッツビーと妻を見比べて光った。誰も動かなかった。

「さあ！」トムが切れそうになった。

「どうしたんだ？ 街に行くんなら、さっさと行こう」

手は震えていたがエールの最後の一口を唇に持っていった。デイジーの声に、オレたちは立ち上がって燃える砂利道に出た。

「もう出かけるの？」と彼女は不満そうだった。「このままで？ タバコを吸ってからにしない？」

「昼にみんな吸ってたろう」

「ねえ、もっと楽しくしない？」彼女は夫に懇願した。

「急ぐには暑すぎるし」

彼は答えなかった。

「好きにすればいいわ」と彼女は言った。

「さあ、ジョーダン行きましょう」

二人は用意のために二階に上がった。オレたち三人の男はそこに立って、熱い小石を足でかき回していた。銀色の曲線を描く月が西の空にすでに浮かんでいた。ギャッツビーが何か話しかけようとしてやめた。でも、トムが向き直って話を聞こうと待ち構えていた。

「ここに馬小屋はあるんですか？」とギャッツビーが苦しまぎれに尋ねた。

「この道を四分の一マイル程行った所だ」

「そうなんですか」

しばらく間を置いてから「街に行くだなんてとんでもないな」とトムが怒って言った。

「女が考えることときたら・・・」

「何か飲み物を持っていくの？」とデイジーが上の窓から呼びかけた。

「オレがウイスキーを取ってくる」トムが答えて中に入った。

ギャッツビーがぎこちなくオレの方を向いた。

「僕は彼の家では何も言えないよ、君」

「彼女の声には無分別なところがあるから」とオレは言った。

「だって・・・」それから言うのをためらった。

「彼女の声にはお金が詰まっているんです」と彼に不意に言われた。

全くそうだった。それまで全然わかってなかった。その声は金にあふれていたんだ・・・それは、金の中で高く低く響き渡る尽きることのない魅力であり、金のチャリンチャリンとなる音であり、金のシンバルの歌だった・・・白い宮殿の高いところにいる・・・王女様であり、黄金の娘だった・・・

トムがタオルでボトルを包みながら家から出てきて、デイジーとジョーダンがメタル素材の小さなぴっちりとした帽子をかぶって、軽いケープを腕にかけて後に続いた。

「僕の車でいきますか？」とギャッツビーが提案した。シートの熱い緑の革に触れて「日陰に置いておけばよかった」と言った。

「標準シフトなのか？」とトムが尋ねた。

「そうです」

「君はオレのクーペで街まで行けばいい。君のはオレが運転させてくれ」

ギャッツビーはその申し出を嫌がった。

「ガソリンが少ないですし」と反論したが

「ガソリンは十分あるさ」とトムが大声で言い放った。ゲージを見ながら

「ガス欠になったらドラッグストアに寄るよ。最近はドラッグストアで何でも買えるさ」と言った。

この明らかにつじつまの合わない発言にちょっと沈黙が生じた。デイジーはしかめっ面をしてトムを見た。ギャッツビーの顔には、見たことがないのにどこかでぼんやり見たような気もする、以前誰かが表現するのを聞いたような表情がよぎった。

「さあ、デイジー」とトムは手でデイジーをギャッツビーの車に押し付けた。

「このサーカス団の車に乗りな」

彼はドアを開けたが彼女は彼の腕の輪から逃げ出した。

「あなたはニックとジョーダンを連れて行ってちょうだい。わたしたちはクーペで後を追うから」

彼女はギャッツビーの近くまで歩いて行き、ギャッツビーの上着に手を添えた。ジョーダンとトムとオレはギャッツビーの車の前の席に乗り込み、トムは慣れないギアを慎重に入れ、彼らを残して猛烈な暑さの中を飛び出していった。

「今を見たか？」とトムが押し付けがましく聞いてきた。

「何を？」

ジョーダンとオレが最初から知っていたに違いないと悟って、オレをにらんだ。

「オレがマヌケだと思っただろう？」と聞いてきた。

「そうかもしれないがオレにはたまに何をすべきかを教えてくれる第六感みたいなものがあるんだ。たぶん君は信じないだろうが、科学的には・・・」

彼は言い淀んだ。直面している問題があまりに大きいことに気づいて、理論の奈落の底から引き戻された。

「オレはこの男を少し調べた」と彼は続けた。「知っていたらもっと詳しく調べられたのに・・・」

「霊能力者のところに行ったってことなの？」とジョーダンがユーモラスに尋ねた。

「何だって？」混乱した彼は、笑うオレたちをじっと見ていた。

「霊能力者？」

「ギャッツビーについてよ」

「ギャッツビーについて！ 違うさ、彼の過去を少々調査してみたと言っただけだ」

「それでオックスフォード出身ってことがわかったわけね」とジョーダンが先回りして言った。

「オックスフォード出身だって？」彼は信じなかった。

「あんなヤツがか！ ピンクのスーツなんか着やがって」

「それでもオックスフォード出身者でしょ」

「ニューメキシコ州のオックスフォードかい」トムが軽蔑的に言った。

「そんなとこだろ」

「いい、トム？ あなたがそこまでバカにするんなら、どうして彼を昼食に招いたの？」ジョーダンが不機嫌そうに言った。

「デイジーが誘ったんだ。結婚前から知り合いだったらしい。どこで知り合ったもんだか！」

オレたちは皆、エールの酔いが覚めてイライラしていたので、それを承知でしばらく黙って車を走らせていた。そして、T・J・エクルバーグ先生の色あせた目が道のかなたに見えてきたとき、オレはギャッツビーの「ガソリンについての注意」を思い出した。

「街に行くには十分あるさ」とトムが言った。

「でも自動車修理店(ガレージ)がここにあるのよ」とジョーダンは反論した。

「こんな暑い中でエンストしたくないわ」

トムは焦って両方のブレーキを入れて、ウィルソンの看板の下に砂煙をあげて滑りこんだ。しばらくすると、店の中から店主が出てきて、うつろな目で車を見ていた。

「ガソリンを入れてくれ！」とトムが乱暴に叫んだ。

「何のために車を停めたと思う？ 景色を見るためだとも言うのか？」

「病気なんです」とウィルソンは動かずに言った。

「一日中具合が悪くて」

「どうしたんだ？」

「疲れ果てて」

「じゃあ自分でやれとも言うのか？」トムが言った。

「電話じゃあ元気そうだったのに」

ウィルソンはしんどそうに、もたれかかっていた日陰の戸口から出てきて、息を荒く

しながらタンクのキャップを外した。日に照らされた彼の顔は真っ青だった。
「昼食のお邪魔をするつもりはなかったんです」と彼は言った。
「でも金が必要なんです。古い車をどうされるつもりかと思ひましてね」
「この車はどうか？」とトムが尋ねてきた。「先週買ったんだ」
「黄色のいい車ですね」とウィルソンはポンプのハンドルを動かしながら言った。
「買ってみるか？」
「買えるかもしれない」とウィルソンはかすかに微笑んだ。
「いや、でも別の車の方がすぐに金になります」
「急に何のために金が欲しいんだ？」
「ここに長く居すぎました。逃げ出したいんです。妻も西へ行きたいと思ってるんです」

「奥さんもか？」トムは驚いて叫んだ。
「十年前から言っていました」彼は、手を目の上にかざしながら、ポンプにもたれて一息入れた。
「そして今は、あれが行きたくても行きたくなくても行くんです。あれを連れて行きますよ」

クーペが砂煙を舞い上げて、振った手が見えたかと思うとあっという間にオレたちの横を通り過ぎていった。

「いくらになるんだ？」イライラしてトムが聞いた。
「この二日間、おかしなことに気づいたんです」ウィルソンは言った。
「だから逃げ出したいんです。車のことではご迷惑をおかけしました」
「いくらなんだ？」
「一ドル二十セントです」

容赦ない猛烈な暑さに混乱し始めていたオレは、ちょっとまずいことになったと思ったが、彼の疑いがトムに降りかかっていないのに気づいた。彼はマートルが自分とは別の生活を送っていることを知り、そのショックで体調を崩してしまったのだ。オレは彼をじっと見つめ、次にトムを見つめた。トムは一時間もしないうちに似たような状態に遭遇していた。知性や人種の違いはあれ、人間というものはそれほど変わらないことが身にしみた。少なくとも健康な人と病人ほどの大きな違いはない。ウィルソンは病気になった上に罪悪感を感じていた。それも許されないほどの罪悪感を・・・まるで、かわいそうな女の子に子供を産ませたかのように。

「あの車を売ってやるよ」とトムは言った。
「明日の午後に持って来させるから」

午後の眩しい光の中にあっても、この場所はいつも漠然とした薄気味悪い雰囲気が漂っていたが、今、背後に何か気配を感じて振り返った。灰山の上ではT・J・エクルバーグ先生の巨大な目がじっと見張っていた。そしてすぐに、二十フィートも離れていないところから、別の目が大きく見開いてオレたちをじっと見ていることに気がついた。

ガレージの上の窓ではカーテンが少し開けられて、すき間からマートル・ウィルソンが車を見下ろしていたんだ。彼女はあまりに心を奪われていて、見られていることに気

づくこともなかった。徐々に現像される写真のように、次から次へといろんな感情が彼女の顔に浮き上がってきた。その様子はどこかで見たことがあるもので、女の顔によく見られる表情だった。でもマートル・ウィルソンがなんでそんな顔をするのかが、どこかの外れで不思議な気がした。だけどわかった。彼女の目は嫉妬と恐怖で大きく見開かれていて、トムではなくジョーダン・ベイカーを見ていた。彼の妻だと思ったんだ。

単純な心に起きた混乱ほどやっかいなものはない。車を走らせている間、トムは熱い焦燥の鞭が当たるのを感じていた。彼の妻と愛人は一時間前までは安泰だったのに、今や彼の手から滑り落ちようとしていた。デイジーに追いつき、ウィルソンからは離れたいという二つの目的のために本能的にアクセルを踏みこんだ。オレたちは時速五十マイルで、アストリアに向かって疾走していった。高架線の錯綜する間からのんびり走る青いクーペが見えてきた。

「五十番街周辺の大きな映画館は涼しいわね」とジョーダンが言った。

「誰もいない夏の午後のニューヨークが好きなの。そこには何かとても官能的なものがある・・・熟しているいろんな種類の変った果物が手の中に落ちてくるような」

「官能的」という言葉はトムをさらにイラだしい気持ちにさせたが、文句を言い出す前にクーペが止まり、デイジーが横に寄れと合図した。

「どこに行くの？」と彼女が叫んだ。

「映画はどう？」

「それは暑いわ」と不満げに言った。

「あなたたちが行ってよ。わたしたちは街を乗り回してるから」それからウイットを言う気力を振り絞った。

「どこかの角で落ち合いましょうよ。わたしは二本のタバコを吸う男になるわ」

「ここで議論してもしょうがない」後ろでトラックがクラクションを鳴らしたのでトムが焦ったように言った。

「セントラルパークの南側のプラザの前までついて来い」

トムは彼らの車を確認して何度も振り返り、後続車が遅れると視界に入るまでスピードを落とした。まるで彼らが横道に迷い込んで永遠に彼の人生から消えてしまうのを恐れていたように。

でも彼らが消えることはなかった。オレたちは皆、プラザホテルの応接間つきのスイートルームに入るといふ、訳の分からない行動に出た。

その部屋に行くことでやっと落ち着いた、長い白熱した話し合いの内容は覚えていない。その間、自分の下着が湿った蛇のように足の周りを登り続け、絶え間なく汗が背中を伝って体が冷えたことを鮮明に覚えている。このアイデアは、デイジーがバスルームを五部屋借りて水浴びしようと言ったことから始まり、「ミントジュレップを飲む場所」としてより具体的な形にまとまった。みんな、何度も何度も「馬鹿げたアイデアだ」と言い合った・・・そして困っているボーイに同時に話しかけ、すごく面白いことをしているか、またはそう考えてるフリをしていた・・・

部屋は広くて息苦しく、もう四時になっていたにもかかわらず、窓を開けても公園の低木を抜けて熱い突風が入ってくるだけだった。

デイジーは鏡の前に行き、髪を直すためにオレたちに背を向けて立っていた。

「素晴らしいスイートね」とジョーダンがうっとりとしささやき、誰もが笑った。

「別の窓を開けて」とデイジーは、鏡から振り向くことなく命令した。

「もうこれ以上は無いよ」

「じゃあ斧を持ってきてもらうように電話して・・・」

「暑さを忘れることだ」とトムはせっかちに言った。

「そのことでカリカリしていると十倍悪くなる」

トムはタオルを広げてウイスキーの瓶を取り出し、テーブルに置いた。

「彼女を放っておけばいいじゃないですか、君」とギャッツビーが言った。

「街に来たがっていたのはあなたでしょう」

一瞬の沈黙があった。電話帳が釘から滑り落ちて床にどさりと落ちたので、ジョーダンが「すみません」とささやいたが、今度は誰も笑わなかった。

「拾うよ」とオレが申し出た。

「いや、僕がやろう」と言ってギャッツビーは、切れた糸を調べ、興味深そうに「フン！」とつぶやき、本を椅子の上に放り投げた。

「気の利いた表現だな、そうだろう？」とトムは鋭く言った。

「何がです？」

「お前の口癖の『君』だよ。どこで覚えた？」

デイジーは鏡の前で振り返って言った。

「人のあげ足をとるんならここにはいないわよ。電話してミントジュレップに入れる氷を注文してちょうだい」

トムが受話器を取り上げると、圧縮された熱が音になって爆発し、下の舞踏室からメンデルスゾーンの結婚行進曲の威勢の良い和音が聞こえてきた。

「この暑い中に誰かと結婚するなんて！」ジョーダンが無愛想に叫んだ。

「でも、わたしは六月の半ばに結婚したのよ」とデイジーが思い出したように言った。

「六月のルイビルで！誰かが気を失ったわね。誰だったっけ、トム？」

「ビロクシだ」とトムが短く答えた。

「そう、ビロクシという名前の人だった。ブロック・ビロクシという呼ばれてて、確か箱を作ってた。それもテネシー州のビロクシ出身だった」

「わたしが教会のすぐそばに住んでいたもんだから」とジョーダンが言った。

「その人は三週間もわたしの家にいたのよ。パパが出て行けと言うまでね。出て行った翌日にパパが死んだわ」そして何かまずいことを言ったみたいに「彼とはなんの関係もないんだけど」と付け加えた。

「メンフィス出身のビル・ビロクシなら昔よく付き合ったよ」とオレが言った。

「それは彼のいとこよ。彼が出ていくまで家族の歴史を全部聞かせてくれたのよ。わたしが今使っているアルミ製のパターは彼がくれたものなの」とジョーダンが答えた。

式典が始まると音楽が鳴りやみ、窓からは長い歓声上がり、「イエーイ、イエーイ、イエーイ！」と断続的な叫び声が続き、最後にはジャズが炸裂してダンスが始まった。

「わたしたちも年をとったわね」とデイジーが言った。

「若かったら立ち上がって踊ってるのに」

「ビロクシみたいになるわよ」ジョーダンが彼女をたしなめてから言った。

「どこで彼と知り合ったの、トム？」

「ビロクシか？」トムは懸命に思い出そうとしていた。

「知らないな。デイジーの友達だろう」

「違うわよ」デイジーが否定した。

「それまで彼を見たことがなかったもの。あなたの貸し切りの車で来たのよ」

「お前を知っていると聞いたんだ。ルイビルで育ったって。エイサ・バードが最後の最後に彼を連れて来て、空いている席があるかどうか聞いてきたんだ」

ジョーダンが苦笑した。

「彼はたぶん誰かにたかりながら帰って行ったのね。イエール大学ではあなたのクラスの級長だったと言ってたわよ」

トムとオレが顔を見合わせた。

「ビロクシが？」

「第一に、級長なんてもんはなかったよ・・・」

ギャッツビーが足で落ち着きのないリズムを刻み、トムは突然彼を見た。

「ところでギャッツビーさん、あなたはオックスフォード出身なんだそうですね」

「正確にはそうではありません」

「オックスフォードに行かれたそうですね」

「ええそこに行きました」

しばらくして、トムが信じられないような侮辱的な声で言った。

「ビロクシがニューヘブン(イエール大学)に行ったのと同じ頃に行ったんじゃないのか」

また間があいた。ウェイターがノックをして、砕いたミントと氷を持って入ってきて、「お邪魔しました」と言ってドアが閉まる音がしても、みんな黙ったままだった。そしてこんな途方もない事実がついに明らかにされることになった。

「僕はそこに行ったと言ったでしょう」とギャッツビーが言った。

「そうは聞いたが、いつ行ったのか知りたいもんだね」

「一九一九年です。五ヶ月しか滞在していません。だからオックスフォード出身とは呼べない」

トムは辺りを見回したが、みんなギャッツビーを見ていた。

「休戦後に将校に与えられた機会でした」と彼は続けた。

「イギリスやフランスの大学に行けたんです」

オレは立ち上がって彼の背中を叩いてやりたかった。前にも似たことがあったけど、この時もギャッツビーなら本当に信じられると思った。

デイジーが微笑みながら立ち上がってテーブルに向かった。

「ウイスキーを開けて、トム。ミント・ジュレップを作ってあげる。そうすれば、あなたも落ち着くわ・・・ミントを見てよ！」

「ちょっと待て」トムがキレた。

「ギャッツビーさんにもう一つ聞きたいことがある」

「どうぞ」ギャッツビーが丁寧に答えた。

「オレの家で何の騒ぎを起こそうとしてるんだ？」

ついに対決の時が来たが、ギャッツビーは喜んでいて。

「彼は騒ぎなんか起こしてないわ」デイジーが必死に二人を見ていた。

「騒ぎを起こしてるのはあなたの方よ。少しは落ち着いてよ」

「落ち着けだって！」トムは信じられないと言うように繰り返した。

「最近、どこからともなく来た誰でもないヤツに奥さんを寝取られるってことが流行ってるようだな？ ヘン、それがいいって言うんなら、オレは手を引くさ・・・家族生活や家族制度をバカにすることから始めて、次は全てを放り投げて、白人と黒人で結婚するようになるんだな」

自分の言葉にのぼせ上がり、自分が文明最後の砦になっているのに気づいた。

「ここにいるのはみんな白人よ」ジョーダンがつぶやいた。

「わかってる、オレは人気者ではないさ。大きなパーティーなどは開かない。しかし、最近、家を豚小屋にしないと友達が作れないそうじゃないか」

みんなと同じようにオレも腹を立てていたが、彼が口を開くたびに笑いたくもなかった。自分のことを棚に上げて、知ったかぶりで他人を責める変わり身の早さは見事だった。

「ここでお話ししないといけないことがあるんですよ、君」ギャッツビーは話を切り出したが、デイジーが彼の意図を察知した。

「お願いだからやめて！」彼女はいたたまれなくなって口を挟んだ。

「お願いだから、みんな家に帰りましょう。みんなで帰りましょうよ」

「それはいい考えだ」オレは立ち上がった。

「さあ、行こうぜ、トム。誰も飲みたくないんだ」

「オレはギャッツビーさんの話を聞きたい」

「奥さんは君を愛していない」とギャッツビーが言った。

「愛したこともない。彼女は僕を愛している」

「気でも狂ったのか？」トムが叫んだ。

ギャッツビーは興奮して立ち上がった。

「彼女は君を愛したことはない」彼は叫んだ。「君と結婚したのは、僕が貧しくて待ってられなかったからだ。それはひどい間違いだったけど、心の中では僕以外に誰も愛したことはないんだ！」

この時点でジョーダンとオレは出て行こうとしたが、トムとギャッツビーが代わる代わる残るように言った。まるで二人とも何も隠すことがないかのように、二人の感情の爆発を見守るのが特権だとも言うように。

「座りなさい、デイジー」トムは父親のようにしゃべろうとしたが上手くいかなかった。

「何があったんだ。オレは全部聞きたい」

「何があったかは今お話したとおりです」ギャッツビーが言った。

「五年間の親交がありました。君が知らなかっただけで」

トムはデイジーをにらんだ。

「お前は五年もこんなヤツと付き合っていたのか？」

「付き合っていない」ギャッツビーが言った。

「いえ、僕たちは会うことができなかつたんです。でもずっと愛し合っていたんですよ、君。君が知らなかつただけで。僕は時々笑っていたんだ」彼の目に笑いはなかつた。

「君が知らないでいると思うと」

「はっ、それだけかい」トムは聖職者のように太い指を組み合わせて椅子にもたれかかつた。

「お前は狂ってるんだよ！」彼の怒りは爆発した。

「五年前の事情は知らんさ。それまではデイジーのことを知らなかつたんだから・・・さて、どうやってお前が彼女に近づいたもんだかな。裏口に食料を運んだとかそんなところだろう。それ以外のことは全部ウソ出たら目もいいところだ！ デイジーは結婚した時も今もオレを愛してくれてるんだ」

「いいえ違います」ギャッツビーは首を振って言った。

「いや、違わないね。彼女はオレを愛してるんだよ。問題なのは、彼女が時々アホなことを考えて、自分が何をしているのかが分からなくなることだ」トムは聖人君子のようにうなずいた。

「それにオレもデイジーを愛している。たまに暴れてバカなマネをすることもあるが、いつも彼女の元に戻っているさ」

「あなたこそ混乱してるじゃない」デイジーが言って、オレの方を向いた。スリリングな軽蔑を込めて一オクターブ下げた声が部屋中を満たした。

「わたし達がシカゴを離れた理由を知ってる？ あの騒ぎを聞かなかつたとしたら驚きよね」

ギャッツビーが彼女の横に立った。

「デイジー、それはもう終わったことだ」と真剣に言った。

「それはもういいんだよ。ただ彼に真実を話してあげて。あなたが彼を愛してなかつたということ。そうすれば、全部帳消しになるから」

彼女は呆然と彼を見ていた。

「どうして・・・わたしが彼を愛していたなんて・・・そんな・・・」

「あなたは彼を愛してなかつたんだよ」

彼女はためらった。そして訴えるようにジョーダンとオレを見つめた。まるで自分が何をしようとしているのかやっと気づいたように。まるで最初から何もしてなかつたみたい。でも、もうおしまいだ。もう手遅れだった。

「彼を愛したことはないわ」明らかにしぶしぶと言った。

「カピオラニではどうなんだい？」トムが突然尋ねてきた。

「愛してなかつた」

階下の舞踏室からは、くぐもった息苦しい和音が熱い空気の波に乗って漂ってきた。

「靴を濡らさないようにパンチボウルで抱き上げてやった日は？」かすれ声に愛情が感じられた。「・・・デイジー？」

「やめてよ」彼女の声は冷たかつたが、怒りは消えていた。彼女はギャッツビーを見た。

「ねえ、ジェイ、お願い」そう言ってタバコに火をつけようとした手は震えていた。不意に、タバコと燃えているマッチをカーペットの上に放り投げた。

「ああ、あなたがあまりにも沢山のことを望みすぎなのよ！」ギャッツビーに向かって叫んだ。

「今はあなたを愛しているの。それだけで十分じゃない？ 過去はどうしようもないんだもの」彼女は力なくすすり泣き始めた。

「前は彼を愛していたのよ・・・でも、あなたも愛していたわ」

ギャッツビーは目をパチパチさせた。

「僕も愛していただって？」と繰り返した。

「それだって嘘だ」トムは残酷にもそう言った。「彼女はお前が活着ているかどうかさえ知らなかったんだ。デイジーとオレには、お前が決して知ることのできない、二人とも決して忘れることのできない関係があるのさ」

その言葉はギャッツビーの身体にこたえたようだった。

「デイジーと二人だけで話し合いたいんです」と言い張った。

「彼女は興奮していますし・・・」

「二人きりになったとしてもトムを愛したことがないとは言えないわ」彼女は哀れな声で認めた。「それは正しくないもの」

「もちろんそうだと」トムが同意した。

彼女は夫の方を向いた。

「まるで自分に関係あることみたいに言うじゃない」

「もちろん大事なことだ。これからは君を大切にするよ」

「あなたはわかっているじゃない」ギャッツビーが少し慌てて言った。

「これ以上彼女の世話をする必要はありませんよ」

「オレがか？」トムは目を大きく見開いてあざ笑った。彼は今、落ち着きを取り戻していた。

「それはなぜだい？」

「デイジーはあなたの元を去るからです」

「バカげたことを」

「もう別れる」彼女は精一杯の勇気を振り絞って言った。

「彼女はオレからは離れんよ！」トムの言葉が突然ギャッツビーの頭にのしかかってきた。

「嫁さんに指輪を買うにも人から何か盗まなきゃならん詐欺師のためにな」

「もういい加減にして！」デイジーが叫んだ。

「お願いだからここを出ましようよ」

「お前は一体何者なんだ？」トムが怒りだした。「マイヤー・ウルフシェイムとつるんでいる連中の仲間だろう。それだけはわかっているんだ。お前の素行を少し調べてみたが、明日もっと詳しく調べてやる」

「君、それについてはご自由に」ギャッツビーは動じなかった。

「お前の『ドラッグストア』が何か知ってるんだぞ」彼はオレたちの方を向いて早口で話し出した。

「こいつとウルフシェイムはここいらとシカゴの路上ドラッグストアを買い占めて、エチール・アルコールをカウンターで売っていたんだぜ。それがこいつの芸当の一つだ。最初に会った時、酒の密売人じゃねえかとにらんでいたが全くの筋違いじゃなかったね」

「それがどうしたんですか？」ギャッツビーは丁重に言った。

「君の友人のウォルター・チェイスは僕たちの仲間になるのにやぶさかではないようでした」

「お前はあいつを見捨てたんじゃないのか？ ニュージャージーで一ヶ月間あいつは刑務所に入ったってな。何てこった！ ウォルターの話聞いてみろよ」

「彼は全くの無一文でした。金を稼げるならって喜んでたんですよ、君」

『君』なんて呼ぶんじゃないよ！」トムが叫んだ。ギャッツビーは黙っていた。

「ウォルターはお前を賭博法違反で訴えようとしてたんだぜ。ウルフシェイムから脅されて黙っちゃったが」

ギャッツビーの顔には、彼には似つかわしくない、それでいて見慣れた表情が戻っていた。

「ドラッグストアの件は小銭稼ぎだったが、今度はウォルターも怖がってしゃべれないようなことをおっぱじめたようじゃねえか」トムはゆっくりと続けた。

オレはギャッツビーと夫の間でおびえて目を見張っているデイジーと、アゴの先で目に見えないけど気になって仕方がない何かのバランスを取り始めたジョーダンをちらりと見た。それからギャッツビーの方を振り返って愕然とした。彼の庭でみんなが噂していた、あの「人を殺した」としか説明できないような顔をしていたんだ。一瞬、彼の顔には、突飛などしか言いようもない表情が浮かんでたんだって。

その表情が通り過ぎると、勢い込んでデイジーに話し始めた。すべての汚名を否定し、言われていない非難まであげて自分の名誉を挽回しようとしていた。でも、いくら言っても、彼女はますます内にこもっていくばかりで、とうとう説得を諦めてしまった。午後が過ぎていくにつれ、死に絶えた夢だけが、もはや形をなさないものに触れようとして不幸に身悶えし、絶望をこらえながら、部屋の彼方に失われてしまった声を求めてあがいていた。

その声が再び出て行かせてくれと懇願した。

「お願い、トム！ もう耐えられないのよ」

彼女の目はおびえていたが、今まであったどんな意図もどんな勇気も、間違いなく消えてしまったことを伝えていた。

「二人とも家に帰れよ」とトムは言った。

「ギャッツビーさんの車でな」

デイジーはトムを見て驚いていたが、彼は軽蔑を込めた寛大さを示しながら言った。

「一緒に行っても大丈夫さ。もうお前を困らせやしないよ。身の程知らずの求愛ももう終わったとわかってるさ」

彼らは何も言わずに出ていった。偶然の出来事に孤立してしまい、幽霊のようになって、オレたちの慰めまでも拒絶しているかのようだった。

トムは立ち上がって 未開封のウイスキーをタオルに包み始めた。
「何か飲むか？ ジョーダン？ ニックは？」
オレは答えなかった。
「ニック？」彼が再び尋ねた。
「何？」
「何かいるのかい？」
「いや・・・今日が誕生日なのを思い出した」
オレは三十歳になっていた。目の前に新しい十年の険しい道が大きく広がっていたんだ。

トムとクーペに乗り込み、ロングアイランドに向けて出発したのは七時頃のことだった。トムは興奮して笑いながらひっきりなしに話しかけていたが、その声は、歩道の見知らぬ人の話し声や高架の喧騒のように、ジョーダンとオレからは遠かった。人間の同情心には限界があるもんで、彼らの悲劇的な議論の記憶も、街の灯りが遠ざかるとともに薄れていくに任せていた。三十歳・・・これから来る孤独の十年、独身男のリストが薄くなり、情熱が詰まっていた折カバンも薄くなり、頭髪も薄くなる。でも隣にはジョーダンがいた。デイジーと違って賢かった。年齢を重ねても、忘れ去った昔の夢をいつまでも引きずることはしなかった。暗い橋を渡る時、彼女の青白い顔がオレのコートの肩にのんびりと落ちてきて、彼女の手が安心感のある圧力でそえられて三十歳になった衝撃が薄らいだ。

こうしてオレたちは涼しくなる黄昏の中を死に向かって走り続けた。

灰山のそばで喫茶店を営んでいた若いギリシャ人のミケリスが、検死の際の重要証人だった。彼は五時過ぎまで暑さに耐えて昼寝をしていたが、自動車修理店(ガレージ)に行ってみると、事務所にいたジョージ・ウィルソンが病気なのに気がついた。彼の薄い髪色のように顔色をなくして震えている。ミケリスはベッドに行くように勧めたが、ウィルソンは「そんなことをしたら仕事に支障が出る」と断った。隣人がなんとか説得しようとしている間に、頭上で激しい騒ぎが起こった。

「妻をあそこに閉じ込めておいたんだ」とウィルソンが冷静に説明した。

「明後日までそこに閉じ込めておいて、それから引っ越すことにした」

ミケリスは驚いた。四年も近所に住んでいたが、ウィルソンはそんなことは言いそうにない男だったからだ。疲れた男の典型で、仕事をしていない時は玄関の椅子に座り、道路を行き交う人々や車をじっと見つめていた。誰かが話しかけると、いつも気の利いた当たり障りのない笑い方をしていた。彼は妻君の夫であり、独立した一個人ではなかった。

だから自然ななりゆきで、ミケリスは何があったのか聞いてみたが、ウィルソンは一言ももらさなかった。それどころか、好奇心旺盛で不審な視線をミケリスに投げかけて、ある日のある時間帯に何をしていたのかを尋ね始めたのだった。ミケリスが不安になってきた矢先、何人かの作業員がドアの前を通り過ぎて彼の喫茶店に向かったので、後で戻ろうと思いながらそれを機会に逃げ出した。しかし、彼は戻らなかった。戻ると言っ

たことさえ忘れていた。それだけだった。七時過ぎにまた外に出たとき、自分が言ったことを思い出した。

「わたしを打ちのめしなさいよ！」と叫んでいるのが聞こえた。

「投げ倒してぶちなさいよ！ この卑怯な臆病者！」

その瞬間、彼女は手を振って叫びながら、夕暮れの中に駆け出していった。ミケリスが戸口から離れるまでもなく全ては終わっていた。

新聞では「死の車」と書かれていたが、その車は停まることがなかった。暗闇の中から出てきて、運命の一撃に一瞬フラッと揺れたかと思うと、次の曲がり角で消えていった。ミケリスはその車の色さえも分からなかったが、最初の警官には淡い緑色だと答えた。もう一台の車は、ニューヨーク方面に向かっていたが、百メートルほど先で停車し、運転手が急いでマートル・ウィルソンのいる場所へ戻ってきた。無残に生命を奪われた彼女は道路にうずくまり、どす黒い血が土ぼこりと混ざり合っていた。

ミケリスとこの男が最初に駆けつけたのだが、まだ汗で湿った彼女のシャツのウエストを引き裂いた時、彼女の左胸が千切れてポケットのふたのようにゆるく揺れているのを見て、その下にある心臓に耳を傾ける必要はなかった。口は大きく開いて角が裂け、まるで長い間蓄えてきた途方もない生命力を手放すには口が少し小さすぎたようだった。

まだ少し離れているところから、数台の自動車と群衆が見えた。

「事故だな！ 良かったな。これでウィルソンも修理仕事ができそうじゃないか」

トムはスピードを落としたが、停まる気はなかった。でも修理店(ガレージ)のドアの前にいた人たちの鎮痛な表情を見て、トムは急にブレーキをかけた。

「ちょっと見てみようや」迷いながら言った。

「少しだけだ」

やっと、うつろな泣き声のような音が絶え間なくガレージ(修理店)から聞こえてくるのに気づいた。クーペを降りてドアの方へ歩いていくと、「ああ、神様！」と言いながら何度も何度もうめいているのがわかった。

「こりゃ酷そうだな」トムが興奮して言った。

彼はつま先立ちで伸び上がり、頭上に吊ってある金網のケースに入った裸電灯一つで照らされた修理店(ガレージ)の中を、輪になっている人の頭越しにのぞき込んだ。それから喉の奥で妙な音をたてると、たくましい腕で人混みをかき分けて突き進んでいった。

オレが中をのぞこうとしていたのに、人の輪は嘆きの声を響かせながらまた閉じてしまった。それから新たに到着した連中が列を乱し、ジョーダンとオレは不意に中に押し込まれた。

マートル・ウィルソンの体は、暑い夜に寒さで苦しんでいるかのように、毛布に包まれ、その上にもう一枚の毛布で包まれて、壁際の作業台の上に横たわっていた。脇ではトムがオレたちに背を向けて立ち、うなだれたまま、みじろぎもしていなかった。彼の隣には白バイで来た警官が立っていて、小さな手帳を持って汗だくになりながら何かを書

きつけては訂正していた。最初は、むき出しのガレージの中に響くうめき声のような声高な言葉の出所がわからなかったが、ウィルソンが事務所の一段高い敷居の上に立って、両手でドアの柱を抱えながら前後に体を揺らしているのが見えた。何人かの男が低い声で彼に話しかけ、時折肩に手をかけようとしていたが、ウィルソンはそれを聞いても見てもいなかった。彼の視線は天井の電灯の灯りからゆっくりと壁際の死体をのせた仕事台上に落ちていき、再び光の方に戻ってきて、絶え間なく高い叫び声を上げていた。

「ああ、なんてことだ！ ああ、神よ！ ああ、神よ！ どうしてこんなことに！」

トムはぐいと首をあげて、ガレージの中をうつろな目で見回した後、警官に向かってよく聞き取れない言葉で話しかけた。

「M-a-v-」と警官が言った。

「いや・・・r・・・」相手の男が訂正した。「M-a-v-r-o-・・・」

「オレの言うことを聞くんだ！」トムは押し殺した声で激しく言った。

「R・・・」と警官は言った「O・・・」

「g・・・」

トムの大きな手が激しく自分の肩に落ちてきたので、警官は顔を上げた。

「何だね？ 君」

「何が起きたのか・・・それが知りたいんだ！」

「車が彼女をはねた。即死だった」

「即死だった」トムは目を見張りながら繰り返した。

「彼女が道に飛び出したそうさ。あの野郎は車を止めもしなかったのさ」

「二台の車が来たんだ」ミケリスが言った。

「一台はニューヨークからの車で、もう一台はそっちに行く車だった」

「どこに行ったんだって？」警官が鋭く尋ねた。

「片道に一台ずつだ。奥さんは・・・」ミケリスは、毛布の方へ手を上げかけたがやめて、その手を下ろした。

「奥さんがそこに飛び出してきて、ニューヨークから来たヤツが時速三十マイルから四十マイルで彼女に突っ込んできたんだよ」

「この場所の名前は何か？」警官が尋ねた。

「名前はないね」

肌色の薄い身なりの整った黒人が近づいてきて言った。

「黄色い車だった。大きな黄色い車だったさね。新しい」

「事故を見たのか？」警官が尋ねた。

「いいや。向こうが四十マイルかもっと出しててすれ違ったさ。五十か六十だったかもしれん」

「ここに来て名前を言ってくれ。静かに。彼の名前を聞きたいんだ」

扉の所で体を揺らすウィルソンの心に何かが響いたんだろう。彼の叫びの調子が変わったのが聞こえてきた。

「それが何の車だったかなんて言わなくても知ってるぞ。どんな車か言わなくても知ってるんだ！」

トムを見守っていたので、彼の肩の後ろの筋肉がコートの下できゅっと引き締まってくるのが見えた。トムはつかつかとウィルソンのところに歩いて行き、前に立つと彼の二の腕をしっかりと掴んだ。

「しっかりするんだ」彼はなだめるようなしゃがれ声で言った。

ウィルソンの目はトムに注がれ、つま先で立っていて、トムが支えてなかったら彼の膝に倒れこんでただろう。

「聞いてくれ」彼を少し揺さぶってから言った。

「今、ニューヨークから戻ったばかりなんだ。さっき話していたクーペに乗って来たんだよ。今日の午後、オレが運転していた黄色い車はオレのじゃないんだ。わかるか？ 午後からずっと見てないんだよ」

黒人とオレだけが近くにいて彼の話を聞きとれたが、警官はその口調に何かを感じ取り、厳しい目でこちらを見ていた。

「どういう事だ？」彼が追求してきた。

「この人の知り合いだ」トムは首だけをそっちに向けたが、ウィルソンの体に手を当てたままだった。

「彼が犯人の車を知っていると知っている・・・黄色い車だった」

何かの拍子に警官はトムを不審に思った。

「君の車の色は？」

「青いクーペだ」

「ニューヨークから来たんです」とオレが付け加えた。

オレたちの後ろを車で走ってきたヤツがオレたちの言った事を確認すると、警察官は背を向けた。

「さて、もう一度名前を聞かせてくれ。間違えないようにだな・・・」

トムはウィルソンを人形のように抱え上げて事務所に運び、椅子に座らせてから戻ってきた。

「誰かここに来て彼と一緒に座っててくれないか！」彼は周りを仕切るように声をあげた。トムがにらむと、一番近くに立っている二人の男がお互いを見つめ合い、不本意ながら部屋に入っていった。トムは事務所のドアを閉めてこっちに戻ってきた。目は作業台を避けていた。オレの目の前を通り過ぎる時に「出よう」とささやいた。

トムがたくましい腕で人混みをかき分けるのに続いて、オレたちはまだ集まってくる連中の中を突き進んで行った。三十分前にかすかな望みをかけて呼ばれた医者が鞆を片手に急いで入ってくるのが通りすがりに見えた。

トムはカーブを越えるまではゆっくりと運転していたが、アクセルを強く踏み込んでクーペは夜の中を疾走していった。しばらくすると、低いしゃがれたすすり泣きが聞こえてきて、彼の顔に涙があふれているのが見えた。

「あの卑怯者め！」彼は泣き叫んだ。

「あいつは車を止めさえもしなかったんだ」

ブキャナン邸が、暗いざわめきのある木々の間から、不意にオレたちの前に姿を現し

た。トムは玄関の脇に車を止め、蔦の葉の間から二つの窓の灯りが華やかに漏れている二階を見上げた。

「デイジーが家にいる」と彼が言った。オレたちが車から降りると、トムはオレを見て少し顔をしかめた。

「ウェストエッグで降ろすべきだったな、ニック。今夜は何のもてなしもできんよ」

彼の声音がさっきとは変わり、落ち着いてきっぱりとした口調だった。オレたちが月明かりの中、砂利を横切って玄関まで歩いていく間に、彼はテキパキと段取りを説明した。

「君が帰れるようにタクシーを呼ぶから、待っている間に台所に行って、ジョーダンと一緒に夕食をとるように頼んでくれ。もし何か食べたいんだったらだが」

彼はドアを開けた。

「入りたまえ」

「いや、いいんだ。タクシーを呼んでくれるだけで十分だよ。外で待ってるから」

ジョーダンがオレの腕に手を置いた。

「ニック、中に入らないの？」

「いや、やめとく」

オレは少し気分が悪くて一人になりたかった。でもジョーダンは少しためらっていた。「まだ九時半よ」と彼女が言った。

もし家の中に入るとしたら、オレは大マヌケだ。この一日でみんなに飽き飽きしていたんだ。もう十分だ。その中にはジョーダンも入っていた。彼女はオレの表情に何かを感じとったんだろう。不意に背中を向けて玄関の階段を駆け上がり、家の中に入ってしまった。オレは頭を抱えてしばらく座っていると、家の中で電話の音がして、執事がタクシーを呼ぶ声が聞こえてきた。それから門のそばで待つつもりで、家から離れた車道をゆっくりと歩き出した。

二十ヤードも歩かないうちにオレの名前が呼ばれて、ギャッツビーが二つの茂みの間から小道に飛び出してきた。

その時オレは妙な気持ちで沈んでいたに違いない。月の下で場違いに輝く彼のピンクのスーツ以外には何も目に入らなくなったんだから。

「何してるんだい？」オレは尋ねた。

「ここに立っているだけだよ、君」

何か卑劣なことを企んでるのかと思った。たとえば強盗に入るみたいな。彼の後ろの茂みの陰に「ウルフシェイムの仲間」の悪党面した面々が隠れていても驚かなかったね。

「途中で何か変わったことは見かけなかった？」少し間を開けて彼が尋ねた。

「見たさ」

彼はためらった。

「彼女、死んだのかい？」

「そうさ」

「僕もそう思った。デイジーにもそう言ったんです。ショックは一度に来た方がいいです

よね。彼女はよく耐えてました」

彼はデイジーの反応が唯一の問題であるかのように話していた。

「脇道を通してウェストエッグに着いたんです。車を車庫に置いてきました。誰にも見られていないと思いますが、確信はありません」

コイツのことが虫唾が走るほど嫌いになっていたので、間違っていると言う気にもならなかった。

「あの女性は誰ですか？」彼が尋ねた。

「ウィルソンさ。夫が自動車修理店(ガレージ)を経営してる。一体、何でまたこんなことになったんだい？」

「うーん、ハンドルを取ろうとしたんだけど・・・」彼が言い淀んで、不意に本当のことがわかった。

「デイジーが運転してたの？」

「そうなんだ」彼はしばらくしてから言った。

「もちろん僕が運転していたって言いますよ。だって、ニューヨークを出発したとき、彼女はひどく緊張していて、落ち着くために自分で運転したいって言ったんです・・・そして、ちょうど対抗車とすれ違った時に、この女性が僕たちに向かって駆け寄ってきたんです。あっという間の出来事でした。彼女は僕たちを誰かと間違えて、何か話したいと思ったみたいです。それで・・・最初、デイジーは彼女の方ではなく対向車の方へハンドルをきったのですが、勇気がなくて戻してしまっただけなんです。僕の手がハンドルに触れた瞬間に衝撃が走りました。即死だったと思います」

「体が大きく裂けてたよ」

「そんなこと言わないでくれよ、君」彼は身震いした。

「とにかく・・・デイジーがアクセルを踏んでしまったんです。彼女を止めさせようとしたんですが止まらなかった。だから、僕は非常用ブレーキを引いたんです。彼女は僕の膝に倒れ込んできて、僕はそのまま走り続けた・・・」

「彼女は明日になれば大丈夫ですよ」とやがて彼は言った。

「僕はここで待っていて、彼が今日の午後の不愉快なことで彼女を困らせないかどうか見守っています。彼女は自分の部屋に鍵をかけているし、もし彼がひどいことをしようものなら、電気を消したりつけたりすることになってるんです」

「彼女には手を出さないよ」とオレが言った。

「彼女は眼中に無いはずだし」

「僕は彼を信用してないんだ」

「いつまで待つつもり？」

「必要なら一晩中。とにかくみんなが寝るまで」

別の考えが浮かんできた。もし、トムがデイジーの運転してたことに気づいたら・・・何か関係してることに気づいたかもしれない。何かを見つけるかもしれない。オレは邸宅を見上げてみた。階下には電気が点いてる部屋がいくつかあって、二階のデイジーの部屋からはピンクの光が漏れていた。

「ここで待っていてくれよ」とオレは言った。

「騒ぎがないか見てくるから」

オレは芝生の縁に沿って歩いて戻り、音を立てないように砂利の上を横切り、ベランダの階段をつま先立ちで登った。居間のカーテンは開いていて、部屋には誰もいなかった。三ヶ月前の六月の夜、オレたちが食事をしたポーチを横切ると、食糧室と思われる部屋から小さな四角い光が漏れているのが見えた。ブラインドは下されていたが、窓枠の間に隙間があるのを見つけた。

デイジーとトムが台所のテーブルで向かい合って座っていた。冷えたフライドチキンの皿を挟んでエールが二本出ている。彼はテーブルの向こう側で彼女に向かって熱心に話していて、熱をこめて彼女の手を握っていた。時折、彼女は彼を見上げ、同意してうなずいていた。

二人は幸せではなかったし、二人とも鶏肉にもエールにも手をつけていなかったけど、不幸でもなかった。この様子は紛れもなく自然な親密さを感じられ、誰もが二人が何かを企んでいると言うだろう。

ポーチをつま先で歩いていると、暗い道を手探りで家に向かってくるタクシーの音が聞こえてきた。ギャッツビーは、車道の同じ場所で待っていた。

「大丈夫だった？」と彼は心配そうに尋ねた。

「ああ、静かだったよ」オレはためらった。

「家に帰って寝た方が良くないかい」

彼は首を振った。

「デイジーが寝るまでここにいたいんだ、君。おやすみなさい」

彼はコートのポケットに手を入れたまま、真剣な顔で家の見張りに戻った。まるでオレがいると夜通しの見張りの神聖さが損なわれるとでも言うように。だから月明かりの下に彼を残したまま歩き去った。何も無い場所を懸命に守ろうとしている彼を残して。

第八章

オレは一晩中眠ることができなかった。霧笛が絶え間なく海峡の上でうめき声をあげ、グロテスクな現実と野蛮で恐ろしい夢の間で半病人のように翻弄(ほんろう)され続けた。夜が明ける頃に、タクシーがギャッツビーの車道に入る音が聞こえ、オレはすぐにベッドから飛び起きて服を着始めた。彼に伝えたいことがある、何か教えなければならぬことがあると感じていて、朝になってからでは手遅れだと思っていた。

彼の芝生を横切ると、玄関のドアがまだ開いていて、意気消沈しているのか寝ているのか、とにかく彼がホールのテーブルの上にもたれかかっているのが見えた。

「何も起こらなかったんだ」と弱々しく言った。「待っていたら四時頃、彼女が窓に来て一分ほど立っていて、明かりを消したんだ」

彼の家がこれほど巨大に見えたことはなかった。あの夜、タバコが吸いたくて大部屋を探し回った時ほどに。オレたちはテントのようなカーテンを押しつけ、高くそびえる暗い壁を触りまくって電灯のスイッチを探した・・・一度は、オレが何かにつまづいて幽霊のようなピアノの鍵盤の上に倒れ込んで水音のような音を立てたりもした。いたるところに信じられない量のホコリが積もり、部屋はまるで何日も換気していないかのようにかび臭かった。オレは見慣れないテーブルの上にタバコ入れを見つけて、開けると中には古くなって乾いたタバコが二本入っていた。居間のフランス窓を勢いよく開けて、オレたちは暗闇の中でタバコを吸いながら座っていた。

「もう逃げた方がいい」とオレは言った。

「車で足がつくぞ」

「今行けというのかい、君？」

「アトランティックシティに一週間。それかモントリオールに行くんだ」

彼はそんなことには耳を貸そうとしなかった。デイジーが何をしたいのかが分かるまで彼女の元を去ることができないだろう。まだ最後の希望にしがみついていたんだ。オレは彼を逃すことはできなかった。

彼がダン・コーディといいた青春時代の奇妙な話をしてくれたのはこの夜だった・・・「ジェイ・ギャッツビー」のイメージがトムの断固とした悪意の前にガラスのように粉々に砕け散って、長い間続いていた秘密の大騒ぎが幕を閉じたからこそ、話してくれたんだろう。彼はその時は何でも包み隠さず認めていて、心を開いてくれていたと思う。でも本当に話したかったのはデイジーのことなんだ。

彼女は彼が知った初めての「上流階級の」女の子だった。彼は様々な手を使って素性を隠しながらそのような人々と接触してはきたが、いつもそのような連中とは、見えない有刺鉄線で隔てられているように感じていた。デイジーは興奮するほどずば抜けて魅力的だった。最初はキャンプ・テイラーの他の将校と一緒に彼女の家に行ったが、それから一人でいった。彼はまったく驚いた。そんな美しい家は初めてだったという。それに、その家にはデイジーが住んでいたの、息を呑むほどの迫力があった。デイジーがそこに住んでいることは、彼にとってキャンプでテントを張っているのと同じように、彼女にとってしごく当然のことだった。そこには豊かな神秘が漂っていた。二階の寝室は他の寝室よりもひととき美しく涼しくて、そこの廊下では華やかなロマンスが活発に咲き香っているに違いなかった。それも、ラベンダーの香りに包まれたまま仕舞い込まれて、長い間の眠りのうちにカビ臭くなってしまったロマンスではなく、初々しく呼吸していて、その年に発表された輝くばかりのモーターカーや、花がみずみずしく香る舞踏会のような色気があった。多くの男がすでにデイジーに想いを寄せていることが彼を刺激して、彼の意識の中で彼女の価値がいっそう高まっていった。ロマンスを求める男の存在が家中に感じられ、生き生きとした感情の高まりと反響が空気中に広がっていた。

でも、彼にはデイジーの家にいることが、とてつもない偶然によるものでしかないことがわかっていった。

ジェイ・ギャツビーとしての将来がどれほど輝かしいものになるとしても、当時の彼は過去を持たない無一文の青年に過ぎなかった。いつ何時、彼の肩から隠れ蓑にしている制服のマントがすべり落ちるかもしれなかった。だから彼は機会を有効に使った。手に入るものは何でも貪欲に、そして無節操に手に入れた。最終的には、十月の夜にデイジーを手に入れた。彼女の手に触れる権利すら実際には無かったからこそ、奪い取る手段に出たんだ。

彼は自己嫌悪におちいていたかもしれない。なぜなら、偽りの口実でデイジーを奪ったのだから。幻の数百万ドルを取引したという訳じゃないけど、デイジーにはウソをつけて安心させていたんだ。彼女と同じように上流階級出身で、彼女を養うだけの力がある男だと。実際のところ、彼にはそんな後ろ盾など持ち合わせていなかったのに・・・背後に裕福な家族がいるわけでもなかったし、非人間的な政府の気まぐれで、世界中のどこにだって吹き飛ばされてしまうような可能性があった。

だけど、彼は自分を卑下してはいなかったし、彼が想像していたようにはならなかった。それまで彼は、おそらく奪えるものは全て奪って逃げていくつもりだったんだろう・・・でも、今、自分の方が聖杯を追い求めている立場にあることに気がついた。デイジーが並外れた存在であることは知ってはいたが、「上流階級の」女の子がどれほど並外れた存在であるかは知らなかった。彼女は裕福な邸宅の中へ、豊かで充実した生活の中へ、ギャツビーを残してずっと消えていったのだ。ギャツビーには何も残らなかったし、彼にあるのは彼女と結婚したという気持ち、それだけだった。

二日後に二人が再会したとき、息を切らしていたのはギャツビーの方であり、どこか裏切られたとさえ思っていた。彼女のポーチは、金で買った豪華な星の輝きで満たさ

れており、彼女が振り向くと、長椅子の籐がおしゃれに音を立てた。彼は好奇心旺盛で愛らしい彼女の口元にキスをした。彼女は風邪をひいていたので、声がかれてこれまで以上に魅力的だった。ギャッツビーは、富というものが、いかに若さと神秘性を守り保持するのか、多くの衣装を持つことがいかに新鮮な印象を与えるのか、貧しい人々の汗水たらす苦闘の上にデイジーが安楽に構えて、そこに誇りまで持って、銀のように光り輝いていることまでを痛いほどに感じていた。

「自分が彼女を愛していると知ってどれだけ驚いたか、言葉では言い表せないぐらいだよ、君。しばらくは彼女にふられることを期待していたんだが、彼女はそうしなかった。彼女も僕を愛してくれていたからね。彼女は僕が物知りだと思っていたんだ。境遇が違うんで彼女とは違うことを知っていたから・・・まあ、それが僕だった。自分の野望から大きく外れていきながら、分刻みでズブズブと愛の深みにはまってしまったんだ。そしていつのまにか、気にしなくなっていた。自分が何をしたいのかを彼女に話す時の方がもっと幸せなのに、偉大なことを実際に成し遂げる意味なんてあるだろうか？」

彼が海外に旅立つ前の最後の午後、デイジーを腕に抱きながら長い間黙って座っていた。それは寒い秋の日で、部屋には火があり、彼女の頬が赤くなっていた。時々彼女が動くと、彼は自分の腕の位置を少し変え、一度は彼女の黒く輝く髪にキスをした。次の日に約束された長い別れに備えて深い思い出を刻んでいるかのように、その日の午後、しばらくの間二人は黙っていた。二人が愛を育んだ月日の中で、彼女が彼のコートの肩に静かに唇を寄せたときほど、あるいは彼女が眠ってでもいるかのように、彼が彼女の指先に優しく触れたときほど、二人の距離が縮まったことはなかったし、これほど深く心を通わせたこともなかった。

彼は戦争で並外れた活躍をした。前線に出る前は大尉で、アルゴンヌの戦いの後は少佐に昇進し、師団直属の機関銃隊の指揮をとった。休戦後、彼は必死で帰国しようとしたが、複雑な事情やら誤解やらで、代わりにオックスフォードに送られた。彼は深く悩んだ。デイジーからの手紙にイラただしげな絶望のようなものがあったからだ。彼女には彼が帰って来られない理由がわからなかった。そして外の世界からは圧力を感じていた。彼を見て、そばに彼の存在を感じて、結局のところ、自分が正しいことをしていると安心したかったのだ。

デイジーは若かったし、彼女の人工的な世界は、咲き香る蘭の花の世界であり、楽しくて陽気で洗練された技巧に彩られた世界であり、人生の悲しみやもの思いを新しいメロディにのせてオーケストラがその年の流行りとして奏でてくれる世界だった。一晩中サクスが「ビール・ストリート・ブルース」の絶望的な叫びをあげたかと思うと、百足の金や銀の舞踏靴がキラキラ光る粉を踏みしめた。夜明けのお茶の時間には、いつでもそういう生温い甘美な熱病にときめいている部屋があり、悲しい音色のホルンに吹かれて床に散ったバラの花びらのように、見知らぬ顔があちらこちらを漂っていた。

その薄明の世界の中で、デイジーは社交の季節に合わせてまた動き始めたのだ。

突然、一日に数人の男と数回のデートを重ね、夜明けにはベッドのそばの床に置いて

あるしほみかけた蘭の花にビーズとシフォンのイブニングドレスをかけて浅い眠りにつくようになった。だが、彼女の中で何かが苦しいほどに決断を求めている。今すぐにも自分の人生を形にしたいと願っていた。そしてそれは、愛やお金、争いがたい現実の力など、身近にあったものを使って決めてもらうよりどうしようもなかった。

その力は、春の半ばにトム・ブキャナンの登場で形になった。彼の堂々たる体躯と地位は申し分なかったし、デイジーの虚栄心はくすぐられたのだった。もちろん、ある種の葛藤とある種の安堵があったのだが、その手紙がギャッツビーに届いたのは、彼がまだオックスフォードにいる頃だった。

ロングアイランドの夜が明けたので、オレたちは下の階に下りて残りの窓を全部開けると、薄墨色から金色に変わる光が家中を満たしてくれた。露の向こうに木の影が急に落ちてきて、青い葉の間で鳥の鳴き声が聞こえてきた。空気中にはゆっくりとして心地よい風とも言えない動きがあり、涼しくて気持ちの良い一日を約束してくれていた。

「彼女があの人を一度だって愛したとは思えないんだ」

ギャッツビーは窓から振り向いて、挑みかかる様にオレを見た。

「ね、覚えてるでしょう、君。今日の午後、彼女はとても興奮してた。あの方は彼女を怖がらせるような言い方をしたよね。そしてそのお陰で僕がチャチな詐欺師みたいに見えた。だから、彼女は自分が何を言っているのかほとんどわからなくなったんだ」

彼は憂鬱そうに座った。

「もちろん、彼女はあの人を愛したかもしれないよ。でも、結婚した最初のうちだけで、ほんの少しの間。その頃だって僕をもっと愛していたんだ。そうだろう？」

不意に、彼が不思議なことを言った。

「いずれにしても、本人にしか分からない」

この一件について彼の中に計り知れないほどの激しさが渦巻いていたと思う以外にどうとればいいんだろう？

トムとデイジーがまだ新婚旅行中だった頃、フランスから戻ってきた彼は、陸軍の俸給をはたいてルイビルへと悲しい旅に出かけないわけにはいかなかった。一週間そこに滞在し、十一月の夜の間、二人の足音が響いた通りを歩いてみたり、デイジーの白い車で出かけた人里離れた場所を再び訪れてみたりした。デイジーの家がいつも他の家よりも神秘的できらびやかに見えたように、彼女がいなくなっても、彼にとって街そのものが感傷的な美しさに満ちていた。

もっと真剣に探せば、彼女を見つけられたかもしれないと思いながら、彼は街を去っていった。彼女を置き去りにしたような気がした。今は無一文になり普通客車に乗ると、そこは暑かった。デッキに出て折りたたみ椅子に腰を下ろした。駅は滑るように流れ去り、見慣れない建物の背中が通り過ぎていった。そこから春の野原に出て、わずかな間だけ、黄色い電車と競争になった。それに乗っている人なら色白の魔法と言える彼女の顔を見たことがあるかもしれない。

線路が曲がり、太陽から離れていった。太陽が沈んでいくにつれ、彼女が息を吹き込

み、今は視界から消えゆくようにしている街に、祝福を与えているように見えた。彼は必死に手を伸ばして、彼女がいたからこそ美しかった街の片鱗でも掴もうというのか、空気を掴み取るようにやっきになって腕を伸ばしていた。でも、涙で曇った目には全てがあっという間に過ぎ去り、そこにあった一番初々しく、一番素晴らしいものが永遠に失なわれたことを知った。

オレたちが朝食を終えてポーチに出たのは九時だった。夜の間天気が一変して、秋の気配が漂っていた。ギャッツビーの最後の使用人である庭師が階段の脇までやってきた。

「ギャッツビーさん、今日はプールの水抜きをします。木の葉がいずれ落ちてきますし、それからではいつもパイプが詰まりますから」

「今日はやめてくれ」とギャッツビーが答えた。彼は弁解するようにオレの方を向いた。

「あのね、君、夏の間プールを使ったことは一度も無いんだ」

オレは時計を見て立ち上がった。

「電車が来るまであと十二分」

ニューヨークには行きたくなかった。オレにはまともな仕事をする体力がなかった……でもそれ以上にギャッツビーから離れたくなかった。立ち上がるまでに、その列車に乗り損ね、次のも逃した。

「電話するよ」とやっと言えた。

「そうしてくれよ、君」

「正午に電話する」

オレたちはゆっくりと階段を下りた。

「デイジーも電話してくれると思う」オレがそうだと言うのを期待するかのように、心配そうに見た。

「そうだね」

「じゃあ、さようなら」

オレたちは握手をして別れた。生垣に着く直前に、ふと思い直してオレは振り返った。

「ヤツらは全部腐ってる」オレは芝生の向こうから叫んだ。

「君にはアイツら全部を集めただけの価値がある」

そう言っておいて良かったといつも思ってる。それが彼に向かって言った唯一の褒め言葉だった。オレは最初から最後まで彼を認められなかったのだから。最初、彼は丁寧にならずにいたけど、それから、まるでそんなことはわかってるじゃないかというように、あの晴れやかで理解ある微笑みを浮かべてみせた。彼の豪華なピンクのスーツが白い階段に鮮やかに映え、三ヶ月前に初めて、彼の時代風な屋敷を訪れた時のことを思い出した。芝生と車道は、彼が壊れた人間であると思いついた連中の顔で賑わっていた……そして、彼は壊れることのない夢を内に隠しながら、階段の上に立って、別れの挨拶を告げていた。

彼の手厚いもてなしに感謝した。オレたちはいつも彼に感謝していたんだ……オレ

も含めてみんなも。

「さようなら」とオレは呼びかけた。

「朝食をありがとう、ギャッツビー」

ニューヨークに出て、しばらくの間、途方もない量の株の相場を表にまとめようとしていたら回転椅子の中で寝てしまった。正午前に電話で目が覚めて、額に汗をかきながら起き上がった。ジョーダン・ベイカーからだった。彼女はよくこの時間に電話をかけてきたんだが、彼女がホテルやクラブや個人の家を渡り歩いている、どこにいるかわからず、他の方法ではなかなか連絡がつかなかったからだ。いつもなら、彼女の声は電線の向こうから、まるでゴルフ場の緑の土塊がオフィスの窓から入ってきたような、爽やかで涼しげなものだったが、今朝のは辛辣(しんらつ)で乾いた声だった。

「デイジーの家を出てきたの」彼女が言った。

「今ヘンプステッドにいて午後からサウサンプトンに行くの」

デイジーの家を出たのは賢い選択だったのかもしれないが、オレはイラついてしまい、次の発言で固まってしまった。

「昨夜は優しくしてくれなかったわね」

「そんな場合じゃなかっただろ？」

しばらく沈黙が続いた。それから・・・

「でも・・・会いたいの」

「オレも会いたい」

「もしわたしがサウサンプトンに行かずに今日の午後にニューヨークに行くと言ったら？」

「ううん、午後は無理」

「わかったわ」

「今日の午後は無理なんだ。いろいろと・・・」

こんな調子でしばらく話すうちに、電話がぶつつり切れた。どっちがカチャッと音を立てて電話を切ったかは知らないが、オレは気にしてなかった。あの日、テーブルを挟んで彼女と話さなければ、この世で二度と話せなくなったとしても、オレには無理だった。

数分後にギャッツビーの家に電話したが、話し中だった。四回電話をかけてみたが、最終的にはイライラした電話交換手が、デトロイトからの長距離電話のため、話し中のままになっていると教えてくれた。オレは時刻表を取り出して、三時五十分の列車に小さな丸をつけた。それから椅子にもたれて考えてみた。ちょうど正午だった。

この日の朝、電車の中で灰の山を通り過ぎた時、わざと車室の反対側の席に移った。そこには一日中、野次馬の人ばかりができていて、ワンパク坊主たちが土の中の黒い塊を探していたり、お喋りな男が何度も何度も何が起こったかを話しているうちに、自分でも本当じゃないような気になって、話はもはや真実を伝えなくなり、マートル・ウィルソンの悲惨な事故は忘れられていくに違いないと想像していた。さて、前の晩にオレたちが自動車修理店(ガレージ)を出た後に、そこで何があったのか、少し戻って話したい

と思う。

彼らは妹のキャサリンを見つけるのに苦労したようだ。その夜、彼女は自分の禁酒のルールを破ったに違いない。到着したときには、彼女はすっかり酔っ払っていて、救急車がすでにフラッシングに向かっていることが理解できないでいた。彼らがそれを納得させると、彼女はそれこそが事件の許しがたい核心であるかのように気絶した。親切心からか好奇心からか、誰かが彼女を乗せて姉の遺体の後を追って車を走らせた。

ジョージ・ウィルソンが事務所の中のソファで体を前後に揺らしている間、真夜中を遠く過ぎた頃まで、自動車修理店(ガレージ)の前にはひっきりなしにたくさんの人々が押し寄せていた。しばらくは事務所のドアが開いていたので、修理店に入ってきた人たちの誰もが、思わずドアの中をのぞきこんだ。最後に誰かがこれはひどいと言ってドアを閉めてしまった。ミケリスと他の数人の男たちが彼と一緒にいた・・・最初は四、五人だったが、後には二、三人になっていた。その後、ミケリスは最後に残った見知らぬ男に十五分ほど待ってもらうように頼んで、その間に自分は家にとって返してコーヒーをポットに入れて戻ってきた。それから、彼は夜明けまでウィルソンと二人きりでそこに留まった。

三時頃になると、ウィルソンの内容を得なかった叫びが変わった。彼は落ち着いてきて、黄色い車のことを話し出した。その車が誰のものかを突き止める方法があると言う。そしてここ数ヶ月ずっと黙ってきた、彼の妻が顔にアザを作って鼻を腫らしてニューヨークから帰ってきたことをもらした。

しかし、そう言いながらもウィルソンはたじろいで、またもやうめき声をあげて「おお、神よ！」と泣き出してしまった。ミケリスは不器用にも彼の気をそらそうとしてやった。

「結婚してどのくらいになるんだい？　おい、ジョージ、ちょっとじっとして、オレの質問に答えなよ。結婚してどのくらいになるんだい？」

「十二年だ」

「子供は？　ジョージ、じっとしてて。聞いてるんだ。子供はいたのかい？」

硬い茶色のコガネムシが、電灯の鈍い光に向かってゴツゴツと音を立てていた。外の道路をつんざくように走る車の音を聞いたたびに、ミケリスには数時間前にひき逃げした車のように聞こえてならなかった。死体が横たわっていた作業台が生々しく汚れていたもので、ミケリスは修理店の中に入るのを嫌がって、事務所の中を気まづく動き回っていた。朝までには事務所のどこに何があるかをすっかり覚えてしまった。そして時折、ウィルソンの横に座って彼を黙らせようとしていた。

「ジョージ、たまに行く教会はあるかい？　長い間行ってなくてもさ？　オレが教会に電話して神父さんに来てもらって、お前さんの話を聞いてもらおうか？」

「どこの教会にも入ってないよ」

「こんな時のために、教会に入ってなきゃダメだろ。教会に行ったことくらいあるだろう。なあ、教会で結婚したんだろ？　ジョージ、聞いてくれ。教会で結婚したんだろ？」

「昔の話さ」

答えようとして、体を揺するリズムが乱れた。一瞬、彼は黙っていた。それから、半分わかってるような、半分取り乱しているような、すっかり見慣れてしまった表情が彼の薄い色の目に戻ってきた。

「その引き出しの中を見てくれよ」と彼は机を指差しながら言った。

「どの引き出しかい？」

「その引き出しさ。それだよ」

ミケリスは手近な引き出しを開けた。革紐と銀モールを編み込んだ小さな贅沢な犬の散歩紐の他は、何も入っていなかった。どうやら新品のようだった。

「これか？」彼はそれをかざして尋ねた。

ウィルソンはじっと見てうなずいた。

「昨日の午後に見つけたんだ。カミさんがそれについて言い訳したんだが、何かおかしいと思ったんだ」

「奥さんが買ったのか？」

「それをティッシュペーパーにくるんで自分のタンスの上に置いていたんだ」

ミケリスは何もおかしいとは思わなかったのだから、奥さんが犬の散歩紐を買いそうな理由をいろいろあげてみたが、おそらくウィルソンは同じような説明をマートルから聞いてたんだろう。また小声で「ああ、神よ！」と言い始めたんだから。

彼の慰め役は言おうとした言葉を飲み込んでしまった。

「そしてあの野郎がカミさんを殺したんだ」ウィルソンが言った。突然、口がポカンと開いた。

「誰がやったんだって？」

「それを見つける方法があるぞ」

「お前さんはすっかりまいってるんだよ、ジョージ」友人が言った。

「すっかりまいっちゃって自分が何を言ってるのかわからないんだよ。朝まで静かに座ってた方がいいよ」

「アイツがカミさんを殺したんだ」

「あれは事故だったんだよ、ジョージ」

ウィルソンは首を振った。目を細めて口をわずかに開き、小バカにしたように「フン！」と言った。

「わかってるさ」彼はしっかりと口調で言った。

「オレは信頼に足る男で誰の害にもならないが、ことを知る段になりゃわかるんだよ。あの車に乗ってたのは男だった。カミさんは話をしようとして走り出たんだが、ひいて逃げちゃったんだよ」

ミケリスもこれを見ていたが、さほど意味があるとは思っていなかった。むしろウィルソン夫人が特定の車を止めようとしたのではなく、夫から逃げたと思っていた。

「奥さんがそんなことをするはずないだろう？」

「あれは食えないヤツなんだ」とウィルソンが言った。まるでそれで質問に答えたかのよ

うだった。

「あーあーあーあー」そううめきながらまた体を揺さぶりを始め、ミケリスは散歩紐を手の中で揉みながら立っていた。

「オレがお前さんのために電話できるような友達はいないのかい、ジョージ？」

それはむなしい望みだった。ウィルソンに友人などいないことがほぼわかっていた。奥さんだって満足させられないウィルソンだから。少ししてから、部屋の中が明るくなってきたのでミケリスは喜んだ。夜明けが近くなり、窓に青みがさしこんで、五時頃には電灯を消してもいいほど、外は青く澄んでいた。

ウィルソンはどんよりした目を灰山の方に向けた。そこには小さな灰色の雲が幻想的な形をとりながら、かすかな夜明けの風に乗ってあちこちを飛び回っていた。

「オレはカミさんと話したよ」彼は長い沈黙の後につぶやいた。「こう言ってやった。オレを欺(あざむ)くことはできるが、神を欺(あざむ)くことはできんぞと。あれを窓の所に連れて行って・・・」辛そうに立ち上がり、後ろの窓に顔を押し付けて寄りかかった。「・・・そしてこう言ってやったんだ。『神はお前が何をしてきたか、お前がしたことすべてをご存知だ。オレを騙(だま)すことはできても、神を騙(だま)すことはできんぞ』とな」

後ろに立っていたミケリスは、夜明けとともにはっきりしてきた、色があせて巨大なT・J・エクルバーグ先生の目を、彼が見ているのに気がついて愕然とした。

「神はすべてをご存知だ」ウィルソンは繰り返した。

「あれはただの広告だよ」ミケリスはなだめた。何かが外を見ることをためらわせて、部屋の中に視線を戻した。でも、ウィルソンは窓ガラスに顔を近づけて長い間そこに立ちつくし、夜明けに向かってうなずいていた。

六時になるとミケリスは疲れ果てていて、外に停車する車の音に感謝していた。それは前夜の見張り役の一人で、戻ってくると約束していたのだった。そこで彼は三人分の朝食を作り、新しく来た男と一緒に食べた。ウィルソンが静かになったので、ミケリスは家に戻って仮眠した。四時間後に目が覚めて修理店に急いで戻ってみると、ウィルソンはいなかった。

ウィルソンの動きは・・・ずっと徒歩だったのだが・・・後で調べてみると、まずポート・ルーズベルトにたどり着き、その後、ギャズ・ヒルに行ったことが判明した。そこでサンドイッチを買ったが食わず、後でコーヒーを買った。ポート・ルーズベルトに着いたのは正午になってからだったので、その頃には疲れてゆっくりと歩いていたに違いない。ここまでのところ、彼の行程を割り出すのは難しいことではなかった。「狂ったような」男を目撃した少年たちや、車を運転している時、道の脇から彼ににらまれた人もいた。それから三時間、彼の消息はわからなくなった。彼がミケリスに「見つける方法がある」と言ったことから、警察は、その間、黄色い車を探してその辺の自動車修理店を聞いて回っていたのではないかと推測した。しかし、彼を見た修理店の男が名乗り出ることはなかった。彼には探しているものを見つける、もっと簡単で確かな方法があったんだろう。二時半になると、彼はウェストエッグにいて、ギャツビーの家への道を

誰かに尋ねている。その頃にはギャッツビーの名前を知っていたんだ。

二時になってギャッツビーは水着を着て、執事に、誰かが電話をかけてきたら、プールにいる彼まで連絡するようにと伝えておいた。夏の間、ゲストを楽しませてくれた空気圧式のマットレスを取りに車庫に立ち寄り、運転手に空気を入れるのを手伝ってもらった。それから彼は、オープンカーはどんな状況でも外に持ち出しはけないと指示を与えた。それはおかしなことだった。向かって右側の前車輪の泥よけは修理する必要があるんだから。

ギャッツビーはマットレスをかついでプールに向かって歩き出した。一度止まってかつぎなおし、運転手が助けが必要かと尋ねたが、首を振ると、葉の黄ばみ始めた木々の間に消えていった。

電話は一件もかかってこなかったが、執事は昼寝もせずに四時まで待っていた。もしかかってきたとしても、電話を受ける人はとうになくなっていたのだけれど。ギャッツビー自身は電話がかかってくるとは思ってなかったんじゃないかと思う。それどころか気にもしていなかったんじゃないだろうか。

もしそうなら、長い間なじんできた温かい世界をすっかり無くしてしまったと考えていたに違いない。一つの夢の実現のために高い代価を払い、あまりにも長く生きすぎてしまったと。目に映る木の葉も不気味なら、葉陰から見える空もまったく違って見えたのではないか。バラの花もグロテスクで、奇妙な芝生に注ぐ日差しも生々しく思えて、震えたんじゃないだろうか。現実らしからぬ物質を備えた新しい世界、そこでは空気のように夢を呼吸しながら哀れな幽霊どもが漂っている・・・形の定まらない木々の間から彼に向かって飛んでくる、灰色の妖怪のように。

運転手は、ウルフシェイムの仲間の一人だったが、銃声を聞いたものの、何も考えなかったというのが後での釈明だった。オレは駅からギャッツビーの家に直接車で向かった。慌てて正面の階段を駆け上るオレの足音に、みんなが初めて、何かが起こったことに気がついた。でも、彼らはその時にはわかったんだと思う。とにかくオレはそう思う。何も言わずに、運転手、執事、庭師とオレの四人がプールへと急いだんだ。

新たな水が、反対側の排水口めがけて流れていたの、ほとんど目に見えないほどのかすかな水の動きがあった。人を載せたマットレスは、波とは言えないほどの小さな波紋を描きながら、プールの上を不規則に漂っていた。表面を波立たせることもできないほどの小さな風が、意思を持たない重荷を乗せてあてもなく進むマットレスの進路を乱すには十分だった。一塊の木の葉が触れてコンパスの足となり、水中の薄赤い円をなぞって、マットレスをゆっくりと回転させていった。

ギャッツビーを抱えてみんなで家に向かって歩き出した後で、少し離れた草むらから、庭師がウィルソンの死体を発見した。これで惨劇(ホロコースト)が終わった。

第九章

あれから二年経った今、思い出せることと言えば、当日、その晩、そしてその翌日と、警察やカメラマンや新聞社の連中がひっきりなしに出動訓練でもしてるみたいにギャッツビーの家の玄関を出たり入ったりしてたことだけだ。正面にはロープが張りめぐらされて、脇には警官が立って野次馬を寄せ付けないようにしてたけど、ワンパク坊主たちはすぐにオレの庭から入れることに気がついて、プールの周りにはいつも数人の男の子たちが口をポカンと開けたままむろしてたっけ。たぶん刑事だろう、押しの強そうな男が、その日の午後にウイルソンの遺体にかがみ込みながら「狂った男」とつぶやいて、その声が重々しく響いて聞こえたんで、この言葉が翌日の朝刊を彩ることになった。

記事のほとんどは悪夢のようだった・・・グロテスクで、その場限りで、どぎつくて、真実を語っていなかった。ミケリスの証言で、ウイルソンが妻を疑っていたことが明るみに出たんで、この話は大衆が好きそうなゴシップに発展するんだと思ってた。だけど、何だって知ってるはずのキャサリンが何も表ざたにはしなかったんだ。それだけじゃなくて、彼女は驚くほどの性格の強さをみせてくれた。描いた眉の下の目に決意をみなぎらせて、検屍官に向かって、姉はギャッツビーと会ったことは一度もない、夫とは円満で、浮気などしたことはないと言ったんだぜ。そう言うことで自分を納得させたようで、そんなことを疑われるのが一番耐えられないというようにハンカチを持って泣き崩れた。これで、この事件はウイルソンが「悲嘆にくれて発狂した」ものと結論づけられ、この表現に全てが集約された。これがこの事件の顛末(てんまつ)だった。

でも、こんなことは核心から外れてたし、大事なことでもなかった。気がついてみたら、ギャッツビーの味方はオレだけだったんだ。ウエストエッグ村に電話で惨事を伝えてからというもの、ギャッツビーについてのあらゆる推測や、あらゆる実質的な質問がオレに向けられるようになってしまった。最初は驚き戸惑うばかりだった。でも、家に寝かされたまま、動きもしなければ、呼吸もせず、喋りもしないギャッツビーと何時間も何時間も一緒に過ごしていくうちに、誰も関心がないんなら、ここの責任者はオレだという気がしてきたんだ。オレの言う「関心」とは、誰だって漠然とした権利として持っている、人生の最期に他人から寄せられる同情とか共感のことだよ。

彼を見つけてから三十分後に、反射的にためらうことなくデイジーに電話をかけた。でも、彼女とトムはその日の午後早くに大荷物を抱えて出かけてしまっていたんだ。

「どこに行ったか聞いてないのかい？」

「いいえ」

「いつ帰ってくるか言ってた？」

「聞いておりません」

「彼らの居場所に心当たりは？ どうやって連絡を取ればいいんだい？」

「存じませんので、申し上げられません」

誰かを呼んであげたかった。彼が横たわっている部屋に行って、安心させてやりたかった。

「誰か呼んでくるよ、ギャッツビー。心配しないでくれ。信じてくれよ、誰かを連れてくるからさ……」

マイヤー・ウルフシェイムの名前は電話帳には載ってなかった。執事がブロードウェイの住所を教えてくれたんで番号案内に電話した。でも、電話番号がわかった時には五時をとくに回っていたんで、電話には誰も出なかった。

「もう一度電話してくれないか？」

「もう三回かけました」

「とても大事な用なんだ」

「申し訳ありませんが、残念ながら誰もいません」

オレは客間に戻った。一瞬、弔問客があったのかと思ったが、警察関係者でにぎわっているだけだった。でも、彼らが冷たい目つきでシートをめくってギャッツビーを見た時、ギャッツビーの哀願するような声が頭の中にこだました。

「ねえ、君、お願いだから誰かを連れてきてよ。もっとがんばってくれよ。一人じゃ耐えられないんだ」

誰かが質問を始めたが、オレはその場を振り切って二階に上がると、急いで机の鍵のかかっている場所を調べだした……彼は自分の両親が死んだとははっきり言ってなかった。でも、そこからは何も見つからなかったんだ……ただダン・コーディの写真だけが、忘れ去られた暴力の置きみやげとしてじっと見下ろしていた。

翌朝、ウルフシェイム宛の手紙を執事に持たせてニューヨークにやった。そこには、いろいろ教えて欲しいことと、次の列車で来るように書いてあった。でも、書き終えた後、その頼みがムダなように思えた。新聞を見れば、彼はやって来ただろうし、気持ちさえあれば、デイジーだって昼前には電報をくれたはずだ。だけど電報も無ければウルフシェイムの来訪も無かった。ただ警察やカメラマン、新聞社の連中が増えるだけで、訪ねてくるヤツなんて一人もいなかった。執事がウルフシェイムの返事を持ち帰った時にはすっかり逆上して、こんなバカなヤツらを敵に回してもギャッツビーと一緒に戦うぞという反抗的な気持ちになった。

親愛なるキャラウェイ様

この度の件では、生涯における最大の衝撃を受けており、とても事実とは思えません。あの男が犯した狂気のさたには、つくづく考えさせられるものがあります。残念ながら、非常に重要な用件を抱えており、今はご要望にお応えすることができません。その後、何かわたしにできることがありましたら、エドガーに手紙を持たせてください。このような知らせを受けてすっかり動転してしまい、打ちのめされてしまいました。

敬具

マイヤー・ウルフシェイム

この後に急いで書き足されてあった。

葬儀などについてお知らせください。家族については存じません。

その日の午後に電話が鳴って、電話交換手がシカゴからの長距離電話だと言ったので、やっとデイジーが電話をくれたんだと思った。でも男の声が、か細く遠くから聞こえてきただけだった。

「スラグルだ・・・」

「はい？」名前は聞き慣れないものだった。

「やべーことばかりだな？ オレの電報は届いたか？」

「届いてません」

「若いパークのヤツがトラブった」

彼は早口に言った。

「証券屋の店先で証券を渡してる時に、捕まっちゃってよ。五分前にニューヨークから知らせが回ってきて、番号がバレた。お前、何か知ってるか？ こんな田舎町では情報はつかめんな・・・」

「もしもし！」オレは息を切らして口を挟んだ。「聞いてくださいよ。ギャッツビーさんじゃないんですって。ギャッツビーさんは死んだんだ」

電話の向こうで長い沈黙があった。そして絶叫があがった・・・それから、ガチャっといって電話が切れた。

ヘンリー・C・ギャッツと署名された電報がミネソタ州のある街から届いたのは三日目のことだったと思う。そこには、差出人がすぐに出発することと、到着まで葬儀を延期して欲しい旨だけが書かれてあった。

それはギャッツビーの父親だった。生真面目な老人で、すっかり気弱になりオロオロしていて、九月でまだ暑いというのに長い安物のコートを着ていた。目は興奮してうるみ、彼の手からバッグと傘を受け取ると、白いものの混じった薄いアゴ髭(ひげ)をひっきりなしに引っ張り始めるので、コートを脱がせるのに苦労した。今にも倒れそうなんでもサロンに連れて行き、何か食べるものを用意させてる間、そこに座らせておいた。でも何も食べようとはせず、震える手からコップの牛乳がこぼれた。

「シカゴの新聞を見たんです」彼が言った。

「シカゴの新聞に全部載ってやしたんで。それですぐに出発したんです」

「どうやって連絡を取ればいいのかわからなかったものですか」

彼の目は何も見ていないのに、それでいて部屋中を見渡している。

「狂ったヤツじゃった」と彼は言った。

「狂ってたとしか言いようありませんやね」

「コーヒーをお飲みになりますか？」と聞いてみた。

「結構です。もう大丈夫でさあ。ええと、お名前は？」

「キャラウェイです」

「ええ、もう大丈夫でさあ。ジミーはどこにおやりになすったんで？」

息子が身を横たえている居間に連れて行き、二人きりにしておいた。ワンパク坊主たちが階段を登ってきて玄関をのぞき込んでたんで、誰が来たかを教えてやると、しぶしぶながら出ていった。

しばらくして、ギャッツ氏がドアを開けて出てきた。口を開けたまま、顔を少し紅潮させて、目からはハラハラと涙をこぼしていた。彼は死がやって来たとしてもさほど驚かない年齢に達していた。今、初めて周りを見渡してみても、玄関の天井の高さとその豪華さ、部屋の奥に見えるさらに立派な部屋の数々が目に入った時、悲しみに打ち砕かれつつも畏敬と誇りの念が混じっていた。二階の寝室に案内し、彼がコートとベストを脱いでいる間、すべての手配は彼が来るまで延期されていることを伝えてやった。

「どうされたいのか、わかりませんでしたので、ギャッツビーさん……」

「ギャッツです」

「ああ、ギャッツさん。ご遺体は西部に運んだ方がいいんじゃないですか」

彼は首を振った。

「ジミーはいつも東部の方を好いておりやしたんで。立派になれたのも東部でして。お宅さんはせがれのお友達でしたか？ ええと……」

「親しい友人でした」

「息子にやあ大きな未来がありやした。まだ若いはずいぶん頭のいい子でなあ」

彼がこれだ、というように頭を触ったので、オレはうなずいた。

「生きておりやしたら立派もんになったろうにのう。ジェームズ・J・ヒル(アメリカの大鉄道業者)みたあな、お国に役立つ男になあ」

「そうでしょうね」オレは居心地悪く思いながら相づちをうった。

彼はベッドの上の刺繍入りのカバーをまさぐってなんとかひっぱがし、ぎこちなく横たわったかと思うと、あっという間に寝入ってしまった。

その夜、明らかにおびえているヤツが電話をかけてきて、名前を名乗る前にオレが誰なのか知りたいと言ってきた。

「キャラウェイです」と答えてやった。

「ああ……」彼は安心したようだった。

「クリプスプリンガーです」

これでギャッツビーの墓にもう一人、参列者として友人を連れて行けそうで、オレの方もホッとした。新聞に記事を書けると野次馬に囲まれるだけなんで、何件か個人的に

電話をかけていた。でも来れそうなヤツはなかなか見つからなかった。

「葬儀は明日なんだ」と言った。

「三時にここの家でやるから、知ってる人に伝えてくれよ」

「もちろん、そうさせてもらいます」彼は早口で言った。

「誰かに会うってことはなさそうだけど、もし会ったらですが」

彼の口調は怪しかった。

「もちろん君は来るんだよね？」

「そうですね、できるだけそうしてはみます。実はお電話したのは・・・」

「ちょっと待ってくれよ」オレは割り込んだ。

「来るって言うてくれないのかい？」

「ええと、実は・・・今のところ、グリニッジの連中の所に泊まってるんです。明日、一緒に来てほしいって頼まれちゃって。どうやらピクニックか何かするらしいんです。もちろん、できるだけ抜け出すつもりですけど」

オレは思わず「はあ？」と言ってしまい、それが聞こえたんだろう、彼はおずおずと続けた。

「電話したのは、そこに置いてきた靴のことでなんです。執事に送ってもらうのは面倒でしょうか。テニスシューズなんです、それが無いとどうしようもないんです。住所は今お世話になってる B.F.・・・」

受話器を置いてしまったんで、名前の続きは聞き取れなかった。

それから、ギャッツビーに対してなんだか恥ずかしいような気がした・・・電話をかけたある紳士は、彼のことが自業自得だとほのめかした。でも、それはオレのせいなんだ。ギャッツビーが振る舞う酒の力を借りて、ギャッツビーをひどくこき下ろしてたヤツなんで、電話する前からわかっておくべきだよな。

葬儀の朝、マイヤー・ウルフシェイムに会いにニューヨークに出かけて行った。他の方法じゃあとてもじゃないがラチがあかなかった。「ザ・スワスティカ株式会社」と書かれた扉を、エレベーターの少年が言った通りに押し入ると、最初、そこには誰もいないように見えた。ダメもとで何度か「すみません」と叫んでいると、仕切りの向こうで口論が起こり、今度は可愛いユダヤ人の女の子がドアの向こうから現れて、黒い敵意に満ちた目をオレに向けた。

「誰もいないんですよ」と彼女が言った。

「ウルフシェイムさんはシカゴに行っています」

最初の部分は明らかにウソだった。誰かが中で「ロザリオの唄」を調子外れの口笛で吹き始めていたんだ。

「キャラウェイが来たと伝えてください」

「いくらなんでもシカゴからは連れてこれませんよね？」

その時、扉の向こうから「ステラ！」と呼ぶ、明らかにウルフシェイムの声が出た。

「机の上に名前を書いて残しておいてください」と彼女は素早く言った。

「彼が戻ったら渡します」

「でも、そこにいるのはわかってるんです」

彼女は一步踏み出すと、憤慨して両手で腰をさすり始めた。

「あなたたち若い連中は、いつでもここに来ると自分のやり方を押し通せると思ってるんですよね」と怒ってみせた。

「もううんざりしてるんです。あの人がシカゴにいると言ったらシカゴにいます」

オレはギャツビーの名前を出してみた。

「あら！」彼女はもう一度オレを見返した。

「あなたのお名前は？」

彼女は消えていった。次の瞬間、マイヤー・ウルフシェイムが両腕を広げて、厳肅な面持ちで戸口に立っていた。オレを執務室へ招き入れ、今は皆にとって辛い時だと神妙な声で言いながら、葉巻をすすめた。

「彼に初めて会った頃を思い出すわい」と彼は切り出した。

「陸軍を除隊したばかりの若い少佐で、軍服は戦争でもらった勲章で覆われてましてな。全くの無一文で、普段着を買うこともままならぬので、軍服を着たままでいるしかなかったんじゃ。初めて会ったのは、あれが四十三番街のワインブレナーのビリヤード場に来て、仕事を頼みに来た時じゃったよ。何日も食べてないと言うんで、ワシと一緒に昼食を食べようと誘ったら、三十分で四ドル分以上たいらげましたな」

「あなたが彼を仕事に誘ったんですか？」と聞いてみた。

「誘っただって！ ワシがアイツを作ったんだよ」

「ああ」

「ワシは何もないところからあれを育て上げたんじゃ。文字通りどん底からな。外見は立派で紳士的な若者だとすぐに分かった。オグスフォード出だと言ってくれた時には、役に立つ男とみたね。在郷軍人会に入れてみると、かなり上の地位にまで行ったよ。すぐにワシの依頼人の頼みを受けてオールバニーで仕事をしてくれたりもした。ワシたちは何をやるにも太い絆(きずな)でつながって・・・」彼は太くて丸っこい指を二本立てて「いつも一緒だった」と言った。

この絆(きずな)には一九一九年のワールドシリーズの買収取引も含まれているんだろうかと思った。

「今、彼は亡くなりました」

オレはしばらくしてから言った。

「あなたが彼の一番の親友なんですから、今日の午後の葬儀には当然いらっしゃいますよね」

「行きたいとは思いますが」

「それならいらしてください」

彼の鼻毛が少し震えて、首を振っているうちに、目に涙がたまってきた。

「ワシにはできん・・・巻き込まれてはならぬのじゃ」と彼は言った。

「巻き込まれることなんて何もありませんよ。全部終わったんですから」

「誰かが殺された時は、巻き込まれんようにしとるんじゃよ。若い頃は違ったが・・・友人が死んでも最後までつき合ってた。感傷的だと思われるかもしれんが、ワシは、本当に最後の最後までつき合ってたんじゃ」

これで彼が何らかの理由で来ないと決めているのがわかったんで、オレは立ち上がった。

「あんたは大学出かい？」と突然尋ねてきた。

一瞬、例の「ゴネグション(仕事のコネ)」をほのめかそうとしているのかと思ったが、ただうなずくだけで握手した。

「死んだ後ではなく、生きている間に友情を示して、死んでからは知らん顔をするようにしようじゃないか」と彼は言った。

「その後は何もかも放っておくのがワシの流儀じゃよ」

彼の事務所を出ると空は暗くなり、霧雨の中ウエストエッグに戻ってきた。着替えを済ませて隣の部屋に行くと、ギャッツ氏が興奮した面持ちで大広間を歩いているのが見えた。息子や息子の持ち物へのプライドはますますふくらんでいたが、今度はオレに見せるものがあつたんだ。

「ジミーがこの写真を送ってくれたんでさあ」彼は震える指で財布を取り出した。

「これを見てやってください」

それはこの家の写真だった。角はひび割れて、多くの手で触られて汚れていた。熱心に細かいところまで語ってきかせてくれた。

「見てやってください」と言いながらオレの目の中に驚きを探そうとする。何度もそれを人に見せてきたんで、今では実際の家よりもリアルに感じていたんだろう。

「ジミーが送ってくれたんでさあ。とってもきれいな写真だと思っております。よく撮れてまさあな」

「よく撮れてると思いますよ。最近彼に会われたんですか？」

「二年前に会いに来てくれまして、今住んでる家を買ってくれたんです。もちろん、彼が家出した時にはワシらは一文無しでしたが、今になってみればなんで出ていったかがわかるっちゃうもんです。自分に大きな未来があることを知ってたんでしょなあ。成功してからは、そりゃあよくしてくれました」

写真をしまいたくないようで、オレの目の前でもう一分ほどじっと見つめていた。そして、それを財布に戻すと、今度はポケットからボロボロの本を取り出した。「ホップアロング・キャシディ」と呼ばれる本だ。

「これを見てやってください。せがれが子供の頃持っていた本でさあ。これを見ればわかりまさあ」

その裏表紙を開き、オレによく見せようとまわしてみせた。巻末の見返しには「時間割」という大文字と、一九〇六年九月十二日という日付が書かれてあった。そしてその下には・・・

午前六時

起床

六時十五分から六時半

ダンベル運動と堀の乗り越え演習

七時十五分から八時十五分
電気などの勉強

八時半から四時半
仕事

四時半から五時
野球とその他のスポーツ

五時から六時
雄弁さ、身のこなし方、それらを身につけるための訓練

七時から九時
生活のための創意工夫

誓い

シャフターズや [判読不能] で時間を無駄にしない
禁煙（嗜みタバコも含む）
隔日入浴
週に一冊の良書や雑誌を読む
週一回五ドル（それを線で消す）三ドルの貯金
親孝行

「ワシは偶然この本を見つけたんでさあ」と老人は言った。

「ようわかっていただけますでしょうか？」

「よくわかります」

「ジミーは必ず成功すると思うとりました。ジミーはいつも誓いや何やらを執り取りましたよ。心を磨くのに何をやりようたかがわかりますでしょうか？ いつもえらい子でしたよ。一度はワシがブタのように食べるいうんでなぐってやったがのう」

彼は一つ一つの項目を声に出して読んでオレを熱心に見つめ、なかなか本をしまいたくないようだった。オレがリストを書き写すことを望んでたんだらう。

三時少し前に、ルーテル派の牧師がフラッシングからやってきた。他の車も来るんじゃないかと思ってなんとなく窓の外を見ていた。ギャッツビーの父親もそうだった。時間が経ち、使用人たちが入ってきて人待ち顔にホールで待っていると、彼の目は心配そうにまばたきを始め、困った様子で雨だからと言ったりした。牧師が何度か時計をちらりと見ていたので、オレは脇に連れて行って、もう三十分ほど待ってもらうように頼んだ。

しかし、それは何の役にも立たなかった。誰も来なかったんだから。

五時頃、三台の車からなるオレたち一向は墓地に到着し、霧雨の中、門の脇に停車した。先頭が、雨に濡れて不気味に黒い霊柩車、次にリムジンに乗ったギャッツ氏と牧師とオレ、そして少ししてから、ギャッツビーのステーションワゴンに乗った四、五人の使用人とウェストエッグの郵便配達員が続いた。みんな肌までびしょ濡れになっていた。門をくぐって墓地に入ろうとした時、車が停車する音と、水しぶきをあげて湿った地面を踏みながら追いかけてくる足音が聞こえてきた。オレは振り返った。それは三ヶ月前のあの夜、図書館でギャッツビーの本を見て感嘆していたフクロウ眼鏡の男だったんだ。

あれから一度も会ったことがなかった。どうやって葬儀のことを知ったんだろう。彼の名前すら知らなかったのに。雨が分厚い眼鏡に降り注ぎ、彼はギャッツビーの墓の上に広げられた保護用のキャンバスが取り除かれるのを見ようと、眼鏡を外して水滴を拭いた。

その瞬間、ギャッツビーに想いを集中させようとしたけど、彼はすでにずっと遠くにおいて、デイジーがメッセージはおろか花の一本さえも送ってくれなかったことを何のわだかまりもなく思い返していた。誰かが「幸いなるかな、死して雨に打たれる者」とつぶやくのがぼんやり聞こえ、フクロウ眼鏡の男がよく響く声で「アーメン」と言った。

オレたちは雨の中を車に向かって足早にかけていった。フクロウ眼鏡が門のそばで話しかけてきた。

「ワシは家にはうかがえませんでした」と彼が言った。

「誰も来なかったんです」

「信じられん！」彼は声をあげた。

「ああ、何てことだ！ 昔は何百人も来てたのに」

眼鏡を外して、また外と中を拭いた。

「かわいそうなヤツじゃよ」と彼は言った。

オレの一番鮮明な思い出の一つは、寄宿していた高校から、そして後になっては大学から、クリスマスに西部に帰省する時のものだ。シカゴよりも先に行く連中は、十二月の夜六時に古くて薄暗いユニオン駅で合流する。シカゴの友人も数人混じっていて、休暇中の計画に夢中になってるもんだから、西に行く友だちにサヨナラを告げると急いで去って行く。ミス・誰それだかの女学校から帰ってきた女の子たちの毛皮のコート、息を凍らせてのおしゃべり、昔の知り合いに会っては頭上で手を振って「オードウェイズに行くの？ ヘルシーに行くの？ それともシュルツ？」と招待状を見せ合いながら、手袋をした手には緑色の細長いチケットがしっかり握られていたことが思い出されてくる。そして最後は、改札口そばの線路に停車しているシカゴ・ミルウォーキー・セントポール鉄道のくすんだ黄色い車両が、クリスマスそのもののように陽気に見えたことも。

列車が冬の夜に出発すると、本物の雪、オレたちの雪が両側に伸びて窓ガラスに当たりキラキラと輝き始め、ウィスコンシン州の小さな駅のぼんやりした明かりが通り過ぎる頃には、鋭い野生の厳しさが突然空気中に現れる。オレたちは夕食を終えて、冷たい

デッキを歩きながら深々とそれを吸い込むと、口では言わないが自分たちがこの地方の人間であることをはっきりと意識する。そして不思議な一時間を過ごすうちに、再び区別がつかないほどすっかり地方に溶け込んでしまうのだ。

それがオレの中西部だった。小麦でも、大草原でも、廃れた北欧移民の町でもなく、青春時代のスリル満点の帰省列車や、凍てつくような暗闇の中の街灯や、その鐘、雪の上に灯された窓から投げられるヒイラギのリースの影がオレの故郷だった。オレもまたその一部であり、ああした長い冬の感触を背負って少し生真面目で、また、数十年経っても住居が一家の姓で呼ばれる街の中でキャラウェイ邸で育ったことに少し優越感を感じていた。今、結局はこの物語が西部人のものであることがわかる。トムもギャッツビーもデイジーもジョーダンもそしてオレも、みんな西部出身だったのであり、おそらくは共通した何らかの欠点を持っていたため、東部の生活が微妙に合わなかったんだろう。

東部がオレを最も刺激した時でさえ、子供とごく高齢者を除いてゴシップの対象になってしまうオハイオ河より西の、退屈で、広大で、膨れ上がった街なんかより、東部の方がはるかに好ましく思えた時でさえ、オレから見ると東部はどこかいびつに見えた。

特にウェストエッグは、今でもオレの夢の中で奇怪な姿を現す。エル・グレコの描く夜の一場面のようなんだ。ありきたりでありながらもグロテスクな百軒ほどの家が、陰気に張り出した空と光沢のない月の下でしゃがみこんでいる。前景では、夜会服に身を包んだいかめしい四人の男が、担架をかついで歩道を歩いており、その上には白いイブニング・ドレスを着た酔っぱらいの女が横たわっている。だらりと脇にぶら下がった彼女の手には、冷たい宝石が輝きを放っている。男たちは重々しく家に入るのだが、入る家を間違った。でも、誰もその女の名前を知らないし、誰も気にすることもない。

ギャッツビーの死後、東部にはそういったゆがみ取りついていて、オレがいくら見直してみても消えなかった。落ち葉を焼く青い煙が漂い、吹く風に物干し綱に揺れる洗濯物がこぼる季節に・・・オレは家に帰ることに決めた。

帰る前にやるべきことが一つあった。気まずくて不愉快なことだから、放っておいた方が良かったかもしれない。でも、オレは物事をちゃんとしておきたかったし、義務的で無関心な海がオレのゴミを洗い流してくれるとは思っていなかった。オレはジョーダン・ベイカーに会いに行った。オレたちに起きたことや、その後のオレに起こったことなどを一生懸命話している間、彼女は大きな椅子に寝そべて身じろぎもせずに聞いていた。

彼女はゴルフ用の服装をしていたが、アゴが少し持ち上げられて、気だるげで、髪は秋の葉を思わせる黄金色で、顔は膝の上に置いた指なし手袋と同じ小麦色に染まっている様は、しゃれた挿絵のようだと思ったのを覚えている。オレが話し終わると、彼女からは何のコメントもなく、他の男性と婚約していると言われた。彼女がうなずくだけで結婚できそうな男は何人かいたにせよ、さすがにそれはないだろうと思ったが、とにかく驚いたふりをした。一瞬、自分は間違ったんだろうかと思ったが、すぐに考え直して、

別れを告げようと立ち上がった。

「それでも、結局、あなたがわたしをふったのよ」とジョーダンが突然言った。

「あなたが電話でわたしをふったんだもの。今はあなたのことなんかなんとも思っちゃいないけど、初めての経験だったし、しばらくはめまいがしてたのよ」

オレたちは握手をした。

「ああ、それに覚えてる？」彼女が付け加えた。「車の運転の話」

「さあ・・・正確には覚えてないけど」

「下手な運転手が安全でいられるのは、別の下手な運転手に会おうまでだって言ったわよね？ だから、わたしは別の下手な運転手に会っちゃったの、そうでしょ？ そんな間違っただけの思い込みをしたのはこっちの不注意だった。でも、あなたがもっと正直で素直な人だと思ってたのよ。それをあなたは密かに誇りにしてるとかってたし」

「オレは三十歳なんだ」と言ってやった。

「自分に嘘をついてそれを名誉と呼ぶには五つほど年をとりすぎている」

彼女は答えなかった。怒りと愛しさが半分ずつ入り乱れ、さらにまた心からすまなく思いながらオレは背中を向けた。

十月下旬のある日の午後、トム・ブキャナンの姿を見た。彼は五番街に沿ってオレの前を歩いていた。警戒心を持ったきびきびとした歩きで、邪魔を払い除けるように両手を体から少し離し、せわしなく動く目に合わせて首を抜け目なく左右に動かしていた。彼に追いつかないようにスピードを落とした矢先、彼が立ち止まり、肩を寄せて宝石店のウィンドウをのぞき始めた。そして不意にオレに気づき、手を差し出しながら引き返してきた。

「どうした、ニック？ オレと握手するのがイヤか？」

「そうさ、君のことをどう思っているか知っているんだろう」

「君は狂ってるよ、ニック」彼はすぐさま言った。「全くのキチガイざただ。一体どうしたというんだい？」

「トム」オレは詰問するように言った。

「あの日の午後、ウィルソンに何て言ったんだい？」

彼は何も言わずにじっとオレを見つめるだけで、ウィルソンの不明の時間に関するオレの推測は正しかったと思った。オレは背を向けようとしたが、彼が追いかけてきて腕をつかんだ。

「本当のことを話してやったんだ」と彼は言った。

「オレたちが出かける準備をしていた時、玄関の前にウィルソンが現れたんだ。居ないと伝えに人をやったら、無理やり二階に上がってこようとした。車の持ち主を教えなかったらオレを殺そうとしたほど狂ってやがった。家にいる間中ずっと、ポケットの中のリボルバーを握ってたんぜ・・・」

彼は威圧的に言葉を切った。

「もし、オレがウィルソンに言ったとしたらどうなんだい？ アイツは自業自得じゃないか。デイジーの時と同じように、君の目にも魅惑の砂を投げつけたんだろうが、アイツ

は無慈悲な男だ。まるで犬っコロでもひくようにマートルをひいて車を止めさえもしなかったんだから」

オレに言えることは何も無かった。ただそれはウソだという口に出せない真実を除いては。

「もしオレが全く苦しめてないというのなら・・・聞いてくれよ、あの部屋を手放そうとした時・・・犬のビスケットの箱が食器棚に置かれてたのを見て・・・オレは座り込んで赤ん坊のように泣いたよ。神に誓って、ひどく泣いた・・・」

彼を許すことも好きになることもできなかったけど、彼としては、自分がやったことが妥当だと思っているのがわかった。すべてに配慮が足りなくて、混乱していた。トムとデイジーは気を配ることができない連中だった・・・ヤツらは物でも人間でもめっちゃめっちゃにした後、金か、配慮の無さか、それとも他の何かか、とにかく二人を結びつけているモノに戻ってしまう。そして後は誰かに尻ぬぐいをさせようとするんだ・・・

彼とは握手をした。まるで子どもと話しているような気がして、しないとバカみたいだったからだ。それから彼は真珠のネックレスだかカフスポタンだかを買いに、宝石店に入っていった。こうしてオレの野暮な潔癖さは永遠に取り除かれたんだ。

オレが引っ越す時、ギャッツビーの家はまだ空き家のままだった。彼の芝生はオレのと同じくらい伸びていた。村のタクシー運転手の中には、ギャッツビー邸の門を過ぎると、しばらく車を停めて中を指差してみせるまで、料金を受け取ろうとしないヤツがいた。たぶん、事故の夜にデイジーとギャッツビーをイーストエッグまで送って行ったんだろう。その上、いろいろ話をでっち上げてるに違いない。そんな話は聞きたくなかったんで、電車を降りるとソイツを見ないようにしていた。

土曜日の夜はニューヨークで過ごすようにしていた。というのも、ギャッツビー邸でのきらびやかでまばゆいばかりのパーティーがあまりにも鮮明に焼きついていたので、かすかではあるが、彼の庭から音楽と笑い声が耳の中で絶えることがなく、車道からは車が行ったり来たりしているのが聞こえるような気がしてならなかったからだ。ある晩、そこでホントに車の音を聞き、ヘッドライトが彼の階段の前にピタリと止まるのを見た。でも、オレはわざわざ様子を見ようとはしなかった。おそらく、世界の果てまで行ってパーティーが終わったことを知らなかった最後の客なんだろう。

最後の晩に、トランクに荷物を詰め終わり、車を八百屋に売り払った後、オレはもう一度、あの大きいだけで何も生み出すことができなかった邸宅を見に行った。白い階段の上には、わんぱく坊主がレンガの破片で書いた卑猥な言葉が月明かりの中にはっきりと浮かび上がったので、石に沿って靴でゴシゴシこすって消してやった。それからぶらぶらと浜辺に降りて行って、砂の上にのびのびと寝そべった。

海沿いの邸宅は今ではほとんど閉まっていて、海峡を渡るフェリーのぼんやりと動く光以外には、ほとんど明かりらしい明かりは見えなかった。月が高くなるにつれ、意味を持たない家々が溶け出していき、次第にオランダ人の船乗りたちの目に、かつて花の

ように映った古い島のことが想い起こされてきた。新世界の初々しい緑の胸がオレの目にもありありと見えてきた。

ギャッツビー邸のために切り倒されてしまった、ここら辺一体の木々は、かつては、人類にとって最後にして最大の夢をささやいていたんだらう。魔法のような一瞬が訪れて、男は初めて目にしたこの大陸に息をのみ、人類史上最後になる、これ以上は驚くことができない光景を前にして、わかっていまいが、望んでいまいがお構いなしに、美的瞑想に引きずり込まれたんじゃないだらうか。

オレはそこに座りこんで、太古の見知らぬ世界に思いをはせていた。

デイジーの波止場の先に、緑の光を初めて見つけた時の、ギャッツビーの驚きはどんなだっただらう。長い長い旅路の果てにやっとこの青々としげる芝生にたどり着いて、彼の夢はつかみ損ねることなんか絶対に無いくらい、近くに見えたに違いない。でも、彼は自分の夢がすでに遠く後ろに逃げ去ってしまっていたことを知らなかった。ニューヨークなんか通り越して、どこか広々としてぼんやりした世界に、真っ暗な夜の下、この共和国に広がる暗くて果てしない原野のどこかに逃げてしまっていたんだ。

ギャッツビーは緑の光を信じてた。オレたちから年々遠ざかっていく眩しい未来を信じてた。そして、結局、オレたちの手からこぼれ落ちていってしまったけど、大丈夫だよ・・・明日はもっと早く走って、もっと遠くまで腕を伸ばすから・・・そしていつの日か、ある晴れた朝に・・・

だからオレたちは、流れに逆らう船のように、前へ前へとこぎ進んでいく。絶え間なく過去へと押し流されていきながら。

最後に

今、グレート・ギャツビーを読みながら考える

二〇二〇年の初頭から、新型コロナウイルスの感染が瞬く間に世界に拡散し、感染の広がりを抑えるために、人々は外出を制限され、そのため多くの人が職を失う結果になり、子供たちは学校に行けず、ウイルスという目に見えない敵によるストレスだけではなく、一九二九年の世界大恐慌を超える経済大停滞期に直面するのではという不安と向き合っている。そして、日本やオーストラリアなど感染の封じ込めに成功した国がある一方、ウイルスは日々死者を増やし続けている。

人々の国境を越えての往来が激減し、在宅ワークやオンライン会議などが広がり、人々が必要とするサービスが大きく変わることで、経済界の大変動は避けられない。これにより、この危機を乗り切る勝者と敗者の格差も大きく広がることだろう。コロナ禍前の経済レベルにいつ戻るのかという議論もあるが、小説「グレート・ギャツビー」でニックが言うように「過去は繰り返せない」のだ。新しい世界を受け入れ、試行錯誤しながら挑戦し続けていくしかない。

この小説の舞台である一九二二年からわずか七年後に起きたアメリカの株価大暴落で世界大恐慌が始まり、その結果一番に困窮したのはトムやデイジーのような裕福な家庭に生まれ育ち、自分の手で稼いだことのない旧世代だろう。そして、その中でたくましく生き抜いたのは、善悪はさておいて、生活力のためなら手段を選ばないギャツビーのような新世代と、ウイルソンのような庶民だろう。世界大恐慌は世界中を巻き込み、人類は不幸にも二度目の世界大戦に否応なしに巻き込まれていく。しかし、国民の大多数を占める庶民は、困難にぶち当たってもその度に知恵を絞り、活路を開き、生き抜くことで自分たちの国を支えてきた。

こうしてみると、小説「グレート・ギャツビー」は時代の大変革の前の一瞬を鋭く切り抜き、違う階級に属する人間の翻弄（ほんろう）を描くことで、次に来る破壊的な時代を示唆した重要な一書であると思う。

グレート・ギャツビーの背景には、階級差とそれによる差別がある。貧しい家庭に生まれたギャツビーは、その差別を乗り越えるために、自力で教養を身につけ、あらゆる手を使って富を築き上げ、自分が憧れる上流社会の女性を手に入れることで、自分

の夢を完結させようとした。そして、その夢に一途になる一方で、自分が求めた上流社会の女性、デイジーを本当に愛していることに気づいてしまい、彼女との愛に生きる喜びに目覚めたんだと思う。それが、八章での「自分が何をしたいのかを彼女に話す時の方がもっと幸せなのに、偉大なことを実際に成し遂げる意味なんてあるだろうか？」というギャッツビーの告白に表れている。また、デイジーが犯した罪を自分がかぶろうとする行為にも彼の愛が垣間見える。

デイジーは結婚して母となり、夫の不貞にあきれながらも、現実を見つめることに精一杯で独身の頃の夢を忘れてしまい、ギャッツビーの夢にはついていけなかったんだろう。それが七章で他人の結婚式の音楽を耳にして「わたしたちも年をとったわね。(中略)若かったら立ち上がって踊ってるのに」というデイジーのつぶやきでわかる。そしてロミオとジュリエットのように、二人は結ばれる運命にはなかった。

でも、ギャッツビーの夢が、出自には関係なく誰もが幸せになれる社会を築きたいというものであるならば、現在、特に大きな問題に人類が直面している時に、この物語が示唆を与えてくれるような気がする。そして人に寛容な社会こそギャッツビーが真剣に願ったものだと思う。そういう社会であって初めて、彼は自分が選んだ女性と幸せな人生を歩める可能性も出てきたわけだから。

「ギャッツビーは緑の光を信じてた。オレたちから年々遠ざかっていく眩しい未来を信じてた。そして、結局、オレたちの手からこぼれ落ちていってしまったけど、大丈夫だよ・・・明日はもっと早く走って、もっと遠くまで腕を伸ばすから・・・そしていつの日か、ある晴れた朝に・・・だからオレたちは、流れに逆らう船のように、前へ前へとこぎ進んでいく。絶え間なく過去へと押し流されていきながら」

ギャッツビーとニックから夢のバトンを引き継ごう。そして次の世代へ手渡していこう。

新型コロナウイルスが多くの人々の命を奪い、世界中の人々の生活を圧迫している今、苦しい時代だからこそ、いがみ合い、他人を非難することを繰り返しては、時代の教訓から何も学ばなかったことになる。優しい心、きれいな心を大切にしていこう。そして人をほめよう。いいところをお互いにほめあおう。目の前の一つひとつの問題に取り組んでいくことで、寛容な社会が一步一步近くなってくるという気がする。一人ひとりの個人や、一個一個の家庭が集まって初めて、社会は形成されていくものだから。

この翻訳を完成させるにあたり、たくさんの先生方のご著書を参考にさせていただきました。心から感謝申し上げます。

そして、長年放っておいたりとかなり不安定だったブログを支えてくださった方々、この文章を読んでくださった方々、本当にありがとうございます。ブログ記事を元にしてここまでなんとか形にできたのも、みなさまのおかげです。ギャッツビーにニックがいたことで救われたように、自分にもみなさまの支えが大きな希望となっています。

年表

これは訳者の推量が多分に入っており正確ではないが、物語を理解するのに役立つと思うのでここに載せておく。

- 一八七五年 ダン・コーディ 百万ドル長者になる
- 一九〇二年から一九〇七年 ダン・コーディ、ヨットの旅に出る
- 一九〇六年九月 ギャッツビー、ホップ・アロング・キャシディの本に基づき修行
ギャッツビー、十六歳で家出してノースダコタ州を離れ、スペリオル湖周辺に一年ほど住む
- 一九〇七年 ギャッツビー、ミネソタ州セント・オラフ大学に二週間在学した後、スペリオル湖に戻る
九月頃? ダン・コーディ、スペリオル湖でギャッツビー (十七歳) と出会い雇い入れる
- 一九一〇年 マートルとジョージ・ウイルソン、結婚
- 一九一二年まで コーディ、ギャッツビー と旅を続ける
- 一九一二年終わり頃? コーディ死亡
- 一九一四年 第一次世界大戦勃発、ギャッツビー従軍
- 一九一五年 ニック、イエール大学卒業後、従軍
- 一九一七年十月 デイジー十八歳、ジョーダン十六歳、ルイビルでギャッツビー (二十七歳) と出会う
- 一九一八年 ジョーダン、トーナメントに出始める
二月 デイジー、婚約及び解消
六月 ギャッツビー、第三師団、第七歩兵連隊から外れる
六月頃から ギャッツビー、五ヶ月間、イギリスのオックスフォード大学に滞在
六月 デイジー、トムと結婚し三か月の新婚旅行
八月 トム、ホテルメイドと浮気発覚
十一月 第一次世界大戦終結
十一月 ギャッツビー、除隊後ルイビルを訪れる
ギャッツビー、ウルフシェイムと出会い、彼の元で働き始める

一九一九年四月 デイジー女兒出産
四月頃? デイジー夫妻、フランスに一年間滞在
一九二〇年四月頃? デイジー夫妻、フランスから戻りシカゴに移る
一九二〇年から一九二一の間 トムが浮気をし、デイジー夫妻はシカゴからイーストエッグに移る
一九二一終わり頃? ギャッツビー、ウエストエッグに家を買う
一九二二年 春 ニック(二十九歳)、イーストエッグに移る
六月 ニック、デイジー宅を訪れる
七月頃? ニック、トムからマートルとその夫を紹介される
七月下旬 ニック、ギャッツビーの車でニューヨークに行く。デイジー、ギャッツビーと再会する
八月 デイジー再会から三週間後、トムとデイジーがギャッツビーのパーティーに参加する
ギャッツビー、デイジーにトムと別れるように頼む
デイジー、ギャッツビーとの関係を深める
九月 ニック、三十歳になる
デイジー(二十三歳)がマートルをひき、マートルの夫がギャッツビー(三十二歳)を殺す
翌日、デイジー夫妻はイーストエッグを離れる
十月 ニック、ジョーダンに別れを告げに行く
十月下旬 ニック、ニューヨークでトムに出会う
十月下旬から十一月 ニック、中西部の故郷に戻る
一九二四年 ニック(三十二歳)、回想録を書く

グレート・ギャッツビー

著 SoRa June

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
